

331-Ma89ㄣ



1200500737081

1
35



始



331
M189

松浦
要著

經濟學序論

生活社刊



1014

158

緒言

經濟の現象は吾々の身近の現象であり、之れを取扱ふ學問は萬人の學でなければならぬ。殊に敗戦と國家の再建との環境と任務との中に生きる吾々にとつて、經濟は最も重要な問題の一を絶えず投げかけて来る。政治と並んで其の知識に對する要求の現在盛なことは、まことに故ありと言はなければならぬ。

今夏は各學校の夏季休暇の長かつたことも一の原因であらうが、各所に講演會が盛行し斯學に關するものも少くなかつたやうである。元來出無精の著者ですら民主政治學會、日本鋼管青年部等の開催にかかるもので、經濟學の概要を講じたが何處でも聽講者諸君の態度は極めて熱心なものであつた。戦時中抑へて來た求知心の發露でもあり又現時書籍の拂底にも困ることは争ひ得ぬ所であらう。吾々學問研究を職としてゐる者として、之れに答へるのは社會的義務といはなければならぬ。會々著者の一講演に出席された出版關係の一友人から、斯學入門書の起稿につき懇切な慫慂を受けた。著者としては現在他に是非勵まなければならぬ仕事を控えてゐるのである

が、終に夏休二ヶ月の暇を之れに充てることとした。擧筆してみると勿論意にみたい部分も少からずある。最後の章が少しく専門的に深入りし過ぎてゐるのは其の一であるが、それでも著者の採る社會現象に對する見方は一貫して表はされ得たかと思ふ。

尙本書に於ては斯學に深い關係のある學者の名も殆ど總て擧げず、讀者の注意を専ら事柄の理解に向けられるやう注意した。例へばスミスを始めメンガーの名すら出さず、學派の名を以て之等に代へておいた。併し夫等について關心をもたれる讀者は本書讀了後他の著書について見られれば足りると思ふ。

以上本書起稿の所以と目的とを記して緒言とする。

昭和二十一年九月

目 次

第一章 一般生活と經濟	一
一、生活と經濟との關係	一
二、生活の組立て	四
三、社會と歴史とへの個人の働き	九
四、經濟の意義	二一
五、經濟の組立て(一)	二五
六、經濟の組立て(二)	二五
第二章 價值と價格	二〇

一、價値の意味	三〇
二、勞働價値説と生産費説	三三
三、埃太利學説	三五
四、高次財貨・補完財貨の價値	四〇
五、價値と生活の組立てとの關係	四四
六、價格	四六
七、價格の性格	五〇
八、價格の統制	五三
九、價格決定原因としての需給	五七
一〇、價格と價値との關係	六〇
一、貨幣とは何か	六九
第二章 貨幣と物價	七〇

二、貨幣發達の概略	七〇
三、貨幣の本質	七六
四、物價の意味	七八
五、貨幣數量説	八〇
六、景氣に於ける貨幣と物價	八四
七、敗戦インフレーションの特徴	八七
八、物價と價格群	九一
第四章 生産	一〇〇
一、生産と分配の地位と生産の意味	一〇〇
二、自然	一〇一
三、勞働	一〇四
四、資本	一〇七

五、企 業	二二
六、生産の原理	二三
七、營利生産	二七
八、企業集中	二三
九、欲求充足生産	二七

第五章 分 配

一、分配の意義と組立て	二三
二、地 代	二六
三、利 子	一五
四、賃 銀	一五〇
五、利 潤	一六三

(マルクス剰餘價值説の解説)

第一章 一般生活と經濟

一、生活と經濟との關係

經濟といふことを考へるに當つて、吾々は先づ生活といふことから考へ始めるのが適當だと思ふ。學問上經濟の意義がどう定義されようとも、假令正確ではなくも、何が經濟であるかはお互にどうにか知り合つてゐる所であり、生活上の現象だといふことには異議なきものだからである。最も端的にいへば衣食住の生活とか、貨幣を取得したり夫れを使用する生活とかいふものが、經濟と呼ばれる現象の中心をなしてゐるといふことには疑ひがない。生活にはかうした謂はば物質的な方面許りでなく、政治的・宗教的・道徳的方面や趣味・研究の方面などが、あることは確かであるが、吾々人間が先づ第一に身體的な方面で生きてゆかなければならないことも明かである。之れは政治・宗教・道徳等いはゆる精神的な方面を第二位において、物質的な生活方面を之等よりも重要だといふ譯ではないが、生活がまづ食ふこと着ること住むことから始まらなければ

一、生活と經濟との關係

ばならないことは、終戦後極端な物資不足に追ひ込まれたお互が百も承知のことである。衣食足つて禮節を知るといふ言葉は屢々聞かれるが、之れがよく穿つてゐるとさへ思はれる現實に吾々は直面させられてゐる。加ふるに精神的な生活方面すら少からず物質的方面によつて制限されることは、日常經驗の示す通りである。政治上或る信念をいだいてゐる者が、その思想を廣く公衆に訴へて理想とする政治の實現を願ふといふことは、當然豫期される所であるが、かうした精神的な活動も他面に於て少からぬ費用を必要とし、その點に於ては無論經濟に觸れざるを得ない。近い話が自分の所信を披瀝するための政治演説を行ふには、その開催を知らせるための貼札や會場費を始め相當の經費がかかる。之れなくしては目的を達することは出来ない。又經濟方面から最も縁の遠いやうに思はれる趣味生活にしても、全く費用をかけずに出来ることは殆どない。自然の興へるものを只で觀賞する例として、月見といふ古風な風流を考へてみよう。金をかけたからとて明月は必ずしも見られないし、又無一物で往來に立つてゐても姿を見せる月は一天にかかゝる。眞に月明の觀賞には物質生活は無縁のやうに思はれる。芭蕉のやうに『池をめぐりて夜もすがら』といふやうな月見をしてゐれば、經濟の心勞はいらない、けれども人情として茶も啜らす盃も手にせず、池の周圍をまはつてゐるよりも、假令ささやかながらも之等嗜好品が伴へば、

月見の興は一段と深いのが常である。河の土手を歩いて月を賞するよりも、江上に舟を浮べて相當の嗜好品でも揃へば、其方が無論好ましい。現に『池』の名句を吐いた芭蕉にすら『川舟やよい茶よい酒よい月夜』の句がある。かうした費用の點は現在の生活を顧ると、何の方面にもついて廻るものであつて、あらゆる生活は經濟に結び付かざるを得ない。そして經濟の手段である物資が缺乏すればするほど、經濟面は生活に於て強く感ぜられ、其生活全體を蔽ふほど大寫しに浮出して來る。生活とは經濟のこと、衣食住を營んでゆくことと一般に考へられ易いほど重要なものとなつて來、果ては夜が明けると日が暮れるまで食生活を配慮する有様にまでなつて終う。人間生活全體として之れでは品もなく、深みもない眞に情けない墮落に相違ないが、愈々食へるか食へないかの問題が切實になつて來ると、經濟も其處まで重要なものとなつて、生活全體を其の傘下に收めて終ふと云つても過言ではない。さうなれば經濟と生活とは同一不二のものとなつて終ふ。併し其處までゆかずとも、經濟が生活の重要方面であることは、各人の日常厭々するほど體驗してゐる所である。そこで直接經濟の組立てに考へを進めるよりも、經濟を重要な一面として包含してゐる生活が、どのやうな構造をもつてゐるかについて、吾々は少しく考へておき度

二、生活の組立て

先づ個人の生活をとつて考察してみると、其の組立ては上述したやうに(一)種々の側面を含んでゐると共に、(二)同時代的に社會生活を営む一員として、他人の生活と直接間接の結付きをもつてゐること、(三)或る社會は現在存在する許りでなく、將來への存続を包含し又過去の存在のうちに包含されてゐたものであるから、此の歴史的な存続は現在の個人の生活にも作用してゐること、の三つの組立てが見られる。第一の個人の生活が種々の面をもつてゐることは、誰れでも自分の日常を振り返つてみれば容易に發見する所である。一人の青年の生活を例にとつてみれば、學校へ通學したり讀書したりしてゐるとき彼れは研究生生活をしてゐるのであり、一日三回の食事をし季節の着物を纏ひ、下宿の一室を借りて住むといふ型通りの衣食住の生活をし、又學生生活をする者として親からの仕送りを得たり或は自活するものとして勤務先から給料を得たり、更に之等の収入を萬般の支拂に振宛てるとき、彼れは勿論經濟生活を營んでゐる。彼れは恐らく趣味生活もするに相違ない。映畫やスポーツを觀、散策や登山若しくは釣魚を楽しみ、さもなければ創作や各種の詩又は繪畫に藝術の世界を愛好するといつたやうな生活面が考へられる。それ

と共に親兄弟から友人に至る人間的な情愛生活が感情に満足を與へる側面もある。かう數へあげれば容易に盡し難いほど各方面の生活に携はることから、一人の青年の生活が組立てられてゐるのである。それは決して一方面に許り偏してゆけるものではない。そして第二の生活組立ての面である社會的な結付きを考へてみると、以上の各生活面はそれぞれ社會的な結付きをもつてゐることを見出さざるを得ないのである。

即ち吾々は右に第一に青年の研究生生活をあげたが、通學する者ならば學校の構成が云ふ迄もなく社會的なものであるし、獨り讀書する場合にも書籍の内容からして著者單獨の思想のみが盛られてゐるといふことはなく、其の時代と其の社會とに交渉をもたないものはない。書物の入手については書店から購入するならばその小賣業者との結付きが先づあり、間接には書物が小賣業者の手に渡るまでの社會的關聯が當然豫想される。經濟の方面で食事をする上に、下宿生活者として外食に頼るならば、外食券食堂との結付きがなければならず、下宿で給食を得るならば、現在の食料大部分の配給生活にあつては、配給状態が大體食事の内容を決定するものであるから、配給状態といふ社會關係との結付きが其の内容を定めることになる。又蔬菜や其他の自由販賣品が副食物として加へられるならば、第一に賄者の選擇と調理方法とが夫れを決定することとなるの

で、此の青年の食事は細くいへば、その寄寓してゐる家の主婦の嗜好にさへ影響されざるを得ない。況やその主婦の購入先が市場であるならば、其の市場に於ける商人の品物の供給状態、又これを決定する商人の仕入先の状態等が否應なく下宿人である青年の食事内容に影響をもつこととなる。又この青年が食事の補充として近縣の自宅から物品を運搬し得るか否か、運搬し得る場合にも交通が餘りに雑踏して、並大抵では運ぶ氣になれないといふやうなこともある。之れは交通状態といふ社會的な事柄が、此の青年の食事内容に制限を與へるものと言はなければならぬ。其他衣料にせよ、住居にせよ更に収入の額にせよ、一として此の青年が他との交渉なく自分だけで夫等を手し得るものはない。他との交渉とは言ふ迄もなく社會的な結付きである。

最後に第三の歴史的な時代への關聯についても同様の關係は人間生活のある所何處にも容易に指摘することが出来る。昨日なくして今日の社會はなく、五年以前、十年以前、三十年以前の社會なくして現代の社會はない。それは一日々々と連続してゐるのであるから、社會生活の様式も内容も亦連續せざるを得ない。勿論其間に徐々の變化はあるが、變化しながらも連續的に進んでゆくのである。食事の内容にしても自分達の祖父母の時代には獸肉類を材料とする料理は少かつたと思はれる。更に一代を溯れば牛肉等は寧ろ嫌はれたといふ話は屢々耳にしてゐる所である。

併しそれなら吾々の祖先は全然獸肉を食べなかつたかといふとさうではない。狩獵の獲物として鹿・猪・兎などの肉は珍味として歓迎してゐたに違ひない。此點に於ては内容上よりも形の變化が、或る抵抗を伴ひながら食生活の上に變化を來してきたといふべきである。併し吾々の食物内容に祖先傳來のものは遙かに多い。米麥を常食として來た生活は、夫等の缺乏から入手極めて困難となつた場合にすら、容易に改められようとはしない。一の執念といつてもよいほど強い執着を以て之れを要求してゐる。其他魚肉に對する愛好や調理の仕方まで、少からず傳來の方法が、其のまま受取られてゐるのである。吾々の食物は宛も歴史的に決定されてゐるやうに見える。道徳や趣味の世界にしても、吾々の生活がその内部でしか營まれ得ず、それから逸脱することが出來ないやうな歴史の型を認めずには、其の内容を了解することは出來ない。吾々は社會のうちに生れ出で、其の内に生活し、社會は歴史の連續のうちに繼續的にあるのである。吾々の生活が社會的の連繫から脱し得ず、歴史的な型から規定を受けることは、かくて當然なこととなつて來る。だから時代と社會とから逸脱して生活出来る者があれば、それは生活上一通りならぬ無理を押し通すことになるから、精神的にも身體的にも非凡な力量の人でなければ、到底企て得る所ではない。その意味に於て自分は旅に漂泊し、人氣なき閑寂の地に庵を結んだ西行の生活を、大變な

力量を包含したものと考へ、その非凡さに常に深い敬意を拂つてゐる。「心なき身にも哀れは知られけり」と歌つた鳴立澤の庵居の跡といふのは、今も大磯の町はづれに残つてゐる。鎌倉時代にあつては、其處は恐らく漁村からも隔り、蘆荻生茂つた濱邊に波の音近く、一條の小川に潮も差し引きした寂寥たる處であつたであらう。有爲轉變の世相と人情の葛藤とに如何に愛想をつかしたとしても、出来るだけ人との交渉をたち切つた生活に身を置くことは容易な業ではない。併し人の世に人を離れて住まうとした西行の超人間的な生活力も、歌に素懷を述べるといふ日本的な傳統のなかに生活することから脱することは出来なかつたと云はなければならぬ。又蘆荻の間に庵を結んで人と出来るだけ離れ住むとしても、自力で食事其他一切の日常生活を営むことは出来る筈はない。西行が自ら鋏をとつて耕し、釣を垂れて魚を捉へたといふことも知られてゐないやうである。それ等は他人から即ち社會から何かの關係で得來つたのであり、穀物にしても生食したのではなく、世間並にたいて食べたものと思はれる。して見れば西行の生活も親疎の差はあつても、社會と歴史のなかにあつて營まれたと考へてよいわけである。吾々が此處で西行の生活を種々に想像してみたのは、勿論孤獨に徹したと言ひ得る偉人の生活すらも、矢張り歴史と社會から脱し切れるものではなく、そのうちに夫等と交渉をもちながら、營まれる他に道がないといふことを考へ度かつたからである。西行に於て既に然り。「寂」と「忙」の藝術家にして又思想家として代表的な芭蕉をとつてみれば、その忙しい旅にも大概同行が誌されてゐる。「奥の細道」には門人曾良の同道するあり、「野曝紀行」には千里といふ友の伴ふあり、「芳野紀行」にあつては蕉翁傳に著しい杜國の終始同行、旅情のために「寂」を失ふかと危まれるが如きものもある。「寂」と「忙」の俳聖も人との交渉のうちに従つて時代と社會とのうちに一生を終つたといふことが出来る。

三、社會と歴史とへの個人の働き

以上のやうに見てくると、個人の生活は夫れが營まれてゐる社會と時代の型から一步も出られず、夫等から與へられてゐるままの形式と内容とを受取るだけの消極的なものとなるやうに思はれる。寔に生活は社會と時代とから型と内容とを受取る。けれども此の受容は單純な消極的行爲と意欲とから許りでなされるものではない。假令形式と内容とが外部から規定されてゐる場合にも、それに適應する生活を營んでゆくことは、生命ある者の奥底から流れ出す自己保存の強い意欲と、近い關係にある者の生活をも支へてやりたい愛情から流瀝する願ひとに基き、之れを満さ

うとする積極的な努力を必要とする。併しかうして社會と時代とから限定された形式と内容との生活を営むことは、何も新機軸を出すといふやうなものではなく、平凡に人並に生活するといふだけのことである。而も其の平凡と人並にも、吾々は積極的な努力を拂はなければならないのである。だからこそ如何なる職業にあつても、青年が自活するに至つた場合、之れで「一人前」になつたといふ喜びを感じるのである。更に妻を迎へ家庭を作るに至つては「一人前」たるの満足は確立される。けれども夫れは何も偉大なことを成就した譯ではない。それでゐながら満足を感じ得るのは、一にはその程度の生活維持すら積極的な努力が必要であり、かかる自分の努力が効果を收めた爲めでなければならぬ。唯消極的に受身に許りなつてゐたのでは、此の満足は起らないに違ひない。然るにこのやうに世間並の形式と内容であつても、各個人が生活を営んでゆくといふことは、社會的に與へられた生活を社會的なものとして保持してゆくといふことである。現代の社會に普通な生活といふのは、其の社會に住む各人が通有に營む生活であればこそ存在するのである。だから吾々はお互に努力して普通の生活を営むことに依て、その時代に於ける社會の型と内容とを保持し保存してゐることになる。之れは既に各個人の働きの結果であり、従つて各時代の社會の生活を作つてゐるのは、各人の働きである。各人は社會のうちに没して終ふ面

は、社會の生活型と内容とを課されてゐるが、此の自分を規定する社會の生活型と内容とを作つてゆく者なのである。作る者は同時に作られる者であり、作られる者は又作る者であると謂はれるのは、個人の生活と夫れを包含する社會生活との關係を考へる場合、適言と云はなければならぬ。まして個人の生活は常に外部から規定された通りを遵奉し、世間並の範圍で満足し續けてゆくとは限らないのである。形式に於ても内容に於ても一段の向上を望み、その實現を企てることは日常の經驗に徴して明かな所である。社會に普通な型から出ようとする個人の創造活動は、休む時がないのである。社會生活の型や内容が變化し進歩して行くのは、個人生活にかかる努力が普及してゆくからである。この點では個人は愈々積極的に社會生活の型や内容を改良して行く動力となる。併し日常生活の分野にあつては、少數者のかかる生活革新は容易に普及するに至り悪いものであつて、社會生活の型や内容が急激に變革し得ない理は必からず此處に求められる。上に繰返し述べた個人生活が社會生活と絡み合つてゐること、他人の生活振りと離れて成り立ち得ないことは、之れに十分な説明を與へてゐると思ふ。

四、經濟の意義

經濟について吾々は詳細な規定を行はずに、誰れしものやうなことを指して經濟といふか承知してゐるといふ程度で、此の概念を使用して來た。學問上嚴密な考察を施す場合にはそれでは事足りぬものであるが、大體を擱んで考へてゆくには濟むのである。例へばインフレは經濟問題だといふことは誰れしも知つてゐる。之れを趣味問題だとか道德問題だとか考へる者はない。而も専門の學問に於けるやうに、經濟とは何を意味するかを豫め決定してゐる譯ではないのである。以上に生活一般について考へ、經濟はその物質的方面だといつて來たのも亦頗る粗雑な規定でしかない。けれども斯うしておくことに依て、經濟はその屬する分野としての生活の内部で、相當正確に考へられて來たと思はれる。其處で今度は今少し嚴密に經濟の意味を考へ直しておくのが適當となつて來たのである。經濟學の教科書では普通經濟は吾々の經濟活動とか經濟行爲とか呼ばれるものが絡み合つて、社會的に作り上げる組立て即ち組織だと言はれてゐる。吾々の種々な欲求を充たす手段のうち物質的なものを經濟學上「財貨」と呼んで居り、之れは自然には欲求に十分應じ得るほど多量に存在しないから、その獲得のために吾々は何か犠牲を拂つたり努力をしたりしなければならぬ。此の財貨獲得の活動なり行爲なりが經濟活動とか經濟行爲とか呼ばれ、此の活動や行爲が互に關係し合つて一の組立てが出来ると。それが經濟と稱せられるものだ

といふのである。併しそれだけでは直ちに明瞭にはなり得ないと思はれるから、財貨と稱する吾々の欲求充足手段が欲求量だけ存在せず、ために夫れを獲得する活動が努力や犠牲を要する點を説明し、次で經濟活動が互に絡み合つて組立てが出来るといふ點を解説したいと思ふ。

吾々の欲求を充たす手段には種々雑多なものがある。其の中には精神的なものも無論重要な地位を占めてゐる。例へば前に述べた孤獨生活に徹しようとする場合の最も深い困難は、他人の同情や同感に對する強い欲求が吾々にあるからである。唯他人と一緒にゐるだけでも、場合によつては恐るべき寂寞感から脱し得ることもあるが、此の場合他人が自分にとつて何も交渉をもたないのでは、寂寥を醫し難いのが普通である。海外への長期旅行者殊に我が國人の單獨留學生等の場合に、郷愁に悩む者の少くない原因は、巷間・劇場・料理店等に他人と共に居るとしても、見ず知らずの他國人として遇され、且つ言葉さへ疎には通じないものとなると、人間らしい交渉は絶たれ、群集のなかに居りながら生活は孤獨から脱し得ないことにある。他人と共に居る意味は少くも同感をもち合ふことにある。して見ると、吾々の生命の奥底から流出して來る強い欲求の一つに、他人の同感や同情があることは争はれない事實である。更に近親者との交渉への欲求は一層強いものがある。併しかかる精神的なものは、假令夫れを吾々の欲求充足の手段と見ること

が出来るとしても、經濟活動の對象となり得ないことは、何人も認める所であらう。嚴密な言葉ではないが、重要點を捉へる上には役に立つ物質的手段を以て、財貨の特徴の一とした理由は此處にある。又財貨として經濟上取扱ふものが、吾々の欲求量に不足してゐることが必要だと云つたが、單に欲求充足の手段といふだけでは、經濟上問題となり得ないものをも包含するほど廣くなるからである。經濟學の教科書に繰返し引例されてゐるやうに大氣中の空氣だとか、河川を流れる水だとかいふものは、勿論吾々の欲求充足の手段になることが出来る。出来る所ではなく萬一空氣や水が缺乏したら、夫等に對する欲求はどれほど強く、其の獲得のためには非常な犠牲や努力が拂はれるであらうけれども實際には幸にして之等は、吾々が欲求するよりも多量に與へられてゐる。之等を獲得するに特に犠牲や努力が拂はれないのは、かく多量に存在する爲めである。之れに對し欲求充足の手段であつて、分量の不足してゐるものについては夫れを作るとか他人から譲つて貰ふとか又其他の犠牲を拂ふとかしなければならぬ。天國や極樂淨土にあつては、かうした苦勞なくして欲求が充足されるのだから、其處には經濟活動といふものはない。それだから經濟活動があるといふことは、反面からいへば、地上に於て吾々が貧乏だといふことを意味してゐる。貧乏とは元來欲求充足の手段が乏しいことに他ならない。此の貧乏状態に生れつ

いた吾々人類が、何とかして夫れに打克たうと努力する所に、經濟活動といふものが生ずるのである。して見ると經濟とか經濟活動とかいふことを考へなければならぬといふことが、既に地上人間の悲運的出發點をなしてゐるので、それ等に關する事柄を研究する經濟學といふものは、本來有り難い學問ではないことになる。唯貧乏に生れついた人間として已むを得ない所といはれなければならない。

五、經濟の組立て(一)

經濟が經濟活動から出來上る組立て即ち組織だといふことは、如何なることであるか。經濟活動も恰度一般活動について考へたやうに、他人から孤立して成立し得るものではなく、常に直接間接何等かの點で夫れに結付いてゐるものである。一般生活從つて活動について例とした一青年の場合に又戻つてみよう。今彼れが會社に勤めて收入を得、そのうちから下宿料を支拂ふとする。これは何の面に於ても經濟活動である。先づ彼れは給料を得るために通勤し其日々の仕事をしする。此點に於て彼れが直接關係をもつものは會社であるが、仕事をするといふ勤勞を彼れは會社に賣り、會社は給料といふ代價を支拂つて彼れの勤勞を買ふ。此の青年にとつて給料といふ

貨幣は、勿論販賣される總ての財貨に變り得るものであるから、財貨と等しくみられるので、其の財貨代表物、やがて變つて財貨となるものを得るために、勤勞なる努力を拂ふのである。之れは經濟活動に相違ない、此の場合上來述べて來た所で疑問となり得るのは、その對手方である會社にとつて、他人の勤勞を得るのが經濟活動をなすかどうかといふ點である。經濟活動は財貨獲得の活動であり、財貨とは物的な欲求充足の手段だと言つて來たのであるから、それでは此の青年の勤勞は物的手段かと問はざるを得ないからである。この點については後に再び取扱ふ場所もあるから、此處で詳しく説くことは避けておいて差支へないが、給料とか賃銀とかに對して、勤勞を賣買する所謂賃銀勞働制度が行はれてゐる場合には、勤勞といふ人間の働きは、物的な財貨と等しく見られるのである。元より勤勞は勤勞者の手足の勞働と頭腦の働きとの結合したものであつて、手足の勞働だけならば或は之れを物質的といふのが適當かも知れないが、頭腦即ち精神的な働きが伴つてゐるので、之れを物的といふのは穩かでない。どのやうな勞働でも必ず手足と頭腦とが一緒に働いてゐるのである。けれども此のやうな勤勞は、賃銀に對して提供される制度の下にあつては、他の物的な財貨と同じものと視られて、取引されるのである。このやうな制度が行はれる場合の經濟上の取扱ひがさうなつて來てゐるのである。さう考へておかなければ、賃銀

や給料を支拂つて勤勞を獲得する會社の活動は、經濟上取扱ひ得ないこととなる。勤勞を財貨として取扱ふことが斯く認められるとすると、その提供者である青年と需要者である會社との間に經濟活動の結付きが出來上る。所で此の青年と會社との各側の其他の關係を尋ねてゆくと、先づ青年の側では會社から得た給料の一部を、右に云つたやうに下宿料に宛てることに依て、下宿屋との間に經濟活動の結付きが出來、給料の残部で雑誌を買ひ映畫の入場券を支拂ひ、交通費と煙草の配給に振りあてるとする。その直接關係は雑誌購入では既に述べたやうに書籍販賣者と、映畫觀賞では映畫館の經營と、煙草の配給ではその小賣人と經濟活動の結付きが出來る。併しかかる經濟活動の交渉を間接關係まで追つて行けば、意外な所まで關聯は連つてゐる。例へば食事關係では、或る漁村で魚の水揚げを手傳つてゐる可憐な娘さんの働きが、其後の經路を通つて此の青年の經濟活動と結付いてゐるのかも知れないし、又農村で好々爺然たる一老農の努力が供出を通して此の青年の生活と結付いてゐるのかも知れない。煙草については美しい風光にかまれた或る地方の專賣局工場での經濟活動——その中には配給を受けてゐる青年と同年配の事務員の仕事も含まれてゐよう——が、映畫館の經營については、其の統轄者たる重役連中の行爲が、又その經營と金融關係で結付いてゐる大銀行の經營活動が、最後に雑誌については編輯作業は勿論、

或る寄稿者の郊外に於ける靜かな書齋での原稿執筆がといふ風に、想像を逞しくしても追ひ切れないほどの人々の經濟活動の結びつきがあるのである。同様にして青年から勤勞を買ふ會社の經營上の結合は又他の方面に向つて無數の結合を形作つてゐる。その關係は網の目がそれからそれと連つてゐるものやうだと云へよう。そして此の經濟活動の結びついてゐる關係を全體として考へてみれば、それは之等無數の活動から出來上つてゐる一の組立て即ち組織となる。經濟と呼ばれるのは此のやうな組織なのである。だから經濟と呼ばれる組織は、その中に無數の經濟活動を包含し、それ等の經濟活動が此の組織内で經濟上の欲求を充たしてゆくやうな組立てである。従て個々の經濟活動を種類によつて一括して考へるならば、經濟内で要せられる農産物も魚類も、製造工業品も先づその内部で作られ、その内部の欲求を充たしてゆく社會の組織だと云つて差支へない。此の場合その社會の生産と欲求への充當とを、國家の立場から意識的に適合させようとする場合には、その社會の經濟は統制されるといふし、又意識的な斯かる統制なしに生産と欲求充足とが適合してゆく組立てになつてゐれば、夫れを自由主義經濟と呼ぶ。この二の經濟制度については後に又説明する場所があるから、詳細は其處に譲ることとするが、經濟といふ社會の組立てが何故に右のやうな複雑した關聯となつてゐるかを明かにする爲めには、經濟の社會的組織の

成立について説明を加へておかなければならない。それは一般生活について述べた考へ方を此處にも用ひるものである。

一般生活に於ては、吾々の生活が種々の側面をもち、それ等の生活を営むために各人は社會的型と内容とを守ると共に、その維持發展に能動的に携はり且つ最も根源的には孤獨生活を営み得ない人間の深い欲求がその組織に基礎を與へてゐると述べた。孤獨生活への恐怖は、本能的に深く生命に其の根源をもつものであり、生活の社會的な型と内容とを受取ると共に與へる關係は、社會以外に生れ出ることの出來ない人間の宿命である。之等に較べると經濟社會の組立てと、其の一員としての個人の地位や役割はさほどの深みをもつてゐない。何となれば個人の經濟活動が經濟といふ社會を構成する絡み合ひは、個人の力では出來ない仕事を成就するのに協力するといふ方面もあるけれども、主には個人の仕事が専門化し、生活の欲求全部に應ずるには、他人の専門化した仕事の結果を得なければならぬといふ所謂分業に原因し、此の分業は歴史的に發達したものであるから、その發達の幼稚な時代には各人は相當の程度まで他人の活動との絡み合ひなしに、生活を営み得たからである。此點から見れば、一般生活に於ける社會生活の組立てと其の内部に於ける個人生活の地位とは、人間生活に本來的なもの（生存的必然）と呼び得るに對

し、經濟社會の組立てと夫れに於ける個人の經濟活動との結付きは、經濟の發達に由來するもの（歴史的必然）と云ふのが當つてゐると思はれる。勿論既に發達してゐる經濟社會に生れ出た吾吾にとつては、分業が歴史的發達の現象であらうと、もつと本源的なものであらうとは問題をなさず、吾々として經濟活動を營んでゆく上に、どうしても採用しなくてはならぬ制度であることには相違ない。全然分業に頼ることなしに營む經濟生活は、完全な意味に於ける自給自足の經濟といふものを成すのであるが、之れは現在のお互として企て得べくもない。經濟上自給自足の生活に最も近付き得るものと考へられるのは、普通農業と漁業のやうな食料を自ら生産する職業に従事するものであらう。現時のやうな物資缺乏、就中日々の生活が脅されてゐる面は食料不足であるが、食料の自家生産から遠い關聯にある都會生活者からみると、農村や漁村ならば何はなくとも自家生産だけで日々の食料は得られるから、生活上一番の強味をもつてゐると考へられる。直接日々の生活といふ點からみれば、都會生活者のかうした感じは決して間違つてゐない。死にもの狂ひの雑踏を極める交通機關に頼つて頑強でもない都會の婦女子が、所謂買出しに出掛ける品物は、農・漁村にあつては自分達で生産し、そのうちから自家用に消費し得るものであるから自給自足生活の強味をもつてゐるけれども、少し長時間を通して見れば、農漁村にしたところが、

現在決して自給自足生活の安全を享受してゐる譯ではない。肥料とか農具、漁網とか漁船といつたやうな生産の用具は消耗破損せざるを得ず、之等は何れも他人の生産に頼らなければならぬのである。成程、或る程度まで農具や漁具の小規模なものについては自分でも修理が出来るし、肥料にしても家畜の排泄物とか堆肥を以て補ふことも出来る。けれどもそれに限度のあることは何人も知る所であつて、この限度を超えれば收穫は甚しく低下せざるを得ない。農・漁村のやうな自家生産で差當り生活し得る者ですら、現在の經濟生活にあつては他の専門業者に頼らなければ、その生活を繼續的に營んでゆくことは出来ない。まして商工業その他の専門業に従事する者、官廳や會社に勤務する者の生活に至つては、經濟生活は一から十まで他に頼らなければ營むことが出来ないのである。吾々は又會社に勤務してゐる一青年の立場に返つて見よう。彼れはその給料を得ることに依て、販賣される諸財貨に變り得る貨幣を取得するけれども、その他の欲求する財貨は何一つ自分では生産しない。そして取得した貨幣が諸財貨に變るといふのは、勿論蝸が蝶に變るやうに貨幣が自己變化をする譯ではなく、財貨を提供する者をまつて初て變り得るのであるから、貨幣をもち之れを財貨にかへるといふことは、夫れ自身財貨提供者に依存してゐるといふことである。まことに彼れは日常食用とする米麥の一粒も生産しない。嗜む煙草の葉一枚

も培養したことはない。吾々が繰返し例に引いてゐる此の青年は、恐らく未婚者であるから下宿生活をしてゐるのである。してみれば近時都會に盛行する家庭菜園も耕作する機會はないであらう。彼れの生産する所は總て貨幣の形に於ける給料なのであるから、その給料を使用する方面悉くに於て、彼れは他人の經濟活動に頼つてゐるのである。そして又かうした勤務生活を専門とすることが、彼れの育つて來た環境や職業選擇の諸理由に最もよく適合してゐたのであらう。して見れば經濟生活を管む上にかうした道をとつた彼れには、其の過去の生活からみれば夫れは或る程度まで必然であつたのである。少くも彼れが此の生活の道を選んだのは、彼れにとつて自然な無理のない所であつたのであらう。それ故に分業が既に發達した社會に生れ出た吾々にとつては、一の専門業を以て生活を立ててゆくことは、避け難い所とさへ見える。そして専門業を職業とすることは、勿論經濟といふ社會の組立ての關聯のうちのみ生きることである。けれども分業は既に云つたやうに社會生活内に於て歴史的に發達して來たもので、發達した状態となるに及んで夫れに應じなければ經濟活動が營み得ないといふ必然關係を吾々に強いるものである。さればこそ經濟生活を出來るだけ單純な場合に於けるものとして、その形成を容易に擱まうとする要求から、經濟學者は從來屢々ロビンソン・クルーソーの孤島生活を例として説明を簡單化しよう

と試みた。かかる生活が全く想像上のもので、現實の現象を説明したり考へたりする上に、却て有害なものであることは言ふまでもないが、若しかかる自給自足の經濟生活が可能であるならば、吾々の研究は頗る單純なものとされ得る筈である。併し實際の生活は程度の差こそあれ、分業によつて専門の範圍をもち、それ等が組合はされて經濟生活が可能となり、又經濟といふ社會の組立てが出來たのであるから、吾々は經濟社會の組立ては、先づ之れによつて各人の仕事が専門化し狭い範圍に限られ、他の範圍の活動についてはそれを専門としてゐる者の仕事に頼るといふ相互依頼の關係に基くことを知るのである。

尤も一概に分業といつても夫れには職業上の分業と、職業としては同一業に屬するが其の内部での仕事の上の分業即ち技術的分業と呼び得るものとは、區別して考へるのが適當である。上來吾々が分業とか仕事の専門化等として取扱つて來たものは、職業上の分業であつた。之れにあつては大體經濟活動の一種類が、獨立した活動部門となると云へるが、經濟活動の種類分けをする標準は、生産の場合には生産物の種類、商業のやうに既製品を取扱ふに止まる場合には、その取扱ひ商品の種類においても大過ない。即ち、紡績業は紡績糸を生産し、機織業は糸を使つて織物を生産し、窯業は陶磁器を生産するといつたやうに、一種の生産物を、夫れ々々の活動範圍とす

る。又商業に於て果實商は果實を、玩具商は玩具を、少くも主要部門として取扱ひ専門化してゐる。之れに反し生産の仕事でも副産物が多量に産出され、主要生産の範圍と混同されるやうな場合も考へられないではなく、商業にあつて雜貨商のやうなものは又其の取扱ふ品物中何れが主であるか全く判別し難いやうな場合もある。併し前の場合に於ては主生産物の範圍が専門業をなすこと疑ひなく、後の場合には種々の品物を取合せ小規模に供給する所にその特徴があるのであるから、雜貨と名付け得るものを一纏めにして取扱ふことが、自らその専門を決定してゐるのである。技術的分業と呼んだものは、主として生産業に於て、生産の一連の過程が幾つかの部分に分割され、夫れに従事する者が其の一若しくは數過程だけを自分の仕事として専門に行ひ、他の過程は他の者の仕事の範圍をなすといつたやうな場合である。此種に分業にあつては、經濟活動の結付きは職業上の分業に於けるよりも、一層緊密なものがあると言はなければならぬ。他の部分仕事との結合によつて初めて一種類の生産物に關する生産活動が完成され、其上で職業上の分業が生む相互依存の關係により、他の職業との間に相互依存が成立つといふ二重の關係に立つからである。

六、經濟の組立て (二)

經濟の組立ては第一に以上述べて來たやうな各經濟活動の相互依存の關係から出來上つてゐる。併し一般社會生活の組織に於て、歴史的な連続がその組織を決定してゐるやうに、經濟も亦過去の組立てに連続してのみ形成されてゐるものであるから、次に此の點につき考察を施しておかうと思ふ。一般生活の上に於ても同様であるが、經濟の分野に於て歴史的連續の現象として、(一) 經濟活動の手段即ち生産手段と呼ばれるものが過去から連續的に持越されること、(二) 生産技術の進歩が同様に承繼されること、(三) 過去の生産物で其の消費が現在に持越されるもの即ち貯藏、の三が考へられなければならない。

第一の生産手段の過去に於ける蓄積は、殊に近代經濟活動の考察に於て重要な現象をなしてゐる。その主要なものとして、此處には耕地と交通路並に鑛・工業に於ける生産施設を想起しておけば足りるであらう。耕地に關する改善は籾澤の開発・灌漑・排水等による耕地面積の増大は元より、施肥及び耕作家畜の増殖の如き、到底俄かに實現し得ぬもので、相當長期に亙る改良の結果が今日に於ける耕作條件のうちに含まれてゐると見なければならぬ。それ故に今日の耕作

はそれを前提として其上に行はれるものである。勿論中には改良に非ずして荒廢に傾いてゐる耕地もあるであらう。併し此の場合に於ても農耕は之を基として營まれなければならないのであるから、過去が連続的に現在の生産活動の上に働きかける關係には異なる所がない。交通路の改良は一般社會生活に於ても同様であるが、經濟の形成上殊に缺乏難き役割を演ずること想像に餘りある所である。而も水陸共に其の時折の努力を遙かに超えた過去の遺産の上に立つてゐると云はなければならぬ。之等土地に着いてゐる過去の遺産から眼を轉じて、鑛工業の施設を眺めれば現在の生産活動が過去の施設の上のみ行はれ得ると共に、現在の活動が惹起する磨損を填補し又將來の發展の爲めの附加的設備が行はれてゆく所謂再生産の現象に注意を拂はざるを得ない。近代の生産は資本主義的と呼ばれる。その意味には種々の要素が含まれるけれども、その中の一は正に近代鑛工業が巨大な生産施設を資本として使用しなければならぬことにある。大規模な作業場や工場を設け巨大な機械を据えつけることは、勿論命令され規定される事柄ではないけれども、之等に頼ることが生産上有利であり且つ廣く行はれてゐる社會にあつては、之れに反した素朴な設備では利益を同じくすることが出来ない。利益といふと狭くなるが、もつと常識的に云へばその結果が甲斐なきものとならざるを得ないのである。生産活動の目的は其の結果を最

大ならしめるのであるから、何れの立場から考へても此の目的を實現するためには、社會に廣く行はれてゐるだけの設備標準に合致することが必要となる。それ故に社會全體として考へても、それを構成する個人の立場からしても、現代に於ける生産活動は過去に累積された生産のための諸手段を基礎として、其上に行はれなければならないから、生産の結果は過去から受取つた之等手段の消耗を補つて餘りあるものでなければ、其の目的を達成することは出来ないこととなる。のみならず將來の生産が現在のものより増加することは、總ての立場から望ましいことであるが、其の希望を實現するには、生産の結果は生産中の施設の消耗を填補し、更に將來の施設の増加を可能ならしめるやうな剩餘をも含まなければならぬこととなる。個人並に社會の立場から、かうした生産施設の擴張は如何にして可能であるかの問題は、相當詳しい考察を必要とするものであるが、經濟社會の歴史的連續構造の一端は、以上の説明だけでも窺へると思ふ。

次に經濟社會の歴史的な連續を形造る第二の點として、生産技術の承繼を擧げておいたが、之れは吾々が生産を行ふ場合、過去から受けつぐ一定の發達を來してゐる生産施設なり手段なりを用ひなければならぬと言つた條を移して考へれば足りると思ふ。進歩し複雑化した機械なり、其他の手段なりを使ふといふことが既に技術である。技術許りで其の進歩が要求する施設が缺けて

わては、勿論技術の進歩といふことは生産上無意味となる。けれども進んだ技術を具體化してゐる施設だけあつて、之れを活用する技術が缺けてゐるといふことは、正常には考へられない。現代の生産技術の進歩は、殊に巨大な設備に頼る鑛工業にあつては設備の中に含まれ、設備によつて現はされてゐると云ふことも出来よう。然るに既に述べたやうに、此の發達せる施設は忽然として現在あらはれるものではない。天から降つたり地から湧いたりし得るものではない。過去の社會が累積し來つた所であつて、近世科學の進歩の結果が生産方面への適用に於て堆積し來つたものである。吾々は現代に於て夫れを習得し受容れて、生産の効果をあげて行く傍、施設の場合と同様に一層の進歩を將來に與へるために努力を續けてゆくのである。之れは又經濟といふ社會構造の歴史的連續に於て、顯著な事實であると云はなければならぬ。

最後に吾々は過去に於ける貯藏が經濟の歴史的連續を形造る點を顧みておかうと思ふ。嚴密にいふときは吾々の經濟生活從て其の活動は他人からの前渡しを受けない場合には自分達の過去の活動の上のみ行はれるものである。他人からの前渡しを受ける場合には、他人の過去の活動の結果から行はれるのであるから、社會的總括的にみれば吾々の經濟生活が過去の活動の上に營まれる點については異なる點がない。尤も此の場合吾々は過去の貯藏を財貨の貯蓄として考へる

に止めておく。之れを貨幣にまで押擴げると問題は頗る複雑なものとなり、豫備的な智識から著手しなければならなくなるので、さうした説明は後に譲るのが適當だからである。財貨だけの貯藏をとつてみると、其の耐久性によつて貯藏され得る量は元より一様でない。穀物が三年間を保存の適當期間とすれば、衣料品はその數倍の保存に耐える。これは現時のやうな物資不足の繼續して來た状態に於て、前者の窮迫が極度に感ぜられるに對し、後者が手持品で何とか用を辨じて行くのをみても明かである。併し何れにしても生活は活動の前にあり、生活は過去の活動の結果に頼るのであるから、生活に足りるだけの財貨量が貯藏されるといふことは、經濟活動從つて經濟の組立ての上に缺き難き所である。此の關係は現在が過去に含まれると共に將來を含むといふ經濟の歴史的連續を、殊に雄辯に物語つてゐるものと言へよう。

第二章 價值と價格

一、價值の意味

經濟生活にとつても其の活動にとつても、財貨の價值といふことは、或は其の標準として或は其の目的として頗る重要なものである。併し價值を見積ることは經濟上の生活や活動のみに限つたことではなく、廣く全生活分野に亘つて行はれることである。道德上の善惡はいふまでもなく價值の問題であるが、藝術上にも嗜好の上にも其他廣い範圍に亘つて、吾々は日常評價を行つてゐる。立派だとか、深いとか、美味だとか、粹だとか、吾々は種々の場合にそれに應じた價值を見、判斷を下すのは、皆價值にかかはるのである。それでは夫等の場合に共通な價值の意味があるであらうか。此の問題を深く考へることは容易なことでないが、極く通俗的にいへば『價值を認める』といふことは、尊重することだと言ひ得るであらう。或る學者は價值を重要性だといつたが少しく言ひ盡せないものが残るやうな氣がする。吾々は何かの立場から人や物を尊重する。

無論その反對に馬鹿にすることもある。例へば人品の優れた人を吾々は尊重し、藝術作品について深味があり高い理想を表はしてゐるやうなものを尊重し、珍味佳肴を尊重する。之等はその價值が高く見積られることに他ならない。併し重要視するといふことは幾分の相違が感じられる。蓋し重要視するといふ場合には、一定の目的に適合するといふことが主になつてゐるやうに思はれるが、尊重には夫れよりも一層廣い立場が基礎となつてゐるからであらう。何れにしても吾々は事物を尊重する意味で、常に價值判斷を行つてゐる。

經濟學上財貨の價值を判斷する標準は大體二の道をとつて探求されて來た。一は其の生産即ち獲得に要せられる労働の量、之れを一層擴大したとも見へる生産に要する諸費用即ち生産費と呼ばれるものの高を基礎としてとるものであり、他は欲求を充たす度合即ち財貨に認める效用を基礎として採用するものである。前者中労働量が價值を決定するとなす説を『労働價值説』と呼び、生産費を用ゆるものを『生産費説』と稱してゐる。後の效用に基礎を求め的思想は奧太利の學者から出てゐるものが、最も精密なものとして其後も發展を續けて來た所から、『奧太利學説』と云つてゐる。他の稱呼もあるけれども夫れには説明をつけなければならぬから、其の箇所に譲つておかう。之等は經濟學上の常識に過ぎない程よく知られてゐるものであるから、次に極く簡單

に紹介しておく。

二、労働價值説と生産費説

労働價值説と呼ばれるものうち最も有名であると共に深い意味を含んでゐるものは、マルクスの學説であるが、之れは其他のものとは違ひ特に説明を要するから、此處には觸れずにおく。マルクス説を除くと労働價值説といふのは、比較的古くから説へられたものであつて、その主張する所を極く簡単に云へば、吾々の欲求する財貨が其の源へ溯ると殆ど總て労働の結果であり、生産物である財貨に價值が認められるのは、その中に労働が含まれてゐる爲めであり、従つて含まれる労働量の多少が財貨價值の大小を決定すると考へるのである。例へば今吾々の着てゐる衣料が木綿だとし、此の衣服は反物即ち織物に裁縫の労働が加はつたものであり、織物は紡績糸に機械の労働が加へられたもの、紡績糸は綿花に紡績工の労働が作用したもので、綿花は其の栽培に農夫の労働が投ぜられたものに相違ない。又夫等の生産過程に於てはそれ々々必要な機械・器具を使用し、生産物は一地方から他地方に輸送されるから水陸交通機關を必要とするが、之等も溯源すれば皆労働から出來上るものであると考へるのである。之等労働が最後に働きかける自然を

除外して考へれば、確かに財貨は結局の所人間の労働から生れる。けれども此の説明に對して起るであらうと思はれる反問は、或る生産物に對して何れだけの労働を投じて然るべきかといふ投下労働と生産物價值との間の價值考察が、生産に先立つて行はれないでもよいかといふことである。どのやうな財貨へでも労働さへ投すれば、その投下量に應じた價值が生産物に認められ得るかといふ疑問である。財貨が價值を生産關係から得て來るといふ一方的な説明は、常に同様の難問に逢着せざるを得ない。労働價值説については詳細には尙種々議論があるけれども、此所には深く立入ることは必ずしも必要ではあるまいと思ふ。

次に生産費説といふのは、如上の労働價值説の考へ方を押擴げて、投下労働量の代りに生産上の費用全般を價值の決定者とするものである。費用を總て其の淵源に溯つて労働量に求めることが假令理論上正しいとしても、一定の財貨生産者の費用計算にあつては、到底遠くその源にまで溯つて見積ることは不可能である。のみならずこのやうに溯源しなくとも、溯源し發見されるべき價值は、生産の施設や原料・補助材料等の價值として、各生産の段階に明瞭に與へられてゐるのが普通である。故に各生産費用の計算は夫等の價值に、自己の段階に於て費される労働の量を加算すれば、生産物の費用例からの價值計算は出來る筈である。ところが各生産段階で費される

労働量も生産費計算をする者即ち企業者と呼ばれる生産主體の立場に對しては、その支拂ふ勞銀といふ形で現はれて来る。さうなれば價值計算は愈々容易となり、あらゆる生産費が貨幣單位で表はされるから取扱ひは容易となり、單純な算數で高さが比較されることとなる。然るに従來經濟學上財貨の生産に必要な要素は、土地或は自然と労働と資本との三者に生産主體の其の地位に應ずる勞苦とされ、夫等は生産費としては地代・勞銀・利子及び利潤とされるから、之等の合計が財貨の價值を決定すると謂はれたのである。財貨の價值を此のやうに取扱ふのは、生産費計算をする主體即ち企業者の立場に身をおくものであること、明かな所であるが、吾々は此點を此處に特に強調しておき度い。労働價值説についても注意しておいたやうに、此の考へ方は生産主體の拂ふ犠牲といふ一方的立場から許り價值を決定しようとするもので、生産物が果して其の生産費を負擔し得るだけの評價を與へられてゐるかの問題には注意されてゐない。ところが生産費を投じて生産が行はれることは、財貨の價值が夫れに對應するだけに評價されてゐなければ無意味なことであるから、豫め財貨價值が少くも生産費に應ずるだけのものとして評價されてゐるのになければならない。かくて價值決定の原因を労働量に求める場合でも、生産費を以て之れにあてられる場合でも、完全な説明が與へられてゐるとは言ひ難い。實際に照して其の缺陷を救はふとする

には、財貨の需要者即ちその買手の評價が、生産主體の評價を受容れるやうな市場を考へなければならぬ。併し此の問題は後に説明が今少し進んでから再考することにしてよいであらう。

三、壘 太利學說

價值について壘太利學說といふのは、生産費の方面からする以上のやうな難點を避け、直接財貨の尊重される所以に迫つて、吾々の欲求を充たす財貨の性能についての認識に出發點を求めらるものである。例へば穀物は主食として、酒の醸造原料として、家禽の飼料としてといふやうな吾々の欲求を充たし、紙は文字を書くため、印刷をする爲めの欲求を充たす性能を具へてゐる。壘太利學說の出發點は此の簡明な事實におかれる。そして之等財貨の性能は勿論吾々が之れを認めるからあるのであつて、例へば酒の醸造を知らない場合穀物の此の性能は考へられず、又紙の原料も製紙の技術が發明されないうちは、此の用途に於ての意味をもつに至らないやうなものである。このやうに認識された性能は「效用」と呼ばれる。従て效用が大であるものは吾々の欲求を充たす度合が高い。效用は一般に欲求充足の度合の認識を意味する。けれどもそれは直ちに價值としては受取られない。效用が價值となるためには、效用は吾々の生活にとつての意味とならな

ければならないと謂はれる。かう云ふと幾分離解に響く。けれども吾々が先に價值を以て尊重の意味だといつておいた點を想起し、その立場から之れを解釋すればさして困難なことではないと思ふ。何となれば生活にとつて意味があるといふのは、生活の立場から尊重に値ひすといふことに他ならず、生活とは此の場合狭く經濟生活の意味に解しても間違ひではないので、此の意味で右の言を云ひ直せば、財貨を以て欲求を充たしてゆく生活の立場から尊重することが、效用を價值とするといふことになる。ただ效用といふだけでは右に述べたやうに認識された財貨の性能に止まり、未だ吾々の立場から尊重されるに至つてゐない。それは吾々から、詳しくは吾々の生活から遊離してゐる。性能は認めてもまだ吾々との交渉に入つて來ないのである。これで效用が價值に變る意味は一通り説明出來るとして、それでは如何なる效用でも吾々の生活にさへ關係して來れば、そのまま價值となるかといふと、さうではない。その理は財貨の效用といふものは、同一種類の財貨にあつても數量が異なる場合には、其の大きさが異なつて判斷される。即ち數量が多くなると效用は段々に下る。それは數量が少い時は尊重する欲求の充足だけに宛てられるものと見るから、效用は大となるが、多量にある場合にはそのうちにつまらない欲求に宛てられるものが出來、此の部分は小さな效用しか認められない爲めである。前の紙の例にかへると書物と印

刷用にあてられる場合とでは、紙に認められる效用は必ずしも等しくない。けれども此の二の用途には共に相當大な效用が認められる。それに引換へ紙は又燃料としても用ひられる事が出来る。この場合の效用は勿論小さなものでしかない。鮑屑すら燃料としては紙よりも勝つてゐる。けれども紙を燃しても一時の暖はとることが出来る。紙が寫字や印刷に使用しても有り餘るほどあつて、效用の極く小さな燃料としてさへ用ひられるやうな場合には、紙の數量が多いために效用の小さな用途にすら向けられることとなるのである。效用はこのやうに財貨の數量によつて異なる部分を含むこととなる。そして以上の例でも分るやうに、一般に效用は財貨量の増加に従つて低下の道を辿るので、此の傾向を『效用遞減の法則』と名づけてゐる。

財貨が效用遞減法則を受けるほど數量のある場合、效用と價值との關係はどうなるか。どの用途に向けられる財貨の效用が生活に對する意味として價值となるか。此の問題は初めて之れに出會ふ人々には比較的分り悪いものであるから、先づ例を設けて説明することにしよう。今度は農夫が出て來る。或る農夫が穀物を一〇俵もつて居り、自分の用途にあてる場合、何をおいても先づ宛てる用途は自分達の食料であらう。命の綱となるのであるから之れが一番大切に相違ない。そこで此の農民は自分達夫婦の食料として其中から第一に七俵を之れに向けるとしよう。此の最

も緊要な用途への七俵を引去つた後に尙三俵残る。そのうち一俵は來年の種子用に宛てる。之れは農民生活を繼續するのになくてならぬものであるから、食用を除けば次に來る用途である。尙二俵残る。仍てこの中一俵で嗜好の酒を醸造するが、最後に残る一俵は養鶏の飼料にあてると假定しよう。然るに此の一〇俵中一俵を失つたとする。納屋へ入れておいたのを盗まれたと假定してもよい。兎に角九俵しか手元に残らず、一俵は失はれたのである。この場合右農夫はどの用途に向けられる筈のものを斷念するであらうか。以上の用途の順序によれば、今や養鶏に宛てられる分を斷念する筈である。最も尊重される用途から段々低い用途へ振りあてて來たのだから、最後の養鶏用が一番效用の小さなものだからである。勿論效用は數字を以て正確に大きさを表はし得るものではないけれども、係數を以て之れを表はし得るものとし、以上の諸用途に於ける穀物一俵の效用を、第一用途一〇、第二用途九、第三用途六、第四用途三といふやうに遞減してゆくものとすれば、斷念される效用は第四用途の三であつて、六や九を斷念し、三の效用を確保しようとする理はない。して見ると一〇俵ある場合には其中の一俵の價值即ち生活の立場から尊重される度合は、最小效用の三であることが知られる。穀物として何れの一俵も同じ評價を受ける筈であり、而も一〇俵あるときの一俵の價值は、喪失した場合に斷念されるべき用途の效用だからで

ある。同様にして一俵を失つた残り九俵の中更に又一俵を失ふならば、此の喪失によつて斷念される效用は造酒用の一俵であるべきで係數六にあたる。仍て九俵をもつ場合の一俵の價值は六であることが容易に知られるのである。之れを一般的に云へば、財貨數單位量（例では一俵が單位量をなしてゐる）をもつ場合、その中の一單位量の價值は最も尊重されることの少い用途に於て認められる效用に等しいといふことになる。そして財貨をあてる用途選擇の順序は、勿論最も尊重されるものから始まり、それに充てた後殘餘のある場合、順次に效用の小さい用途へと移つてゆくのであるから、最終用途に於て最小效用が認められるものでなければならぬ。最終用途に宛てる財貨を限界財貨といひ、それに認められる效用を『限界效用』即ち限界財貨の效用と呼ぶのが普通になつてゐる。此の場合限界といふのは『終りの』といふ意味で夫れ以上は無いといふ限界である。斯く簡單化された用語を使ふならば、財貨價值はその限界效用によつて決定されるといふことが出来る。此の學派の價值説が『限界效用説』と呼ばれるのはその爲めである。そこで此の考へ方に従ふと、單なる效用と價值とが一致するのは財貨が一單位しかない場合に限られ、二單位以上になると普通效用が低下し始めるので限界效用が價值を決定し、從て效用總量と價值總量とは等しくないことが分るであらう。今上述の例によつて總價值と總效用とを計算すれ

ば、

一〇俵ある場合の總效用は $(10 \times 7) + 9 + 6 + 3 = 88$ 一〇俵ある場合の總價値は $3 \times 10 = 30$ 九俵ある場合の總效用は $(10 \times 7) + 9 + 6 = 85$ 九俵ある場合の總價値は $6 \times 9 = 54$ 八俵ある場合の總效用は $(11 \times 7) + 9 = 79$ 八俵ある場合の總價値は $9 \times 8 = 72$

但し以上の例にあつては最初の七單位は同一用途に宛てられ效用が等しいから、此處には其の低下はないものとして取扱はれてゐる。

四、高次財貨・補完財貨の價値

以上のやうに價値を效用から導き出し、效用を吾々の欲求充足の度合に基礎づけて來る考へ方は、直接吾々の生活から價値を捉へようとするのであるから、勞働價値説の理論上だけしか可能でない溯源や、生産費説の迂回路をとりながら其の考察に入る以前既に生産物たる財貨價値の認識を豫定するといふ不備を包含するものに較べれば、遙かに直接でもあり精密なものやうに思はれるに相違ない。その直接效用から價値に迫つてゆく道は費用説とよい對照をなしてゐる。それだから斯説の論者は生産費説を以て本源的な價値とそれから導出され派生した價値との關係

を、顛倒してゐるといつて手厳しい攻撃を加へてゐるのである。即ち斯説の立場からいへば、生産費として呼ばれる生産要素の價値は、生産物である財貨の價値から導出されるものである。例へば土地使用の價値である地代にしても、勞働の價値である勞銀にしても、夫等の價値は自身獨立して認められるのではなく、夫等の生産に使用される結果生ずる財貨に價値が認められるから、此の價値から出て來るのである。約めて云へば、價値の生産に役立つから價値があるといふのである。此の學派の専門語を使ふと效用から直ちに價値が決定される財貨は『低次財貨』と呼ばれ、その生産に用ひられる財貨は『高次財貨』と言はれるから、後者の價値は前者の價値から出て來ることになる。此の場合低次とか高次とかいふのは、序次即ち順序が低いとか高いとかいふ意味に他ならない。ところで斯う考へて來ると一つ厄介な問題が生れて來る。それは低次財貨が一種の高次財貨だけから出來るならば、前者の價値は直ちに後者の價値に移されて問題は簡単に解決されるが、高次財貨は殆ど總ての場合數種の異なる種類のもものが結合されなければ、低次財貨を生産することは出來ない。そこで低次財貨の價値が數多異種の高次財貨に如何に按分されるか、『歸屬』されるかを解決することが難問となつて來るのである。例へば高次財貨が原料と加工勞働だけで、施設等を要さないやうな簡単な場合を想像してみても、生産物の價値は勞働と原

料とどう歸屬されたらよいか、之れは問題でなければならぬ。勞働と原料とは生産に於て互に『補完』し合つて初めて生産物の價值を産出するのである。そこで斯うした『補完』關係にある財貨即ち『補完財貨』と呼ばれるものの價值決定を解決しなければならぬこととなる。

『補完財貨』の價值決定については、此の學派に屬する者から次のやうな解答が示されてゐる。

即ちそれは三の場合に分つて考へるものであつて、第一は補完財貨が單獨では價值なき場合、第二は單獨でも價值は認められるが、補完關係に於て實現するだけの價值には達しない場合、第三は第二の場合に更に代替品があつて、其の價值が與へられてゐる場合である。先づ第一の場合を $x+y=10$ の方程式として見ると、 x も y も各單獨では價值が認められないのであるから、對手の財貨と結合しない場合には其の價值は零となる。之れは x についても y についても共通に云ひ得ることである。それと同時に x と y とが結合すれば、その結果は10の價值となるのであるから、此の結合に於て x が失はれ y が零と評價されるときは、 x には10の價值が歸屬されなければならない。してみると x の價值は零乃至10となるであらう。同様のことは y についても云ふことが出来る。即ち此の結合に於て y が失はれた爲めに x が零となるならば、結合の結果得られる10は y に歸せられ、 y も亦零乃至10と評價されることになるのである。けれども x にしても y にし

ても、單獨には無價值となるといふやうな場合は少い。第二の場合の方が普通である。之れにあつては、 x は單獨に使用されるときは2の價值しか實現することが出来ず、 y も3の價值を實現するに止まるといふやうな場合である。さうなると x は如何なる場合にも2以下に評價されることはなく、同様に y は3以下に評價される氣遣ひはない。従て各に對する歸屬上の評價は x は2乃至7、 y は3乃至8となるべきである。此の場合 x の最高評價が10とならず7に止まるのは、生産物の價值10の中少くも y の單獨評價である3は y に歸せられるからであつて、 y の最高評價が8に止まるのも、10の中2は少くも x に歸することにならなければならないからである。吾々は更に第三の場合に移らう。之れにあつては第二の場合に加ふるに x も y も共に代替品があつて、 x の代替品である a は5の價值で得られ、 y の代替品 b は6の價值で得られるとする。然るときは x は最早最高7と評價されることはない。5の價值を支拂へば a が得られるのであるから、最高評價は5以上にはならず、其の價值は2乃至5とされる。 y も同様にして3乃至6の範圍から出ることには出来なくなるのである。

五、價值と生活の組立てとの關係

『壘太利學說』又は『限界效用說』といはれるものの價值に關する説明は、大要以上のやうなものである。吾々は之れを少し詳しく取扱ひ過ぎたかも知れないが、此の考へ方は相當廣きに亘つて少くも基礎的に採用されてゐるので、讀者に十分理解しておいて貰ひたいと希望したのである。それでは吾々は財貨の價值について此の學說の教へる所を、そのまま遵奉出來るかといふと、決してさうは考へない。此説は繰返して言つたやうに直接價值を捉へようとし、其の立場を吾々の生活に据えた點に於て深いものといふことは認められる。けれども生活がどのやうな構造をもつてゐるかといふ點には、別に考慮を拂つてゐない。それだから其の説明に例として用ひる農民にしても、他人との交渉とか社會との結付きとかいふ方面は遊離されて、自分達だけの欲求の緊急度だけを考へる基礎においてゐる。農民は一〇俵の穀物をもつてゐた時には、最後の一俵を雞の飼料といふやうな效用の低い用途にすら宛ててゐる。けれども一度理論の描く世界から離れて吾々の實際生活を顧みると、食料にも種子にも造酒にも向けられるやうな穀物を、このやうな用途に振當てる氣遣ひはないと云へるであらう。かかる用途を勿體なさ過ぎると考へるのは、

何も吾々が現時のやうな物資殊に食料不足の社會に生活してゐる爲め許りではない。成程飼料の一時の間に合せには上等な穀物を之れに宛てる場合もあるが、普通には穀物中でも不熟のものとか挽き滓とかいふもので足りると考へ、又そのやうに實行してゐる。それは何の爲めであるか。云ふ迄もなく最後の一俵につき自分には他に用途がないとしても、夫れは社會的に飼料よりも高く評價されてゐるからである。單に勿體ないとか、冥利が盡きるとかいふ道德的・宗教的判斷として許りでなく、穀物は飼料となり得る他の物よりも世間で高く評價されてゐるからである。道德的・宗教的判斷といふ點では、吾々の生活一般が其の社會的歴史的構造を以て吾々の經濟活動に働きかけて居り、高く評價されてゐるといふ點では、吾々の活動がその關聯から脱し得ない經濟社會の評價に作用されてゐるのである。此の點は吾々の考へ方には頗る重要なもので、既に相當詳しく説いた一般生活や經濟生活の組織からみるならば、斯かる社會や歴史から遊離された個人の生活といふものは、研究上如何に便宜に見えるとしても、現實に照すとき全く虚構とならなければならぬ。吾々は出來るだけ現實に肉迫し、誤らざる理解に到達するやう努力しなければならぬと考へる。此の要求からして、吾々は價值とか評價とかの問題についても、生活につき分析的に詳しく考へたものを根底としてゆかなければならない。吾々には價值の説明は寧ろ生

活に對する解釋の一の適用でしかないとさへ考へられるのである。

價值の判斷を吾々の欲求に基け生活に結付ける點までは、奧太利學説は當を得てゐる。欲求は今少し廣く云へば意欲の表はれであつて、意欲から行爲に移るには概ね價值判斷が其の間に立つ。けれども經濟の關する範圍にあつては、強いて欲求を意欲に引き直す必要はない。效用がその充足度と解せられ、價值が效用から導出される説明の道筋は、巧みなものとさへ賞讃されるであらう。吾々が如何にしても異議を唱へなければならぬと思ふのは、少くも效用認識に於て社會的・歴史的な地盤が見落されてゐる其の研究方法である。或る財貨が如何なる效用を持つかに對する認識に於て、吾々は社會生活をしてゐる限り、他人と無關係な認識をもつことは出来ない。又歴史的には吾々の祖先が傳へて來た認識からも、解放されることは出来ない。現に吾々が國民が主食として認める米の效用は、歴史的に傳へられてゐると共に、狭くは家庭生活に於て廣くは社會生活に於て、維持されてゐる認識を基礎としてゐる。その結果は一種の偏愛とさへ思はれる程度に達してゐる。榮養價から見れば恐らく小麥粉と大差なく、消化の點では寧ろ米の方が劣つてゐるやうに考へられるが、而も主食として米を擧取し得ない場合の吾々の不満足は少々ではない。效用認識に對する此の社會的・歴史的影響を思ふとき、吾々は更に溯つて其の源が欲求その

ものにさへ達してゐるのではないかの疑念をいなく、主食に對する欲求といふやうに考へれば、それは米に對しても小麥粉や其他の穀物に對しても、等しい欲求となるのであり、從て欲求から效用認識に移るに及んで、初めて社會的・歴史的な作用が表はれて來るものとなるが、欲求は飢えとか渴えとかいふ一般的なものとして感ぜられるよりも、先づ第一段としては其の一般的な感じと之れを醫する適當な手段（一定種類の財貨）の擧取に對する願望との結付いたものとして、經驗されるのが普通であつて、其の望ましい手段が得られない程度に從つて、「何でもよいから」といふ概括的な欲求に變つてゆくのが普通だと思はれる。欲求の構成が此のやうなものとすれば、歴史的・社會的生活の影響は效用認識に至つて初めて見られるのではなく、既に欲求の段階に於て表はれるものといふべきである。況んや效用が價值判斷にかへられる生活は、欲求や效用認識に較べれば、遙かに持續的なものであるから、その立場が社會的歴史的な基礎に影響される範圍は愈々廣くなり、財貨に對する評價は、廣く社會的性質を帯びるのが事實である。此の場合より吾々の創意的作用が全く抹殺されるといふのではない。けれども個人の評價の基調となるものは社會的評價であり、社會的評價は個人が之れを基調とすることに依て維持されるものであることは、生活の組立について述べた通りだと信ずる。そして價值判斷の構造をこのやうに理

解して來ると、經濟上社會的評價の具體的なものは、實は價格に他ならないのであるから、吾々の立場からは價格を基礎として價值を考察する方が適當のやうに見えて來る。之れは從來の價值と價格の關係に對する考へ方を逆にするものである。從來の考へ方といふのは價值を基礎にして價格を説明しようとするものであつた。仍て吾々自身の考へ方を述べ、それと關聯して生産費説に今一度觸れておきたいと思ふが、その前に奧太利學派の價格に對する説明を一瞥して、此の學説の紹介に連絡を保つておかうと思ふ。

六、價 格

價格とは勿論通俗に代價といふものであつて、交換に依て得る財貨の代りに支拂はれるものである。亂の場合支拂はれるものは貨幣でも他の財貨でも變りはない。唯交換の發達は貨幣流通をまつて行はれ得るものであるから、財貨交換の發達した正常の社會にあつては、交換は普通賣買となり賣手は財貨を與へる代りに貨幣を得、買手は財貨を得る代りに貨幣を支拂ふ。代價が狭く代金の形をとるのは此の爲めである。それであるから價格は、交換される財貨の價值關係を表はすといはれ、價格の説明は價值の理解に基くとされるのである。價值と價格の關係に關する詳細

は後に譲るが、此の見解の下に奧太利學派は價格の根底を説明するのに、最も簡單な交換關係に於ける當事者の評價から着手したのである。今此處に交換してもよい穀物一〇〇俵をもつてゐる甲と、同様に交換にあててもよい酒四〇樽をもつ乙とがあり、甲の評価では穀物一〇〇俵と酒四〇樽とが價值に於て等しく、乙の評価にあつては酒四〇樽は穀物八〇俵に等しいと假定する。このやうな場合には甲も乙も無論交換に依て満足を得、その價格即ち交換の價值關係は酒四〇樽に對し穀物八〇乃至一〇〇俵の間で決定されるといふのである。酒四〇樽と穀物八〇俵の交換だとすると、乙は之れに依て價值の上で別に徳もしないが損もしない。その代りに甲は交換に於て一〇〇俵を與へてもよいと評價したのであるから、八〇俵で酒四〇樽を得るならば、穀物二〇俵に相當する價值を儲けたことになる。反對に穀物一〇〇俵と酒四〇樽とが交換されるならば、今度は甲は等しい價值の交換をしたのであるが、乙は穀物八〇俵の價值しかないと判斷する酒四〇樽に對して、一〇〇俵を得るのであるから、二〇俵分の價值を儲けることになるのである。前の場合は乙が其處までならば交換してもよいといふ限界であり、後の場合は甲が同様に交換してもよいと考へる限界である。そこで酒四〇樽の價格につき上方の限界は穀物一〇〇俵であり、下方の限界は八〇俵だといふことが云はれるのである。之れは交換當事者が双方とも一人づつ相對して

ゐる最も單純な場合である。

交換當事者の一方が多數であつて、其間に競争が行はれる場合の價格は、『獨占價格』と呼ばれるものであるが、之れについても全く同一の考へ方が用ひられてゐる。獨占價格には賣手が獨占者の地位に立つ場合と買手がその地位に立つ場合とがある。前の場合は買手が多數であるために互に競争し、後の場合には賣手の間に競争が行はれる。財貨の獨占價格としては前者の方が多くあると考へられるので、此處には賣手獨占を例にとつておかう。即ち買手としてABCの三人があり、Aは一單位量ならば其の價值を一〇〇と評價し、二單位量ならば一單位につき九〇、三單位量ならば一單位につき八〇と評價すると假定する。次にBは一單位量ならば九〇と評價する。一單位量の評價 A B C とから始めて一單位量増加す毎に一〇づつ低下し、Cは八〇と評價することから始つて順次一〇づつ評價が下るとする。此の假定に於て賣手が財貨を一單位しか提供しないとすれば、夫れは買手Aが購入するに相違ないが、その評價100はAが支拂はふとする最高價格であつて、必ずしもそれだけ支拂ふことを希望してゐる譯ではない。買手としてAは安價なればそれほど結構なことはない筈であ

一單位量の評價	A	B	C
二單位量の評價	90	80	70
三單位量の評價	80	70	60
四單位量の評價	70	60	50

る。けれども値切つて90までに價格を引下げることが出来ない。價格が90になればBが競争者として現はれてくるからである。そこでAが購入のため値切ることの出来る限界は91までとなり、價格は91乃至100の間で決定されることになる。同様にして賣手が三單位量の財貨を賣りに出すならば、今やAが二單位、Bが一單位だけ購入するやうな條件が價格決定の範圍を定めることになる。それは90と81の間である。80になればAは三單位買はふとし、Bは二單位を欲し、Cも亦購入の競争に加はつて来て、競争の結果價格は81になる筈だからである。

價格の二の型として獨占價格に對立させられて来たものは、『競争價格』と呼ばれるものであつて、之れにあつては賣手側にも買手側にも競争が行はれる。従つて其の決定は以上の買手側だけの競争に對し、賣手側の競争を組合せれば説明が得られる理である。例を用ひて競争價格を説明してゐるものがあるので、少しく面倒のやうには見えるが紹介しておかう。此の例にあつては賣買される財貨は馬匹であつて、複雑にならないやうな例に用ひられる馬は何れも皆同じ條件を具へると假定する。即ち毛並も年齢も發育もいつたやうに、どの馬をとつても變りはないと想像するのである。又取引に現はれる買手A₁からA₁₀までの十人は各一頭の馬を需要するだけであり、B₁からB₈までの八人も亦一人で一頭の馬しか持つて来ないし、更に各賣手と買手の評價は表に掲げ

たやうなものとする。さて此の取引で最初にB₁が賣りに出たとすると、その評價は一〇〇であるから買手側は全部購入を希望し競争が行はれる結果、價格は糶り上り一一〇となる。すると賣手

手	100
の評價	110
賣	150
の評價	170
B ₁	200
B ₂	215
B ₃	250
B ₄	260
B ₅	
B ₆	
B ₇	
B ₈	

手	300
の評價	280
買	260
の評價	240
A ₁	220
A ₂	210
A ₃	200
A ₄	130
A ₅	170
A ₆	150
A ₇	
A ₈	
A ₉	
A ₁₀	

側ではB₂が此の價格ならば賣つてもよいといふので賣手に加はり、今や賣りに出される馬は二頭で代價は一一〇となる。B₁は自分の馬を一〇〇と評價するのであるけれども、一一〇に賣れば勿論其方が望ましいから、強いて一〇〇で賣る氣遣ひはない。併し此の二頭の馬に對する買手は依然として十人あり、之れはB₉が賣手側に加へつても尙續く。買手の競争が更に進んで價格が一七〇になると、A₁₀は最早それだけの評價はしないのであるから、買手の仲間から脱し買手は九人賣手は四人となる。併し買手の競争が一層進んで二一五まで價格が上ると、今度は買手五人に對し賣手はB₆までの六人となるから、競争は反對に賣手側に起り價格は二一五以下に低下するが、二一〇までには下れない。何となれば二一〇ではA₆が買手側の競争に加はつて來るからである。さうなると價格は二

一五以下の二一四から二一〇以上の二一一の間で定まるより他に道がないであらう。此の間なれば賣手と買手とは等しいから、双方の側に競争が生じて價格を變化させることがないからである。かうして此の例に於ては、價格決定の限界は二一四が上方二一一が下方となることが知られるが、此の限界が決定するのには賣手側の二二〇と二一五の評價、買手側の二二〇と二一〇の評價とが對立組合される爲めであるから、以上の競争價格の説明を『限界對偶説』と呼んでゐる。對偶といふのは上方と下方の各一對の意味に他ならない。

價格に對する如上の説明についても、吾々は其の價值説に於けると同じ缺陷を見出さざるを得ない。各交換當事者の評價に社會的基礎が與へられてゐない點之れであつて、其の結果は各當事者の評價が、右の例に於けるやうに尤もらしく接近するといふ保證は、何處にも求められない。吾々の現實の評價が互に等しくないまでも、相當接近してゐる事實は、吾々の評價が社會的評價を共通の基礎として持つから初めて可能なのである。之れを第一の單純交換の例に見るに、甲は酒四〇樽と穀物一〇〇俵と等價值だと考へるとして乙が酒四〇樽と穀物八〇俵と等價值だと考へる必然性は何處にもない。唯尤もらしい例を與へただけであつて、乙の評價が酒四〇樽と穀物四〇俵と等しいと評價するかも知れない。その場合には價格は酒四〇樽に對し穀物一〇〇俵乃至四

○依となり、上方の限界と下方の限界とは甚しく飛びはなれ、折角説明は成立しても其の内容は頗る空虚に近いものとならざるを得ない。それ故に此の説明が贊成を得るためには、どうしても當事者の評價が相當まで接近しなければならず、それには社會生活による評價の或る程度までの統一が與へられる必要がある。これで吾々は壘太利學派に於ける思想の中心をなす價值と價格に關する學說を相當まで取扱つたと信ずる。

そこで今度は考察を少し前に戻して、生産費説につきそれには社會生活による評價の一定の統一が顧みられてゐるかどうかを検討しておかなければならない。生産費説の最も大なる弱點は何といつても生産物である財貨の價值が生産によつて決定されると主張するが、その財貨價格が豫め判つてゐなければ生産費をどこまで支拂つてよいか判断し得ない點にある。之れは正さに循環論法に陥つたものと云はざるを得ない。財貨價值の原因として生産費を指摘しながら、生産費を考へる上に財貨價值を前提してゐるからである。けれどもかかる循環論法が暗に示す所は、此の思想が經濟の社會的構造を、何人も當然豫想してゐると考へるやうに見える點である。即ち生産費が如何に投ぜられるかは、生産物の價格が既に一定の範圍では知られてゐる經濟社會に於て問題となると考へられてゐるのでなければならず、斯かる場合にのみ生産費の變動は、價格の落着點

を決定する役割を果し得るものとされよう。それは既に經濟の社會的構造を當然のことと考へてゐる立場にとつてのみ有意義なものとなることが出来る。けれども學問的に取扱ふ以上、當然なことと思はれる事柄にも十分な考察が施されなければならない。其處には往々にして極めて重要な問題が藏されてゐるのである。

七、價格の性格

價值と價格について生産費説や壘太利學説のやうな學界の二大思想に關し、以上のやうな批評的態度をとつた吾々は、價格につきどのやうな説明を用ひようとするか。吾々の途は價值考察に於て既に一端を述べておいた社會的・歴史的構造に頼るにある。價格は社會的にのみある現象であるから、其の決定に於て吾々が個人的に作用する所もないとは云へないが、この作用は一定の道を通して其の變動に働きかけるだけであつて、其の都度個人としての吾々が作り出すのではない。そして此のやうに社會現象としてある價格は、概ね一時期の社會が前の時期の社會から受取る所のものであつて、その間に價格の高さに變動は生ずるとしても、價格そのものは一時期から次の時期へと傳はつてゆき、各時期に新しく生れるものではない。例へば木綿浴衣の價格は社會

的な現象であつて、個人が之れを決定するものではないし、又その今年の價格は昨年のもとの高さは違つても、昨年の高さに變動原因が作用して今年の高さになるので、昨年の價格が一旦悉く葬り去られて今年新しく生れるといふものではないと考へる。之れは單に直接の觀察から得られる認識である許りでなく、吾々が經濟の歴史的組立てについて述べた所からも論證し得られるので、此處には繰返し細説することは避けておきたい。そこで斯く歴史的に與へられた社會的事實としての價格は、如何なる原因によつて變動するであらうかの問題が、價格決定の問題として生じて來る。此の變動原因に参加することこそ、右に述べた個人が價格決定に作用する途なのである。

八、價格の統制

價格の決定に作用する最も直接的なものが國家の統制であることは、戰時と其後の整理時代にある現在まで、吾々の身近に經驗した所のものであるが、之れを除いての所謂自由主義經濟の組立てにあつては、『市場價格』の決定原因として古くから説かれて來た財貨に對する需要と供給の狀態が、之れであると云はざるを得ない。市場とは財貨の取引される範圍の意味であるから、此

處に市場價格といふのは現實に賣買が行はれる範圍での價格のことである。従つて此の市場といふ言葉を使ふならば、價格に統制が行はれる場合には其の市場は統制市場であり、反對に取引當事者が自分の意思で取引をし、價格に作用するものは自由市場となる。近頃『自由販賣』といふ言葉が行はれるが、之れは勿論總ての人々の知るやうに、量に於て割當的制限をしないといふ意味が主になつてゐる。價格に對し主義として統制が採用される場合は、勿論廣く經濟一般も統制下に立つものであつて、之れについては別に考察しなければならぬ。此處では事實上我國に行はれたり又現に行はれてゐる統制を顧みるだけに止めておく。吾々が經驗した價格統制は所謂公定價格であつて、戰時と戰後とによつて其の精神が異なる。戰爭經濟にあつては、國內經濟の組立てを戰爭遂行目的に合致せしめようといふのであるから、一方に於て膨脹した戰費を以て、集中的に買入れた軍用資材と其の生産に宛てた勞働との値上りを來すのは當然のことである。之れに伴つて一般國民の生活維持に向けられてゐた生産は、資材と勞働との軍需産業への集中の爲めに縮少し、生産量の低減を來さざるを得ない。斯く低減した財貨に對する需要は、軍事産業方面で増大した購買力のために愈々増大し、價格騰貴は此の方面にも誘致される。前の軍用資材の價格上騰は財政の上で戰爭を困難に陥れ、後の生活用財貨の價格騰貴は國民生活を不安定なら

しめ、生産並に財貨の供給を阻害し、且つ之れによつて誘導される生産費の上昇は又軍需産業の費用を一層膨脹させる傾向をもつ。戦時價格統制は此の軍用資材の値上りを防止し、財政の危険を防御すると共に、國民生活を安定させて戦争に對する抵抗力を保持しようとする二の目的の下に行はれたのである。だから此の統制は平時經濟から戦時經濟への組立て替へをしながら、其間に發生する經濟の破壊を防止することが唯一の目的であつた。併し如何に此の目的の達成が急務であつても、財貨價格を生産條件の激變から生ずる生産費の増大に反して、それ以下に引下げることは出來ない。國民への配給上低價格を必要とする場合には、補償金等の形で此の増大せる生産費を補つて行かなければ、生産を繼續させることは出來ないのである。尤も國民の人格從て活動の基本的自由をも抑制し、敢て損失を甘受させるやうな價格で生産を強要することも、國家の權力を用ひれば一時的には出來ない譯ではない。けれども、それでは單に生産者の活動意欲を阻止する許りでなく、農業ならば耕地の荒廢は勿論生産量の著しい減少を來すであらうし、鑛・工業にあつては施設・機械類の顯著な消耗破損から、同じく生産物の質量兩面に亘る低下を妨げることは出來ない。それは主食の配給を如何に減量しても、最低生活だけの保證を與へなければ、全般に亘つて國民生活が破壊されるのと同じ事である。従て如何に強力な統制も長期に之れを行

ふためには、價格は生産費を補ふよりも低く定めることは出來ないといふ經濟本來の組立てから制限を受けざるを得ない。加之公定價格制度の下に於ては、如何なる事情の下にも多かれ少かれ『闇』價格の混入を防止することは、實際上不可能である。闇價格は經濟的にいへば自由市場に於ける價格に他ならず、次いで述べる需要と供給との作用に依て變動するものである。

同じく公定價格制度にあつても、終戦後現在吾々のその中に生活する經濟にあつては、其の精神が異なつてゐる。直接には所謂インフレーションの齎す經濟の破壊を防止することに集中されてゐる觀があるが、財産税の賦課や土地所有制度に對する政策が示してゐるやうに、我國の新經濟建設を終局の目的とする一層廣範圍に亘る戦争經濟の整理にある。インフレーションについては、後に物價を取扱ふ條に譲るが、今や價格の統制は國民生活を安定させるやうな諸價格間の均衡へ導くことを目的とすると言はれるに至つた。價格間の均衡といふのは、勿論諸價格の間に釣り合ひがとれることであつて、其の主要點は、國民は其の所得を以て諸財貨を購入し生活を営んでゐるものであるから、國民の所得が生活を安定して營み得るやうな高さにあるやう、諸財貨價格を誘導することが公定價格の目的となる。此の價格統制はかく國民の總生産力を以て全生活を安定して賄はせるものであるから、此の誘導の役割を果せば、次で來るものは概して自由市場の決

定する價格といふ需要と供給との支配する世界である筈である。終戦後の價格統制の意味は此處にあるので、今や此點が明かにされたのである。價格決定に關する統制作用に之れ以上深入りすることは、後の物價の説明を先取することにもなり、吾々は少時統制の作用から離れた自由市場に於ける價格の變動原因としての需要と供給の考察に移らうと思ふ。

九、價格決定原因としての需給

需要と供給ほど經濟問題の考察に頻繁に用ひられて來た言葉はないといつても差支へない。一にも需給、二にも需給といふ。例へば此處に問題にしてゐる價格ならば、其の變動原因は一口に需給にあるといひ、勞銀の變動も利子の變動も、それ々々勞働市場や金融市場に於ける需給の變動が原因をなすといふ。それで一應分つたやうな氣がするのである。けれども少しく反省してみると之れだけでは何も内容はない。財貨の價格について云ふならば、財貨に對する需要が如何なるものであるか、又その供給はどのやうな内容をもつかを考へて、初めて説明になるのである。そこで先づ財貨に對する需要の分析から入らう。

吾々が消費者として市場で財貨を需める場合には、既に述べたやうな社會的評價の上に礎いた自分達の評價で、凡そ何の位の價値があるか、交換なり購買であるから貨幣を以て支拂ふならば、どの位まで支拂ふ價値があるかを考へ、他方に於てその財貨に宛てる額を支拂へるか、支拂つて後に残る高はどうか、購買によつて段々減少してゆく自分の購買力が、何日後に所得によつて補充されるか等のことを引きくるめて考へるものである。約めて云ふならば、自分達の財貨に對する評價と購買力の状態とが結付いて、需要が決定されることになる。併し勿論自分達だけの需要で、市場に行はれる價格を左右することは、現在の廣範圍に亘る市場の組立てでは不可能である。どうしても自分達のやうな需要者の状態が集積して、或る財貨に對する社會的總需要をなし之れが價格の變動に作用するのでなければならぬ。それであるから吾々個々の需要は總需要の一員に加はるといふ途によつてのみ、價格の決定に加はるのであつて、社會的總需要の顯著な部分を占めるやうな大需要者でない限り、一個人の需要が目に見えて價格に影響を及ぼすといふことはあり得ない。次に生産者側の需要はどう構成されるか。此處に於ては消費者が需める財貨の價値判斷に當るものは、需要する財貨が生産に於て與へる貢獻についての評價となると考へられるであらう。例へば勞働なり原料なりに對する需要について云へば、夫等を生産に用ひた結果、どれだけの效用が擧るかについて見積りを立てるのである。所が生産の結果は生産に要する

總ての要件を揃へて使用しなければ得られない。勞働と原料だけでは生産は出来ない、其他の施設が一切揃はなければならぬのであるから、之等全要件の中で各要件がどれだけ生産に役立つかといふ點に高次財貨の價值決定について述べた歸屬問題が起るやうに思はれる。併し吾々の考へでは歸屬説のやうに各生産財貨の生産貢献を、實際問題から引離して抽象且つ絶對的に解決しようとする必要は、此の場合にもないと思ふ。種々の生産財貨は各種の生産部門に應じて必要な程度で組合はされ、その費用の合計は常に生産物の價格以下にあるやうに實行されてゐるものでなければならぬ。そして此のやうな生産財貨の組合せは、經濟的な價值の面でも始終考察されてゐるに相違ないが、他面技術的な財貨の性質から一定の組合せは必要とされ、生産物の價格が斯かる組合せの費用を償つて餘りあるからこそ、生産が續行されるのである。生産財の貢献を考へる地位にある者は企業者であるが、彼れには各種生産財の絶對的貢献を算出する必要はなく、従つて之れを抽象的な問題として自らに課するものではないと思ふ。生産財貨の貢献が現實に問題となる多くの場合は、其中の一若くは少數種類のもの價格變動が発生し、而も生産物の價格に之れに應ずる變化が生じないといふやうな時である。例へば勞働の賃銀が騰貴したが、生産物の價格には之れを補償するやうな値上りがないと假定すれば、企業者は生産費を低下させる爲め

に生産財貨中何かの節約を考へなければならぬ。差當り雇傭勞働者を減少したらどうか、それが出来なければ原料・補助材料等の方面に、此の費用増加を償ふやうな節約が出来ないかを考慮する。けれども此の場合の問題は、全部としての生産費用を價格に適合させることが問題をなすのであつて、一々の生産財貨の貢献判斷が問題とされてゐるのではない。それであるから生産財貨に對する需要は、總生産財貨の組合せに於ての各生産財貨の地位を、技術的並に經濟的面から考察することに依て決定されるといふのが、最も現實に近い考へ方であると思ふ

それでは需要を決定する今一つの原因である購買力の方はどうであるか。之れについては各需要者の購買力が消費者と生産者とにあつて如何なる原因から決定されるかの問題と、各需要者の總購買力が需要財貨の上はどう配分されるかの問題との二問題を考へなければならぬ。先づ購買力決定原因から見ると、消費者にあつては所得と過去並に將來に關する貯蓄が其の主要なものといへよう。併し所得については其の決定考察は『分配』を扱ふ第四章で述べる所であるから、其の箇所に譲り、又その變動については次章の物價に關聯して考へるのが適當であるから、此處では割愛し、貯蓄に一瞥を與へた後、直に需要財貨の上に購買力が配分される問題を考へたいと思ふ。一般消費者にあつては貯蓄は財産の増殖と將來の生活に對する保障とが主要目的をなし

てゐること言ふ迄もない。従て過去の貯蓄が購買力となつて現はれるのは、經濟界の平穩な時期にあつては、不慮の出費が勃發する場合と、相當の額に達した曉に不動産の買入れ等相當價額のまとまつた支拂として購買力に加はるのが、最も普通のことといへるであらう。然るに現在のインフレーションに由る急激な物價騰貴に襲はれるやうな場合になると、過去の貯蓄は現在の所得の不足を補ふ意味で購買力化して來る。現にインフレーションの只中に生活してゐるお互は、此の貯蓄の購買力を體驗しつつあるものである。従つて斯かる時期にあつては所得といふ購買力の一部が、將來への貯蓄となつて現在の購買力をそれだけ減少させるといふ方面は、就中給料生活者を代表者とする定所得階級にあつては、全く例外的な現象をなすに止まる。物價が安定し生活が平穩に営まれる時期に於ては、貯蓄による購買力の將來への繰延べは反つて正常な事實となる。次に所得から出て來るにしても、又貯蓄の購買力化によるにしても、各消費者は其の總購買力を以て種々の財貨に對する需要を形成するものであるから、之等諸需要の上に購買力をどう配分するかは疑問とならざるを得ない。此の問題に答へるには限界效用學説を基礎として限界收益の均等化の考察が最も適してゐると思はれる。此處に收益といふのは特別の意味をもつもので、即ち財貨の價格と財貨の限界效用との比 限界效用
價格 である。通俗に値段の割には良いとか悪いと

かいふ事が言はれるが、その割に於て考へた各財貨の限界效用が等しくなるやうに需要するのである。尤も限界效用は價值のことであるから、値段の割に於て考へた價值が等しくなるやうに購買力を分割配當するといつてもよい。かう云ふと學問らしく難しいことのやうに見えるかも知れないが、更に碎いて云へば財貨の價格を標準に立てておいて、割の悪い買物をしないやうに、割のよい程度が各使途につき同様であるやうに需要するといふことである。均等化とか等しくなるとかいふ見方が出て來る理由は、其處に凹凸があれば必ず割の悪いものがなければならぬからに過ぎない。そして此の収益均等化を實現するためには、勿論常に代替品の収益が考慮に入つて來るべきこといふまでもない。次に生産者の購買力の決定は、結局生産の結果たる儲けのうち之れに組込まれる部分と借入資本とが如何に決定されるかの問題であり、前者は又『分配』の問題として、後者は物價變動に伴ふ現象として、後に取扱ふ箇所があるので、其處に譲つておく。

供給については現時のやうな經濟生活の異例な動搖に際する他、一般消費者が之れに加はることとは偶發事情以外にはない。併し現時の所謂『物交』にあつては、一般消費者が供給者として侮り難い地位を占めたのではないかと思はれる。就中戦時中から戦後にかけて、農村には纖維製品の供給杜絶のため之れに對し強烈な需要を惹起したが、之れに對應して少からず供給者の役割を

演じて來たものは、都會居住者の其の貯へであつたことは周知の事實である。都會居住者が荷物疎開等の方法によつて戰災を免れた貯藏衣類は、戰災に依て蒙つた損害の巨大であつたにも拘らず、尙相當の量に上り、恰度極度に缺乏した食料を農村から得る手段に役立つた。之れは事實として又知らない者はない。「物交」に對する制度の禁止あるにも拘らず、都會居住者の食料が此道を通つて僅かに支へられて來たと同じく、農村の衣料も亦補給され、其の方面に於ける生活の支持をなしたのであつた。此の場合に於ける交換は主として戰爭初期の價格關係を標準とし、一般並に地方事情の變化によつて幾分修正が加へられて來たもののやうに思はれる。併し時期の経過に伴つて食料品と衣料とは消費の速度が甚しく異なることと、食料が保有量の漸減に伴ひ供給條件を引上げさせたこと等が作用し、此の修正が著しく増大して來たこと又吾々の親しく見聞し來つた所であつた。然るに貯藏品の供給に於ての此のやうに不規則な現象に較べれば、生産が不斷に連續して行はれる生産物の供給は、勿論遙かに規則正しい構造をもつてゐる。即ち其の供給條件は現實に要する生産費と將來變動するであらう生産費に關する豫測・同業者の社會的に要すると考へられる生産費の考量といつたやうな内容を含めての生産費を中軸として決定され、供給量は生産量と過去からの手持量並に將來生産物の價格變動豫測に基く賣控へに依て規定される

と云ふことが出来る。此他に需要者の購買力に關する見通しも、無論供給に作用するものであるが、之れは將來の價格變動を惹起する一要件として以上の豫測中に含めることが出来るから、別に取出して扱はなくても済むであらう。唯將來に關する豫測が價格と供給量とに作用することの強力且つ迅速な事實は特に注意を促す所であつて、殊に半ば不斷生産の性質をもちながら、收穫期以後に於ては一年後の收穫期までは貯藏品の性格をもつに至る米麥等の農業生産物は、右に述べたやうな價格變動の基礎として、此の將來に對する豫想を多分に含むものである。現に今秋の收穫が稀有の自然條件に恵まれて、豊作の豫想が確立された爲め、今後外米の輸入あるべき豫想と結付いて、早くも米價の著しい下落を示し始めてゐる。

一〇、價格と價值との關係

歴史的・社會的な事實として常に或る高さが與へられてゐると見る財貨價格に、變動を惹起する主要原因は、以上述べて來たやうな内容をもつ需要と供給とである。需給を構成してゐる内容は又上述のやうに廣い範圍に關聯をもつてゐるのであるから、簡單に需給とはいふけれども實は此の二つの範疇を通して經濟活動の殆ど全般が價格に働きかけてゐると云つても過言ではない。

而も需給の両面に關係せずして今日經濟生活を營むことは出来ないものであるから、吾々は一面に需要者となり他面に供給者となることに依て、社會的であると同時に具體的な數字に現はされてゐる價格を絶えず生活と活動の内に取込んでゐるものである。且つ既に云つたやうに、吾々は多く個々としては此の價格に著しい變動を與へるほど強力な市場的地位にあるものではない。多くの場合受身の形にある。してみれば財貨に對する吾々の個人的な評價が否應なしに、此の社會的評價によつて引きすられ、それを受容れてゆくことは看やすい所であらうと思ふ。吾々の個人的評價は無論これによつて完全に統一されることは出来ないけれども、概略程度では之れによる統一なしには吾々の生活は營むことが出来ない。吾々が從來の價值説とは反對に、價格が却て價值判斷の基礎をなすと考へる理由は此處にあるのである。尙價格については之れを類別して『獨占價格』『競争價格』『不完全競争價格』等とし、それぞれについて考察する問題もあるが、生活の現實現象の説明を主眼とする吾々の立場からは、價值や價格についての説明は以上で大方足りるのではないかと考へる。

第三章 貨幣と物價

一、貨幣とは何か

貨幣が取引に提供されてゐる總ての財貨を代表して、人から人へ授受される手段であることは、日常經驗をよく觀察反省する者の總て知る所であつて、經濟學上『交換の手段』と謂はれる所も別の意味あるものではない。財貨中には取引や交換から絶縁されてゐるものもない譯ではないが、既に述べたやうな分業が發達してゐる社會にあつては、生産は自家用品を得る爲めではなく、市場に供給するのが殆ど常に其の目的となり、『商品生産』と呼ばれるものを形作つてゐる。従て貨幣に對する信用が失はれるやうな特殊の場合を除けば、一般に財貨は賣買の目的物をなし得てゐる。そして賣買といふことは財貨の對手方に貨幣が立つといふことであるから、財貨は價格に應じて貨幣と等しいものとなる。即ち財貨——貨幣といふ交換は財貨Ⅱ貨幣といふ交換となるのであつて、此の發達した關係から貨幣を眺めると、右の言のやうに貨幣は財貨を代表するも

のとなるのである。人々が貨幣を尊重し之れを欲するのは勿論貨幣といふ一片の物ではなく、之れが代表する財貨である。財貨を代表するといふ事は財貨とかはり得るといふことに他ならず、爲めに財貨が欲せられる限り貨幣も同じ意味に於て欲せられることを考へてみれば、此處に代表するといふことの意味は十分了解されると思ふ。そのみならず、貨幣は財貨の容積や重量等の取扱ひ悪いものに比すれば、授受に極めて便利であるといふ特色をもつてゐる。交換の手段とか媒介とか見られて來た其の特徴は、一に貨幣の授受に適する性質から、以上の意味に於て授受されて來たことに由來するのであるから、吾々は以上の貨幣の本質を十分理解する爲めには、其の發達の經路を振り返つて見る必要があると考へる。

一、貨幣發達の概略

貨幣が通俗に『お金』と呼ばれるやうに、歴史上も金屬貨幣が發生してから貨幣は爾後の著しい發達を來すやうになつたのである。それ以前の時代に於ては、多くの人々に重要な財貨として共通に尊重されたものと、珍奇な品物として裝飾用等に廣く愛好されたものが、貨幣の起源をなしたと言はれる。前の例として我國の歴史上米と布とが最初に貨幣の職能を發揮し、又歐羅巴の

牧畜民の間に家畜が同様の役割を演じたものが擧げられ、後の例としては未開人の間に裝飾品として尊重され美しい貝殻の首飾が屢々指摘される。米と布とが貨幣の役に用ひられたことには、二の意味が含まれてゐたと思ふ。其の第一は吾々の日常生活に必要な財貨であるから、欲求に應ずるその效用方面から社會的に一定の價値が認められ、その價値に於て汎く受取られたことである。之れは近時前述した『物交』が行はれるやうになつて、吾々にも身近に思ひ當ることであつて、米や布といふ日常生活必需品ならば、誰れも略ぼ同様の評價の下に受容れてゐる。尤も此の社會的評價の統一は交換の中心地と見られるものとの交通便利によつて定まる地域に實現されるもので、交通状態によつては同一國內にあつても幾つかの評價圏が出來上ることは、お互の常識となつてゐる。金屬貨幣が未だ現はれないやうな古代にあつては、此の評價統一圏は勿論狭く限定されてゐたに相違ない。けれども廣狹に拘らず一地域内に於て以上のやうな評價が出來上ることとは確かである。之等の財貨が社會的に共通に尊重された第二の意味は、財貨が生活上必需品であり且つ其の時代に於ては大體自給されたものであるから、各人が其の生産の側からも略ぼ等しい評價を下し、此の方面からも共通の價値認識を擔つたものであつたといふことである。器具類の單純であつた當時の生産にあつては、それこそ文字通り生産に要する勞働の量は、評價の基礎

として重要なものであつたに違ひない。生産に於て自分達が忍ぶ勞苦は又他人の勞苦を測る標準となり、その結果である生産物に對する尊重の念は、此の方面からも略ぼ共通なものとなるのである。斯くて米や布が現實に授受される場合は勿論、後には現實の授受がないときにも、財貨價値を測り言表はす標準となつたと思はれる。現に中世になつて尙土地賣買の證書に「賣渡土地乃米之事」とあるものが残つてゐる。代價として米の量は頗る多量でそれほどの米が事實受渡されたとは考へ難いものであつた。かうした場合には米とはいふものの、それは現實の米穀であるよりも寧ろ價値の標準として用ひられたのであらう。

併し單に價値の標準をなすだけでは、貨幣は未だ其の本質を發揮したとは云へない。貨幣らしい貨幣となる爲めには、それは廣く他の財貨の代りに授受されるものとならなければならぬ。けれども自身財貨としての價値をもたずに、他の財貨從て其の價値を代表するやうなものが完成されるには、當然財貨の流通が長期に亘る發達を經過しなければならぬのであつて、それまでは貨幣は交換に於ける他の財貨をも代表するが、それと共に自身も亦欲求される財貨でなければならなかつたのである。廣く尊重される貴金屬が此の條件に最もよく適合し、貨幣として用ひられたことは、初めにも言つたやうに貨幣發達史上の一の大な道標である。價値低く又狭小な範圍

での交換手段としては、勿論米でも布でも用は足りたのであるが、價値大なるものの交換となると、それだけの米・布を運搬することは容易なことではない。又假令運搬されたとしても、完全な設備を持つてゐたとは考へられない時代に、多量の米布を生活必要量以上に多く貯へておくといふことは、恐らく出來ないことであらう。又米や布が媒介として用ひられた時代の生活にあつては、經濟活動も近距離を範圍とし且つ大體自給自足を建前としてゐたので、多量の價値を遠地へ運搬する必要もなかつたと考へられる。然るに中世以後交換の範圍が徐々に擴大され運搬する價値量も大となつて來るに従ひ、地金としての貴金屬は價値運搬の爲めと廣く愛好されるので、交換の具として役立つために貨幣として用ひられるやうになつたのである。それであるから貴金屬が貨幣として用ひられて來た貨幣發達の裏面には、どうしても廣く愛好尊重される財貨であるといふことがなければならぬ。裝飾用として又高貴な器具の材料として貴金屬が選ばれて來たことは、洋の東西を問はず史實の示す所である。今日尙残つてゐる「金一封」といふ言葉も、其昔は事實砂金を包んだもので褒賞用として用ひられたのである。地金そのままが金屬貨幣の最初の形であつたことは、今日でも所々に残つてゐる中世の花降銀といふものが之れを示してゐる。花降銀といふのは鋏で切れる程度の厚さの板銀で形はさして大きくはなく、表面に花のやうな又鳥

の足跡のやうな刻印が幾つか打込んであるもので、小取引には適當量を缺で切とり秤にかけて目方を確かめて使用した。その名残りは徳川時代になつても關西で銀何貫目の取引とか身代とかいつたことは周知される所で、西鶴や近松などに常に出て来る貨幣の勘定は之れである。又豆板といはれたのは小粒な相當厚味ある丸形扁平の地銀で、之れも亦一々秤量して授受された。之れによつて見ても貴金屬を地金として貨幣用途に宛てたのは、比較的近い頃までの事實であつたことが知られるであらう。

貴金屬は此のやうに事實地金として交換された。然るに専門業と財貨の交換とが相互に助け合つて發達し、生活が自給自足の罅を破つて、少くも一部は交換に頼るやうになると、授受される地金の意味は自ら異なつて来る。財貨を賣つて入手する金屬は常に財貨購入に於て手放される金屬となる。専門業の最も發達した都會生活に於て、此の現象は又最も早く起るものであつて、金屬貨幣につき其の財貨としての内容即ち地金の用途といふことは、何時か貨幣といふ作用即ち之れを持つことは賣買に於て他を得る手段であるといふことの裏に隠れて終ふのである。地金だから受取るといふことの代りに、他の財貨が買へるから受取るといふことになる。かういふ立場で授受されるようにならなければ金屬貨幣は未だ貨幣として確立されたとは云ふことが出来ない。

例へば名優が勸進帳の辨慶に扮するとする場合、舞臺にあるものは辨慶であつて某俳優ではなくなる。金屬貨幣が交換の手段として現はれ、一財貨としての金屬だといふことが忘れられるのである。貨幣が此處まで發達して來れば、夫れは初めに云つたやうに交換なり市場なりに現はれる他の財貨の代表者となる。貨幣が斯かる發達を遂げるには、當然徐々に發達して來た財貨交換の高度の發展を必要とするが、貨幣史上その惡鑄といふ事實は、此の發達を著しく援助した一の現象であることを此處に指摘しておかなければならない。貨幣の惡鑄といふのは、言ふ迄もなく額面價值例へば一兩とか一圓とかいふ價值量を變更せず、其の財貨内容である金屬の品質や量目を低下改鑄することである。斯かる惡鑄が起るためには、又それに先立つて政治上の權力が貨幣の鑄造若しくは發行權を掌握してゐなければならぬことは當然である。之れは經濟に價值計算の統一を與へることであるから、一般經濟社會の發達の爲めにも、權力者の財政確立のためにも必要であり、貨幣は又之れに依て強制通用力を賦與されるから、交換に於てのその機能は劃期的に進捗される。洵に貨幣が交換に於て事實上廣く授受されるといふだけと、授受されねばならぬといふ法令上の根據をもつこととは、流通上に著しい相違があると言はなければならぬ。そして此の發行權が權力者の手に收まり確立されれば、必要に當り良質の舊貨幣を權力によつて徴

收し悪質のものを之れに代へて流通させることは、最も手近な貨幣増收の方法をなすこと明かである。我國の歴史上でその最も大規模に行はれたのは、元祿年間に於ける判金の悪鑄が最初であつた。之れは時の幕府の極度の財政窮乏を救ふためにとられた手段であつて、慶長以來の純良な大判小判を幕府に納入させ、その金分を半減し代りに銀を混入したものを流通させたのである。勿論當時に於て貨幣の流通は經濟全般に行渡つて居り、地金はその意味を失つてゐたと考へられるのであるが、此の激變を目的の當りに見た人々は失はれてゐた地金の意味を俄かに回復し、非難は囂々として起り物價騰貴勃發し經濟界の擾亂は甚しいものがあつた。それにも拘らず一兩は一兩の價値を表明し續けて行つた。兩は元來貴金屬の量目秤量の單位としての兩を意味してゐたのだが、此の悪鑄は兩と兩との縁を絶つて終つたのである。享保の改鑄によつて金質は慶長の昔に歸つたが量目は減少してゐる。

三、貨幣の本質

以上は金屬貨幣がその内容である財貨としての地金から徐々に縁遠いものとなり、交換の手段として流通する爲めにのみ貨幣であるに至る経路を、幾分でも明かにしようとしたものである。

此の發達過程を経て金屬貨幣といふ俳優は立派にその扮する人物になりきることが出来た。従て其の價値も貴金屬といふ財貨の價値から離れて、貨幣が代表する財貨の價値が貨幣の價値となる理である。例へば十圓といふ貨幣で或る書籍一冊、或る巻煙草十本等が購入出来るとすれば、十圓は之等書籍や巻煙草を代表するのであるから其の價値は之等財貨の價値に他ならぬものとなる。故に此の發達段階まで来ると貨幣が貨幣であるのは、財貨の代表として市場に流通するからであつて、其の所持者又は受領者の立場から貨幣の此の本質を支持するものは其の流通に對する信用、碎いて云へば財貨が買へるといふ信用であるといふことが出来る。貨幣の材料として依然貴金屬が用ひられる場合には、此の信用を一層鞏固なものとするのと、貴金屬には一國の保有量に限りがあるから、所謂濫發に陥ることを防ぐことが出来るといふこととの意味があるに過ぎない。不換紙幣と呼ばれる金貨との兌換の保證が全くない紙幣でも、流通に對する信用さへ失はなければ立派な貨幣であるし、其の價値は貨幣を以て購入出来る財貨の價値に他ならないから、夫れだけの價値が認められることは當然である。現在吾々が使用してゐる貨幣はお互に熟知してゐるやうに、金貨とか金塊とかいふ貴金屬への連りは何も無いものである。全く印刷した一片の紙に他ならないが、貨幣の本質は却て此處に明かにされてゐるのである。

四、物價の意味

次に吾々は物價の問題に移らう。物價といふのは財貨價格を總括的に捉へたものであるから、總財貨の貨幣に對する交換の割合に他ならない。物價が高いといふのは勿論貨幣の價值單位である圓とか弗とか磅とかの財貨を買ふ力が低下し、此の貨幣の價值單位を標準にしていへば、之れとの交換比率に於て財貨の方が上騰することである。物價の低いといふ意味が之れと正反對であることは言ふ迄もない。此の貨幣の財貨を購買し得る力即ち購買力を又貨幣の價值といつてゐるが、以上に吾々が述べて來た貨幣價值の意味も之れであつた。即ち貨幣價值とはその代表する財貨價值のことだと云つて來たのであるから、その價值單位が財貨の少量從て低い財貨價值を代表するならば貨幣價值は低く、其の反面である物價は高いことになる。物價と貨幣價值とが斯くて全く同一現象を表と裏から眺めたものに過ぎぬことは自ら明かであらう。併し物價の問題は其の變動從て變動原因にあるのであるから、考察も亦それに入つて行くのであるが、その前に物價として捉へられる財貨價格の總括について少し説明しておきたい。

財貨價格の總括としての物價を具體的に示すものは『物價指數』といはれ、重要財貨の價格を幾つか集め之れを平均算出したものである。此の場合重要といふのは財貨の取引量の多少からも判斷されるし、又原料品價格はそれに加工精製したものの價格に影響すると共に、影響範圍が廣いものであるから之れを重要と視るやうな標準もとられる。集計平均される財貨の數は多いほど總括の意に叶ふこと勿論であるけれども、餘り多きに失するときは統計技術上操作に困難となるので、例へば日本銀行の卸賣物價指數作製には、昭和十一年以降百十品目の財貨につき價格が平均されてゐる。指數算出のための平均にも、算術平均を用いるとか幾何平均がよいとか、又『加重』するかしんないか等實際上の方法につき相違があるけれども、今は其處まで説明しなくともよいと思ふ。そして物價指數のうちに包含される諸價格の變動は素より一様ではない。洵に今日吾々が日常生活で知つてゐるやうに、財貨により價格變動の率は甚しく異なつてゐる。殊に今日のやうに、あらゆる方面に極度の不足を告げてゐる状態にあつては、欲求度の高い生活必需品ほど甚しい騰貴を來たす。所謂闇値では米と綿布とは戦争初期の價格に比し一時二百倍にも達したのに對し、他方騰貴率が十五六倍に止まるものもある。從て公定價格又は闇値何れの價格を標準にとつても、その總括中には甚しく程度の異なるものが包含されてゐることは知らなければならず、爲めに平均中包含される財貨數が多ければ多いほど、其の指數と其のうちの一部例へば生活

必需品を主とする日用品物價の指數とは、齟齬するのが當然となる。生活必需品の値上りのために最も多く苦しんでゐる現在の勤勞大衆にとつて、最も意味ある指數が後者であることは言ふまでもなく。

五、貨幣數量説

物價を形成する諸價格の變動を、需要として財貨に對し市場に現はれる購買力の變動、換言すれば財貨購入に向ふ貨幣量の變動に原因するものとして、説明しようとする學說に『貨幣數量説』として知られてゐるものがある。流通貨幣として市場に現はれる貨幣の數量が、諸價格を内容とする物價變動の原因として重要なものだとする思想は、相當古くから行はれて來たものであるが、流通貨幣量を決定する終局の原因は貨幣の發行高にあるから、其の増減は之れに應ずる物價の騰落を來さしめるものとの主張に到達する。素より購買力をなすものとしては、單なる貨幣の發行高許りでなく、之れを基礎とする銀行の貸附も小切手の形をとつて貨幣と等しく流通し、其の額は小切手に對する支拂準備金として留保される額を遙かに超えても尙安全である所から、流通貨幣額をその超過分だけは増加させてゐる。加ふるに購買力の大きさを考へる爲め一定期間をと

つて考へる場合には、同一の貨幣又は小切手が幾回も流通に現はれて來るから、その回数即ち流通速度と稱するものを考へに入れなければならない。更に通貨流通が取引財貨量を何等かの比率に於て變動させることがあるならば、之れは貨幣發行高の増減が物價に及ぼす影響をそれだけ變化することとなるであらう。貨幣數量説の主張は之等の考慮を拂つても尙その主張は維持することが出來るといふにある。今その説く所を出來るだけ簡単に紹介しておかう。

先づ銀行が貸附によつて借主に與へる所のものは紙幣といふやうな現金ではなく、借主の銀行預金への勘定をそれだけ増額することである。之れは借主にとつては現金を借入れると異なる所はない。彼れは今や増加した預金額だけ小切手を振出して、所要の貨幣支拂に宛てることが出來るからである。銀行は又經濟界の安定してゐる時期には、小切手の支拂にあてる準備金の十倍位までは、此の形で貸出しをしても安全だといふ。其の理由は自行へ宛てて振出された小切手も多くは人手を轉々して他行へ預入れられ、自行として支拂をしなければならぬのは、個人としての小切手の所持人ではなく他行であることが多く、然るに他行の同様の小切手も自行に預入れられるものがあるので、夫等は現金の授受なく帳簿上だけで決済されるからである。銀行貸附による小切手の支拂準備金以上の流通が、貨幣の流通を増加するのは此のやうな道筋を通つてであ

る。之れは確かに國家又は中央銀行が發行する貨幣即ち法貨の流通額以上の貨幣流通を作り出すものである。けれども此のやうな流通貨幣量の増加も、その基礎には法貨が支拂準備金として控へる爲めであるから、之れにあてられる法貨の發行高が變化すれば、それに比例して貸附は變化し、結局總流通貨幣量の増減は法貨發行高の増減に比例して物價に作用すると謂はれる。又法貨並に小切手を支拂にあてる其の保有・振出者の手許にあつても、兩者間には一定の比例が保たれる。前者の用途は賃銀・給料其他小額づつの支給にあり、之れに對應する原料仕入關係等の取引には小切手が用ひられて、兩使途の間には各業に於て夫れ々々一定の比率が保たれるからだといふ。次に通貨流通の速度については、之れは主として事業その他の支拂期に於て一定されてゐるので、流通貨幣量の増減には關係なく、財貨の取引量も生産の技術的關係が生産量を決定し、此の生産量が主として取引量を定めるのであるから、市場關係に現はれる通貨の多少は之れと關係なく、影響を及ぼすものではないと考へてゐる。それであるから當初述べたやうに、此の學說をとる者から見れば、物價に作用する究極の原因は法貨の發行高となり、而も夫れには比例的な影響を及ぼすと謂はれるのである。即ち方程式の形を用ひれば、 $(法貨)(流通速度) + (小切手)(流通速度) = (物價)(取引高)$ は結局 $貨幣 = 物價$ となり、前者の二倍は後者の二倍、前者の十倍

は後者の十倍を來すといふのである。

以上のやうな數量説の構想に對しては種々な點に疑問が投ぜられ、批評の試みられるものが少くない。殊に流通貨幣が總て財貨市場に現はれるものと見做してゐる點の如き、確かに假説としても過度なものといへよう。其處には説明されなければならぬ幾つかの問題があるに違ひない。それであるから單純に貨幣と之れに對して取引される財貨とは相對するものであり、其間の割合が物價に現はれるといふだけのことを、安定した經濟社會について認めるといふだけの主張とすれば、此説は何人にも肯定されるであらう。その代り詳細に亘つて論究してゐる點が、大方は大した意味をもたないことになつて終ふと云ふことが出来る。貨幣の量と物價との關係について吾々に最も重要なのは、兩者間の關係が變動期に於て如何なる過程を作り出し、其間に於て經濟界にどのやうな影響を及ぼすかの問題である。經濟の安定してゐる時期に、通貨量と物價とが比例關係に立つといふことは、此の變動期の現象を見る上に原則を示すといふ役には立つても、變動過程を直接説明することにはならない。殊に變動期にあつては次に述べるやうに、通貨の増大は多くは其の流通速度の増大によつて喚起され、兩者は無關係どころではなく、又財貨取引量の増大は之等の原因ともなり結果ともなつてゐることを考へれば、所謂靜態といふ絶對安定狀態

に行はれる關係は、そのままでは變動即ち動態といはれる状態の説明に寄與する所大なるものは云ひ難い。貨幣の量と物價との間の關係を模範的な景氣變動状態に於て眺めるために、吾々は先づ經濟界の景氣が變動する場合から考へ、其後に今次吾々が其中に生活してゐる敗戦經濟に於ける物價現象について説明を試みたいと思ふ。

六、景氣に於ける貨幣と物價

以上のやうな立場から吾々は以下景氣の現象を取扱つて行かうと思ふ。平時の經濟に於て物價が上騰するのは、景氣が不況から回復し好況へ向ふ時から始まり、好況期を通してそれ迄に騰貴した趨勢を續けるのが例となつてゐる。通貨の膨脹するのも此の時期であること勿論であるが、物價騰貴との間の關係は所謂インフレーションに於て前者が後者の唯一の原因とされるのは趣を異にする。回復期は普通不況期末に於ける建設用材等の需要増大若しくは其の豫想に基く此の方面の生産回復に端を發する。近代建設用材として鐵鋼は重要資材をなす關係上、製鐵業の事業・回復は此の變動の前驅をなすものである。此の事業回復即ち不況期に比し生産の擴大が始まると、労働者の就業増加に基く消費財貨への需要は大となるから此の方面の財貨價格が上昇運動を

始める。何となれば不況期を通過して來た時期には、滞貨は一般に極めて少く、急に増大し得ない供給に對し、需要の擴大が對するからである。此處には社會に就業の増加に依て増大した購買力が、所得者の消費として財貨の購入に向けられると考へるのである。それでは此の増大した購買力なるものは何處から出て來て労働者の就業を可能ならしめるのであるか、右のやうに製鐵業に於ける労働者の雇入れが増加したのだとすれば、此の事業は何處から賃銀支拂の資金を得て來るか。勿論生産回復の初期に於ては、事業會社にも遊金はある筈であるから、それが賃銀を通して財貨への購買力を作出するに違ひない。併しそれ以上の支拂は、銀行からの借入れ又は社債募集等により金融界から引出される。通貨は正に不況期の遊休状態から變じて、購買力となり市場に現はれて來るのである。此處に於て吾々は以上の簡単な關聯的變動過程を振返つて見て、貨幣と物價との關係を顧みることに着手出來る。そして其處に見出される消費財貨の價格の假令まだ小規模なものとはしても上騰が開始し、それが可能となつたのは、第一に従前よりも多額の賃銀支拂が生じ、次にその受領者たる労働者が階級として其の増大した所得を、財貨に對する購買力に向けたからである。之れは一層一般的に云へば、通貨の増大が物價騰貴を誘發してゐるものと思はれる。洵に如何なる物價騰貴も、通貨の之れに應ずる増大なしに生ずるといふことは

あり得ず、若しあるとするならば、それは其の豫想が供給に働く場合だけしか考へられない。從て物價騰貴の原因は通貨増大が原因となると見られるであらう。そして通貨の増大はインフレーションに相違ないから、右の場合にも本質上インフレーションが物價を騰貴せしめたこととなる。けれども以上の場合に於て通貨と物價とを關聯づけるには、二の點を注意しなければならず、之等の點を顧みると此の場合に兩者をさう結付けることは、決して正常なこととはならなくなる。その二點といふのは、第一に普通のインフレーションと呼ぶのは法貨發行による貨幣流通高の増大である。然るに景氣回復期に於ける通貨の増大は、事業の遊休資本の動員と銀行貸付とから賄はれるものであるから、直ちに法貨發行高の變動を必要としないことが考へられる。第二に消費財貨への需要を増加せしめたものは、建設用資材といふやうな所謂生産財貨生産の回復的増大であつて、通貨の増大は之れを可能ならしめる單なる手段に過ぎず、此の物價運動は通貨増大から始まつたのではない。従つて此の場合の物價騰貴運動は、原因としては寧ろ生産財貨生産の回復的擴張にありとする方が當を得てゐる。景氣が何時までも回復せず、之れに刺戟を與へる爲めに通貨の増大放策を採用することがあるが、さういふ場合には明瞭にインフレーション現象なりと云つて差支へない。併し之れを前の景氣回復期の物價上騰に較べれば、兩者の相違は著

しいものがあると思ふ。後者にあつては生産回復運動の條件として通貨の増大が作用するに過ぎない。條件と原因とは混同出來ないと考へる。更に景氣回復期の進行を見れば、消費財貨に對する需要の増大は當然その生産増大を招來し、此の方面に於ても社會所得の増加を來し、之れは又夫れ自身への需要増加を生み出すと共に、此の分野に於ける生産擴大は生産施設の増加を必要とするから、此の方面からも生産財貨生産への需要擴大が生れる。そして之れが生産財貨生産の擴張を適じ社會所得の増加を得て、消費財貨に對する需要増加を促進し來ることは看やすい所である。生産財貨生産の擴張に始まり消費財貨生産の擴大をも惹起し、更にそれが前者の擴張を誘起するといふ循環的累積的な生産増加の過程に含まれる經濟諸量の變化中、通貨量と物價との關係につき重要なものは次の諸點である。(一)通貨は小切手の形に於けるものを含めて流通速度が大となり、通貨量の増加と同じ作用を取引の上に及ぼす。即ち取引が敏活となるため、流通速度が同一ならば一層多額の通貨量を要すべきものを、比較的少額の通貨量で可能ならしめるのである。(二)通貨の流通速度の増大は、通貨に對する需要の緊迫を示し、法貨發行高の膨脹を誘致する。(三)生産分野に於ける通貨増大の一部は最初は、賃銀額の増加により勤勞階級の所得の増大を通して、社會的購買力の増加を生ずる。併し此の賃銀所得の増大は最初のうちは失業者の就業

あり得ず、若しあるとするならば、それは其の豫想が供給に働く場合だけしか考へられない。從て物價騰貴の原因は通貨増大が原因となると見られるであらう。そして通貨の増大はインフレーションに相違ないから、右の場合にも本質上インフレーションが物價を騰貴せしめたこととなる。けれども以上の場合に於て通貨と物價とを關聯づけるには、二の點を注意しなければならず、之等の點を顧みると此の場合に兩者をさう結付けることは、決して正常なこととはならなくなる。その二點といふのは、第一に普通のインフレーションと呼ぶのは法貨發行による貨幣流通高の増大である。然るに景氣回復期に於ける通貨の増大は、事業の遊休資本の動員と銀行貸付とから賄はれるものであるから、直ちに法貨發行高の變動を必要としないことが考へられる。第二に消費財貨への需要を増加せしめたものは、建設用資材といふやうな所謂生産財貨生産の回復的増大であつて、通貨の増大は之れを可能ならしめる單なる手段に過ぎず、此の物價運動は通貨増大から始まつたのではない。従つて此の場合の物價騰貴運動は、原因としては寧ろ生産財貨生産の回復的擴張にありとする方が當を得てゐる。景氣が何時までも回復せず、之れに刺戟を與へる爲めに通貨の増大放策を採用することがあるが、さういふ場合には明瞭にインフレーション現象なりと云つて差支へない。併し之れを前の景氣回復期の物價上騰に較べれば、兩者の相違は著

しいものがあると思ふ。後者にあつては生産回復運動の條件として通貨の増大が作用するに過ぎない。條件と原因とは混同出来ないと思へる。更に景氣回復期の進行を見れば、消費財貨に對する需要の増大は當然その生産増大を招來し、此の方面に於ても社會所得の増加を來し、之れは又夫れ自身への需要増加を生み出すと共に、此の分野に於ける生産擴大は生産施設の増加を必要とするから、此の方面からも生産財貨生産への需要擴大が生れる。そして之れが生産財貨生産の擴張を通じ社會所得の増加を得て、消費財貨に對する需要増加を促進し來ることは看やすい所である。生産財貨生産の擴張に始まり消費財貨生産の擴大をも惹起し、更にそれが前者の擴張を誘起するといふ循環的累積的な生産増加の過程に含まれる經濟諸量の變化中、通貨量と物價との關係につき重要なものは次の諸點である。(一)通貨は小切手の形に於けるものを含めて流通速度が大となり、通貨量の増加と同じ作用を取引の上に及ぼす。即ち取引が敏活となるため、流通速度が同一ならば一層多額の通貨量を要すべきものを、比較的少額の通貨量で可能ならしめるのである。(二)通貨の流通速度の増大は、通貨に對する需要の緊迫を示し、法貨發行高の膨脹を誘致する。(三)生産分野に於ける通貨増大の一部は最初は、賃銀額の増加により勤勞階級の所得の増大を通して、社會的購買力の増加を生ずる。併し此の賃銀所得の増大は最初のうちには失業者の就業

による就業者数の増加によるもので、此の期間にあつては賃銀そのものは騰貴しない。賃銀が騰貴を始めるのは、各事業に適合せる労働者が大方就業した曉のことである。従て此の期間に於て、既に以前から就業してゐる勤勞階級は、賃銀の騰貴を伴はざる物價騰貴に襲はれることになる。賃銀の騰貴は以上の理由から消費財貨の物價騰貴に遅れるのが常だからである。殊に勤勞階級中所謂俸給生活者の所得は、昇給に一定の規則が設けられてゐるのが常で、物價に應ずる増加の如きは異例に屬してゐた。従て之等物價騰貴に比し増加しないか又は増加する場合でも遅れるので、其の期間に於ては消費は從來の所得を以てしては減小せざるを得ない。之れは社會的にみれば一の消費節約であり、自分達の意思に反するものであるから『強制節約』といふ言葉が宛てられてゐる。(四)賃銀の騰貴と並んで物價に遅れ上騰するものに貸附資本の利子即ち金利がある。右に指摘したやうに此の景氣回復期の初期に於ては、生産が遊休資本の動員によつて増大することが出来るから、利子の騰貴は生じないが、生産擴張の進行につれ金融市場に資本供給の源泉が縮小して來ると、金利騰貴は當然發生しなければならぬものである。併し或る程度までの金利の騰貴は資本の借出しに不便を與へることはない。何となれば景氣の上昇に伴ひ、産業は利益を収めることが確實となるので、其の方面での信用が増大し、生産施設の評價は其の生み出す

利益を基礎として行はれるから、同一施設でも不況時に較べれば其の價値は大となり、資本借出しの爲めに提供する抵當又は擔保物件の値上りを來すからである。かくて生ずる金利の騰貴は貸附資本家の利子所得を増加し、此の方面に於ける購買力増大の原因をなす。(五)此の時期に於ける所得の増加中最も顯著なものは事業家の收める利益の増大である。その理由は勞働賃銀・資本金利を始め其他生産上の費用が、生産物の價格騰貴に比し遅れて發生し、又此の『遅れ』が或る期間存続するから、其の期間中利益の増加が繼續する爲めである。大事業家の收める利益からなる所得購買力は、勿論不況時に於ても財貨の購入を特に手控へる必要あるほど小なものではない。寧ろ反對に不況期の低物價時に於ては、之れを利用して却て購買力を増大し、建築工事・家具・衣類等耐久性ある消費財貨に對する需要は増大するであらう。故に景氣回復期に於ける利益増大が殊更夫等の財貨に對する需要増加を來すとは考へられないが、中小事業家の此の源泉から來る所得増加は、消費財貨に對する需要の著しい増加を來すものと考へられる。事業から生ずる巨大な利益は斯くて此期と之れに續く時期に於て、生産資本へ注入され生産方面に於ける需要増大に導くものである。

通貨量と物價との關係を見るために景氣の進行を尙一段階進んでみよう。好況の進行中にあつ

ては、生産費は終に物價の上騰に近付く。之れは一方に於ては價格騰貴に誘引された生産の増大は市場への供給増加となり價格は爲めに上騰傾向鈍重となり、それに反し生産費中勞銀は勞働不足から依然騰貴を續ける許りでなく、借入資本の利子は、金融界に於ける貸出資本の缺乏と貸出の累積とが、金融業者を不安に導き、之れは好況の終結が結局恐慌を招來すること疑ひなく、夫れに備へる爲めには常に貸出を制限する許りでなく、從來の貸附金の回收さへも必要ならしめるものであるから、此の時期に於ては貸出に對する利子は當然引上げられなければならない。金融界の指導者たる中央銀行の金利引上げは好況の行過ぎに由る恐慌に對する警告であり、之れに倣ふ一般銀行の金利引上げは自己の安全の爲めの貸出増加の防止策となる。此の時期に於て物價上騰の鈍る他の重要な原因は、回復期以來需要増大に應じて擴張し來つた生産財貨生産の事業分野に於て、既に相當量の供給を終つたので、生産規模は好況終末に近付くにつれ反對に縮小され、生産財貨に對する不急の需要は又生産物價格の騰貴のため、此時までに殆ど姿を消す事情からも、此の生産分野に對する需要は著減せざるを得ない。そして此の生産分野の生産縮小が、社會的購買力減少の上に如何に強力に作用するかは、回復期を開始せしめた反對作用を考へれば了解に難くないものであらう。生産財貨生産の分野から起る社會的購買力の減少に、恰も矛盾對立的

に好況の行詰りを促進するものは、消費財貨生産に於ける供給の増大である。供給の引締めを必要とする好況終末期に消費財貨生産が擴大してゐるのは、生産物の價格騰貴に誘はれて、回復期以來生産擴張に向つた施設其他が此の時期には既に十分整ひ、生産増加期に入つてゐるからである。そして此の方面での供給増加が物價下落の勃發と共に、景氣の轉換に拍車をかけるものとなることは言ふまでもない。

以上瞥見し來つた所によつて好況期終末に於ける財貨市場が、需給の關係に於て打克ち難い矛盾を包藏してゐることが明かになつたと思ふ。併し此の矛盾を恐慌へと追込む機會をなすものは、近代の經濟組織にあつては右に述べた貸附資本の缺乏であつて、それが遅延されれば危険を孕みながらも、恐慌の勃發は延期されるのである。それであるから近時の恐慌は金融恐慌だと言はれるのである。生産分野に於ける資金の缺乏である。吾々が此の時期に於ける一般状態を述べた後に再び此の問題を取出すのは、通貨と物價が此の時期に於て如何に關係するかを特に考へたいからである。そしてこのやうな金融恐慌が生産分野の恐慌を招來し、物價下落を齎す過程は、頗る明瞭に通貨收縮が高物價を抑制し、之れを下落へと追落とす因果關係を示すものといへよう。他方此の時期に於ける社會所得の縮小は、物價の上にこのやうな一時的激動は惹起しない

が、需要の低下を通して物價下落を必然ならしめる。即ち(一)勞働賃銀について見れば其の賃率は容易に低下しないが、失業者の増加によつて社會的總所得としては減少せざるを得ず、就業者に於てもその購買力は財貨の價格騰貴のため、内容に於ては決して大した上騰を來してゐる譯ではない。(二)事業家の收める利益は生産費昂騰のため著しく低下し、殊に一旦恐慌に陥れば積極的損失すら免れ難い場合が少くない。(三)金利所得は此の時期に於て増大するけれども、之れに依て作出される財貨に對する需要は、賃銀の場合と同じく物價高のために、爾餘の社會所得の缺を補ふやうな強力なものでないこと言ふまでもない。このやうに見て來ると、通貨が物價變動の直接原因として作用するのは、景氣變動については好況終末期に於ける物價下落の場合だけだといふのが妥當であつて、物價騰貴の場合には通貨の膨脹は寧ろ物價に作用される結果として現はれると云ふべきものと考へる。

七、敗戦インフレーションの特徴

却説以上は物價變動につき其の通貨との關係を確かめるために、平和時に於ける景氣變動の現象を、簡単に描出したのであるが、終戦後我國の經濟が陥つたインフレーションにあつては兩者

の關係はどうであるか。先頃權威なる筋から、夫れはインフレーションではなく生産事業に於ける資金の缺乏即ち金融恐慌だとの説明が出たことがある。併し一般の經濟學常識は此の説明には賛成し難いものと見受けられる。インフレーションの字義は勿論通貨の増大だけであるが、經濟上それが重要な現象をなす所以は、物價騰貴を惹起する點にある。現に終戦と同時に軍關係並に軍需生産方面で、莫大な通貨が放出されたとは當時誰れ一人知らぬものなき所であつた。素より巷間の傳聞には相當の誇大もあり、誇大は誇大を生んで真相を誤つ點少々ではないと思はれる。併し戦時既に之等の方面に發生した通貨増大の累積し來つたことは、戦時財政の尨大な數字が夫れからそれと事實を示し疑ふ餘地なき所である。加之戰爭目的に集中動員された生産力は莫大な所得を形成し、反對に其のために貧血状態に陥つた平和産業の生産物に對する需要をなして來たのであるから、當時既に物價の上騰は驚くべきものがあつた。吾々は昭和十九年下半年から翌二十年上半期にかけ、日に月に物價の上昇を體驗した。その記憶は未だ生新しいものである。然るに終戦後の昨年末から現在にかけての物價騰貴は、眞に日々驚きを新たにさせたこと云つても過言ではない。其の原因の主なるものの一に、昨秋稻作の收穫が甚しく不振であつたことを數ふべきは言ふ迄もない。次に述べるやうに財貨價格の變動は或る關聯を保つて生ずるものであるから、

萬難を排しても欲求される主食米が甚しく不足し、其の價格が昂騰すれば、代用品の價格も亦同様の上騰を來し、之れに依て強要される生計費の膨脹は又自然勞銀を押し上げずにはおかず、如何なる財貨も多少とも勞働の所産でないものはないから、凡ての財貨價格の騰貴を誘發することは自明の理である。けれども國內に於ける稻の不作は昨秋のみに限つた現象ではなく、平年作に達しないといふことは、我國の風土に於て必ずしも稀有なことではない。そしてかうした場合從來我國の經濟が臺灣と朝鮮からの移入を始め、遠く西貢からも米穀の輸入を得ることに依て、甚しい米價の騰貴もなく國內の需要に應じてゐたことは、事新しく云ふ迄もない。然るに敗戦の結果は之等の移輸入は杜絶して終つたのである。現に自分は昭和十四年に出版した經濟學の教科書に、當時尙本邦農業政策上の困難な問題の一は、安價な朝鮮産米の移入の爲めに、内地農民の蒙る壓迫を如何に處理するかにあると記したことを覚えてゐる。再後六七年、何人が此の激變を豫想し得たであらうか。而も米穀についての經濟事情の激變は、我國資源の殆ど總てに亘つて見られるといつても大過なきものである。そこで今次のインフレーション現象の特筆される二大原因は、一方に於ては戦時中から戦後にかけての通貨發行高の未曾有の激増であり、他方に於ては國內平和産業の萎微と領土並に外國貿易の喪失に基く物資の極度の貧困化である。剩へ國內平和産

業の衰頹は、戦時中の軍需産業への集中的動員を以て始まつたが、戦時中空襲による生産施設並に原料の莫大な喪失と、財貨の國內流通に對する水陸交通機關の大規模な破損に災ひされて、容易に回復し得ないといふ敗戦獨特の特徴まで具へてゐる。國內生産を阻害してゐる石炭や鐵の缺乏の如きも、無論國外に仰ぐ道を失つたことが主要な原因であるから、米穀について述べた移輸入の杜絶のうちに含まれる事柄ではあるけれども、添言的に記さずに居られないほど産業復興に支障を與へてゐる。それであるから通貨膨脹の流入した社會層——その中には罹災により一部にもせよ兎に角保險金を手にした戦災者も、此の不時の收入を使ひ盡すまでは此の層を形成してゐた——が、生きんが爲めに生活必需品の購入に向けた巨大な需要増加が、先づ斯種財貨の價格を吊上げたことは、看やすい所である。主食料を中心とする此の未曾有の價格騰貴は、勿論數日にして實現したものではない。最高幾許で取引されたといふ空想のやうな噂話があつてから、數ヶ月を経過すると夫れが廣く實現して來るといふ順序をとつて來た。價格の騰貴は平和時の景氣現象にあつては、前述のやうに大體之れに應ずる供給の増加を伴ひながらも、社會所得の累進的増大の爲めの上昇傾向を辿り續けて行くのであるが、今次の物價騰貴にあつては、價格騰貴にも拘らず供給が之れに應じて増加し難いから、充たされない需要は更に價格の引上げを敢て試みる。

洪水に襲はれた者の自分だけでも免れようと焦る姿である。供給は勿論價格上騰の度に幾分づつ誘ひ出される。それが又供給者側の手持量を減少してゆき、高價格と購買力の一層の拮出との間の循環を現出したのである。此の現象の最も甚しいのが一年に一回しか供給を補充し得ない自然の制限の下に立つと共に、幾度か繰返し述べたやうな國民の偏愛的主食である米穀について起り、又何時新しい供給が得られるか見通しのつかない衣料について生じたのは、餘りにも理の當然である。此の二必需財貨の極端な價格騰貴を先頭に立てる他の財貨價格と雖も、それぞれの騰貴を來さざるを得ない。之等諸價格の上騰に際し、其間に破格の利益を收める者が生ずるのは自然の成行きであるが、斯かる收入激増者の購買力と財産の支持ある者の購買力とは、此間にあつても衰へることはないから、夫等の階級に屬する者の生活は、幾分の制限を受けつつも支持してゆくことが出来る。然るに假令戰災保險等によつて一時の收入を得た者でも、其の額は低額に過ぎないのであるから、此の高物價に於ては久しく生計を支へることは殆ど出来ない。勤勞階級への賃銀・給料等の支給が種々の名目の下に逐次増加され、終に『突破資金』なる未聞の給與要求と其の實現が現はれることにさへなつたのである。併し之等給與の増加も一方に於ては大分の『遅れ』をなしつつ高物價を追驅けるに過ぎず、其の收入の實現するときは既に物價は一層の昂

騰を續けて先んじて居り、他方に於て物價を騰貴させて來た他の所得源からの購買力に、此の新たな購買力が附加されることに依て、一層物價騰貴を促進するといふ結果を招き、目的とする効果を收めることが出来ない。之等の事實は現に吾々を圍繞し、吾々が其中に生活してゐる社會に於て、皆人の體驗してゐる所であるから詳述の要なきものであるが、此の附加的給與の一端を捉へて見ても、又紙幣發行高の累増の急なのに注意しても、通貨膨脹と異常な高物價との循環的進行の惡質なることには、毫も疑ひを挿むべき餘地がない。此の現象こそ純粹の惡性インフレと呼ばれるものである。斯かる惡循環を阻止する途は、以上説いて來た所で十分指示されてゐると思ふが、需要に對應し得る供給を得る以外にはあり得ない。

以上の關係を再び生活必需品中最も重要な地位を占める米穀についてみるに、幸にして今秋の收穫は天候の恩恵を得て豫想外の豊作を得、加ふるに其の輸入も將來望みあるやに傳へられたので、米價は早くも相當顯著な低落を示し始めて來た。此のままの傾向が一層展開實現されることになれば、生活費の低下安定に基く合理的な賃銀所得の作用は、インフレーション經濟の救済に頗る有效なものとなるであらう。けれども今次のインフレーションに財貨側で缺乏を來してゐるものは、素より主食に限つたことではなく、平和産業の生産全部に亘ると云ひ得るものである。

仍て一般に生産を刺激し、かくて擴張された生産を以て膨脹した通貨に對峙せしめるのが、最も確實な對策となる。併しその爲めには之れを可能にする原料や施設が與へられなければならぬ。單なる貨幣額に於ける所謂生産資金だけの配置で、此の目的が達成されるとは考へられぬ。貨幣額に於ける資金が生産擴張に役立つのは、此の資金を以て原料其他の生産に要する生産財貨を獲得し得る場合だけであつて、之れが缺けてゐる場合には、生産資金なるものは結局名を生産にかりて其の關係者の消費向け購買力を増大させるに止まる虞れがある。然るに名實共に備つた生産の擴大を達成し得るためには、其の資材を求め上で外國貿易に頼らなければならぬ。國內の「渴した資源からは生産再建は絶対に不可能ではない迄も、長年月を要し其間に國民經濟が崩壊しないとは保障し得ないであらう。資源を他 仰ぎつつ工業製品を輸出し生活財貨を得ながら進むことこそ、我國經濟再建の大道である。

八、物價と價格群

物價問題について最後に顧みておきたいことは、物價が包含する諸價格のうちには、財貨、性質上連絡を保つて變動する群があるといふことである。之れは以上にインフレーションの現實問

題を説いたし、又其の體驗上お互に知つてゐる事實であるから、此處には夫れに體系を立てておけば足りる。其の第一は原料關係であり、第二は需要が結合してゐるもの、第三は代替關係である。原料關係としては、例へば木材とか鐵鋼とかが原料として高價な場合には、其の製品の價格も高からざるを得ないといふものであつて、此の關係から騰落の傾向を等しくする價格群は至る處に見られる。第二の價格群は「結合需要」と稱せられる現象の結果であつて、財貨の中には單獨に使用されるものもあるが、例へば筆墨硯の三者がその一を缺いても役に立たないとか、便箋と封筒とかいつた需要の組合せになつてゐる財貨も亦少からずある。之等はそのうちの「一が特殊な事情から供給の變化を來す場合は別であるが、さういふことがなければ價格變動の傾向を略ぼ等しくする。第三の代替關係に立つ財貨の價値が關聯してゐることは、今日米が高價であれば小麦粉・蕎麥粉・薯類等が其の收穫事情の異なるにも拘らず、同様の變動を來すことは周知知られる所である。尤も供給事情が其の時折の事情によつて甚しく變化するものと、比較的變化に乏しいものとは必ずしも同一傾向を示すとは云へない。魚肉と牛豚肉の價格關係の如きは其の例をなすであらう。併し多くの場合代用品の價格は同じ方向に變動すべきものである。物價の變動が斯うした價格群の變動を内含としてゐることは、物價變動を考へる上に忘れ難き所である。

第四章 生産

一、生産と分配の地位と生産の意味

經濟學の傳統的な説明順序に於ては、生産はその最初におかれ、價值・價格とか貨幣物價とかの問題は、其の後に取扱はれるのが普通になつてゐる。それは生産を主として財貨の生産として、生産に要する諸要素の説明だけをしておくならば、流通の諸問題に觸れること少くして考察が出来るからである。けれども財貨の生産といつても、多くの場合考察は財貨の價值が中心となり、價值を考へるとき又絶へず價格を頭の中におくのが普通であるし、身邊の現象から考へを進めてゆくには、生産要素よりも寧ろ價值問題から着手する方が適當と考へられたので、吾々は此の説明順序についての斯學の傳統から離れて、説明を試みて來たのである。加之、生産の結果は之れに携はる人々の間に直接には所得として、究局には所得を以て購入される財貨として分配されるのであつて、生産の組立ては又直ちに此の分配を規定する關係にあるから、同じく傳統的に

は分離されて取扱はれて來た此の二の現象を前後關聯して取扱ふことは便宜なしとしない。併し何れの説明順序をとつてみた所で、説明は結局關聯的に同時に了解しなければならぬ諸現象に順序を立てて取扱ふのであるから、便宜あるのみで、不便を伴はない順序のある道理はない。

生産要素の問題に入るに先立ち、生産といふ言葉の意味を規定して置きたいと思ふ。財貨を生産するといふが、それは社會的に價值を認められる物の産出又は獲得であつて、單に一個人にとつて尊重に値ひするものについていふのではない。曩に價值につき吾々は社會生活を營む以上、それが個人的なものではあり得ない點を強調しておいたが、その見方は生産を考へるについても用ひられる。殊に生産が既に述べたやうに自給自足の目的を失ひ、商品生産となつてゐる經濟社會に於ては、生産は價格ある財貨の生産であるとすら云へるのである。そして斯かる生産を認める立場も亦純粹に個人的ではあり得ない。例へば他人から財貨を買ふのは貰手にとつては、財貨の最も直接的な獲得であるから生産に違ひない。併し社會から見れば之れは甲の財貨が乙の財貨になるといふ所有關係の變化があつただけであつて、財貨は少しも生産されたり増加されたりしたのではない。それだから生産は其の主體から見れば勿論さうでなければならぬと共に、經濟學上では社會の立場からも亦生産となるものでなければならぬのである。此のやうな意味の生

産が行はれる爲めの要素を經濟學では普通自然又は土地・労働・資本及び企業の四として來た。仍て簡單にはあるが次に之等について説明しておかう。

二、自 然

第一の要素として古くは土地を擧げて主として農業に關して考へ、鑛業について幾らかの補足的な注意を拂つた取扱ひをして來たものである。經濟學上土地を取扱ふ本筋は昔も今も同じく斯うしたものであるが、土地といふも夫れは地表並に耕作や採掘に必要な程度の深度を考へただけでは餘りに粗雑であつて、かかる土地部分が耕作に役立つためには、それ々々適度の氣候・太陽の光線・雨量を始め、土地に必然的に附屬すると考へられる生産への自然條件が包含されてゐなければならぬ。此の意味で後に土地の代りに、同一要素の意味ではあるが自然といふ言葉が使はれたのである。此の要素の題目下に考察されて來た主な問題は、同一面積の土地生産力が爾餘の生産要素の投下の増大につれ徐々に生産力を低下するに至る傾向、即ち『土地收穫遞減法則』と名付けられたものである、例へば一定面積の耕作に五人の労働と五、〇〇〇圓の資本とを投ずるとき、生産物の量が一〇〇量位あると假定する場合、土地以外の二要素即ち労働と資本とを二

倍にしても、生産量は二倍となるものではなく、三倍にすれば増加の割合は愈々減少する。二倍の場合を一七〇單位、三倍の場合を二二〇單位と假定し得るやうなものである。之れは日常の經驗上當然なことで、労働と資本さへ増加すれば土地の面積は同一でも同じ割合で生産の結果が増加し得るならば、耕作面積を増大する要はなくなる。極端にいへば資本と労働を投じさへすれば十坪の土地でも國民の食料が生産されることとならなければならぬ。従て此の常識的な土地生産力に關する傾向を『收穫遞減法則』と呼んで、學問上重要視したのは少しく異な感もされるであらう。併し此の傾向は土地の生産力だけに關するものではなく、労働にしても資本にしても同様の傾向が認められ、適用範圍の廣いものである。總じて生産要素中一を増加せずにおいて、他の要素だけを増加しても、生産の結果は後者の増加量に比例するものではない。従て此の法則は土地の生産力許りでなく一層廣く適用されるので、一般に生産の結果を『収益』と呼ぶならば、『収益遞減法則』と稱せらるべきものである。それにも拘らず特に土地についてのみ此の法則が唱へられ重要視されたのは、文明國に於て他の要素就中資本は逐年著増してゆくが、人口増加を支ふべき農業の主要生産要素としての土地面積は、領土の擴張によらざる限り自然の制限下であり、殊に此の法則が注意を惹いた十八世紀末の英國社會にあつては、人口と食料との増加率が社

會の重要な問題となつてゐた爲めである。其後肥料・農具の機械化並に耕作方法の改良等に由り、此の法則の作用が農業の分野に於て少くも緩慢となつて來たことは顯著な事實である。

三、労働

第二の要素としては労働が指摘される。確かに働きかけられるものとしての自然と、働きかける労働とがなければ如何なる生産も成立たない。併し生産要素としての労働について従來主に語られて來たものは、分業及び合業と人口とが主なものであつた。分業と合業については簡單ながら既に第一章で述べて來たので、此の通例の労働の取扱ひからは此處では人口について考へておけば足りる。人口に關する考察は右に短言したやうに、其の増加が食料に關して不安を懷かしめるに及んで、眞劍なものとなつて來たのである。人口論といへば必ずマルサスの名が引合ひに出されるのも、さうした十八世紀末の英吉利の事情にあつて、此の新たな題目につき詳しい著述を出した爲めであつて、其の所説の摘要として常に擧げられるのは、食料は算術級數的に増加するに過ぎないのに、人口は幾何級數的增加をし、爲めに人間は食料の不足から増加を阻止される點に到達する運命をもつて居り、それから數多の社會的害惡が生じ得るといふものである。算術級

數とは一、二、三、四……といふ如き増加、幾何級數は一、二、四、八……といふ如きものであることは云ふまでもない。人口の増加が食料の許す所まで進行し、その盡きるに及んで止むこと宛も穀倉内の鼠のやうなものだといふ考察は、マルサス以前に既に説かれた所であつた。人間が鼠に譬へられるのは勿論愉快な話ではないが、人口増加が終局に於て食料によつて限定されることは、否定し難い所であらう。従て耕作技術・其の器具機械の改良等は直接國內に於ける食料増加に役立つこと勿論であるが、使用面積の割合に多數の人口を收容し得る工業の生産物を輸出して、國外から食料を輸入すること、人口そのものが直接移動して食料の豊かな國外へ移民すること等が、人口増加と食料との關係を改善するに役立つことは明かである。併し之等の人口増加對策も常に有效な場合許りはない。産兒制限政策は又場合により避け難いものとなるであらう。けれども其の結果は恐らく子孫の爲めに遠い將來を慮る智能階級とも謂はれ得る人口層のみが、代を重ねるにつれて著しく減少し、反對に無思慮な智能を缺く階層の人口増加を招來することになる虞れがある。加之、名を之れにかりる風俗上好ましくない現象も、當然發生し得るといはなければならぬ。産兒制限政策は夫れ自身としては一の立派な社會政策をなし得るものであるが、以上のやうな隨伴現象を考慮に入れるときは單純には判斷され難いものである。

労働の考察について人口が問題をなすのは、人口中大部分が勤勞階級として労働提供者であり、之れが社會の生産力を決定する重要要素をなすと見るからである。従て人口中非勤勞者が増加したのでは、人口の増加も直ちに生産力として取扱ひ得ないこと言ふ迄もない。社會に於ける生産力として労働を見る立場からすれば、人口と共に各勤勞者の労働時間並に勤勞階級の體力並に智能の如何も同時に顧みられなければならぬが、體力と智能の影響は常識上もよく了解し得る所であるから、説明せずにおいても差支へないと思ふ。労働時間についても勤勞者自身ならばよく知つてゐる所であり、又日常經驗上容易に觀察出来るものであるが、生産力は決して時間の長短に比例するものでないことを注意しておけば、概略としては足りると思ふ。即ち大概の労働種類に於て、就業即刻に十分な能率があるものではない。段々に調子が出て来るのであるから、或る時間の經過後が能率は最も大となる。併し近時の作業は分業の結果、概ね範圍の狭い仕事に限られ單調であるから、それから生ずる疲勞倦怠も相當早く来るものであり、高度の能率はさして長くは續かない。例へば朝仕事を始め晝食に休む場合、晝食の直前には一時能率の上ることはあるが、それに先立つ一定時間には徐々に能率の低下あるを免れない。午後の仕事は午前の仕事よりも能率低下は早く始まるのが普通である。故に労働時間の過度の延長は一時的場合を除き、

比較的效果を擧げ得ないものであり、又翌日の疲勞回復の不十分といふ點からみて、全般的には却て生産力を低下させる場合すらある。

四、資本

第三の生産要素としては資本が擧げられる。常に言はれるやうに原始的な生産にあつては、労働が自然に働きかけるだけで財貨の獲得が出来るから、資本は自然や労働のやうに生産が成立する

ために絶対に缺き得ないといふものではない。尤も未開人の間に於ける極めて幼稚な道具でさへも資本と云つて言へないことはなく、どのやうな労働でも殆ど常に何かの道具を使ふので、此の意味では資本も亦生産に缺き難いと云へるかも知れない。けれども斯う考へるのは近世産業に使用される資本の力と、それが生産に於て占める地位とを重要視しないものとなる。未開人の道具を資本となす如きは空理だと云はれても仕方がない。資本として意味をもつ限度は少くも其の獲得に相當大な費用を要するものでなければならぬ。近世産業が頼る動力機械や之れを据付ける作業場等が代表的な資本であることは云ふ迄もないが、近世初期の産業家が職人に貸與した生産道具の程度まで發達したものであれば、先づ資本と呼び得るものであらう。生産要素として擧

げられる資本は此のやうなものであつて、普通それ自身生産の結果であると共に將來の生産に役立つものといふ定義が下される。併し現代産業に於ける其の巨大な存在は、資本を生産要素中第一位におくべきものではないかと疑はしめる程である。事實資本設備をもち、夫れを支配し得る者は生産に於ても支配的地位に立てるが、さもなければ雇傭者の地位に甘んじなければならず、階級の分かれる目標とすらなる程重大なものとなつてゐる。然るに實際の用語例にあつては、資本といふ言葉は二の意味に使用されてゐる。一は生産財貨としての以上のやうなものであるが、他は貨幣額若しくはそれと言表はされるものであつて、某々の製作所は何百萬圓の資本だといふやうな場合である。そこで斯ういふやうに貨幣額で表はされる資本と、右に述べた生産財貨の形をしてゐるものとを區別するために經濟學上前者を單に『資本』と云ひ、後者を『資本財』と呼ぶ方法が相當廣く採用されて來た。此の區別を用ひると資本と資本財とは同じものの二の側面を意味することとなり、資本は貨幣で表はされた價值の方面、資本財は生産に技術的に役立つ財貨方面となる。それであるから或る機械が機械として見られれば夫れは資本財であり、一臺何萬圓といふやうに價值の方面から見られると資本なのである。そして此の區別からすると、前に取扱つた土地も田畑何町歩といはれるときは資本財であるが、何萬圓の土地といふやうな評價をされ

れば生産用の資本となることとなつて、從來資本から分離されて來た見方は排されることになるが、既に述べたことのある理由から、土地に此の區別を適用するのは却て不便だと考へる人もあらう。併し純理論的取扱から見れば土地も生産の手段であるから、其他の資本財と區別する理由は失はれることになる。

資本について次に起る問題は其の構成に關するものである。健全な發達をしてゐる社會の資本は常に増加してゐるものであるから、資本がどうして作られるか、増加されるかといふことは明かにされなければならない。資本の原初的發生は屢々節約に基くといはれ、此の考へは發達した社會に於ける資本の増加についても往々にして適用される。其の意味が、資本は將來の生産の爲めに保留されて、現在の消費に宛てられないといふにあるならば、疑ふ餘地のないことである。併し節約は節慾を意味すること多く、現在の消費から努力して斷念し、その斷念に伴ふ苦痛を我慢するといふやうな内容が與へられるならば、それは今日の經濟に於ける資本増加の現象には餘り關係のないことである。尤も克苦勉勵小資本を蓄積して自立を計るといふやうな個人の經歷は、今も跡を絶つてゐる譯ではないから、さうした場合には此の見方も當つてゐるに違ひない。けれども大資本が支配的勢力を振ふ資本主義的生産にあつては、資本を生み出すものは資本

であつて、さればこそ階級對立は常に愈々激化されて來たのである。洵に資本を生むものは資本であつて、其の途には二ある。一は資本の直接生み出した利潤の一部が資本に附加されて、その額を増加してゆくものであり、他は金融上の或る機構から資本家のために資本が形成される途である。併しその何れをとるにしても共通に考へなければならぬことは、貨幣又は一層廣く購買力の形で資本をなすものは、財貨生産に役立つためにはどうしても生産財の形即ち資本財とならなければならぬといふことである。例として何かの機械を考へることにしよう。貨幣であらうが小切手であらうが兎に角購買力の形にある間は、資本は生産に用ひられ得るものではない。此の場合では機械にならなければならないのである。購買力が機械となるためには、原料の鐵鋼・加工に要する勞働・其他設備や補助材料を機械の生産に向けるために、之等を直接消費にあてようとする購買力と競争して、それに打克たなければならぬ。一定時・一定社會の所分し得る之等の生産手段は任意に増加し得るものではないから、消費に向ひ得べき夫等を生産財貨の生産用に引上げて來なければ、資本財は得られないのである。斯ういふと以上に一度否定した資本構成者としての節約を少しく異なつた關係に於て再び採用しようとするものではないかとの疑問を起させるかも知れない。けれども以上に吾々が資本構成者として認めなかつた節約は、資本蓄積者

の節約即ち節慾の意味に於けるものであつた。然るに資本財生産の爲めに要される節約は勞働と財貨を内容とし、之等が社會の消費者へ直接消費として向けられることから節約が行はれて、資本財の構成に振向けられるのである。それ故に節約をするものは社會に分散してゐる消費者であつて、資本の蓄積者ではない。此の關係を最もよく示すものは既に述べた物價騰貴の時期に行はれる『強制節約』であつて、其處にあつては節約を強いられる者は、節約の利益を享ける者ではないから、近代の資本構成にあつては、始原的資本構成とも呼び得る自己の資本形成のための節約が、如何に小さな役割しか演じないかを了解することが必要である。

五、企業

以上の三の生産要素を生産目的のために結合する衝に當たる組織を企業とし、生産の爲めの第一要素としてゐる。單に生産の三要素をその目的のために結合するといふ點だけから見れば、生産が行はれる限り何時の時代にも企業はなければならず、其の主體としての企業者はあつた理である。例へば封建時代の農民も中世組合時代の親方職人も、此點から見れば企業者だと云はなければならぬ。勞働が自分のものであり又資本が自分の財産であつても、一身にして勞働者であ

り資本家であり最後に企業者であることに何の支障もあり得ない。けれども此のやうな意味に於ての生産の主體は今日云ふ企業者ではない。現在企業者と云つてゐるのは、生産に關する地位の上でも、仕事の種類の上でも、獨特の階級をなしてゐる者であつて、鑛工業に於ける産業革命の齎した存在だと云ふべきである。即ち其の生産に於ける地位は、従前の自分自身勞働に携はる親方とは違つて、全く指導者の立場にあり、仕事としては對内的には企業方針を決定し、對外的には市場並に金融關係等に於て企業を代表して行動する。資本關係は初期にあつては大體自己の財産を主要部分としたので、世界で此のやうな企業者の最も早く現はれた英國に於ても、前世紀の半頃までは資本家と呼ばれてゐた。併し企業の其後の發達は巨額の資本を必要とし、自家資本だけでは十分でない事情もあり、又企業の形が株式會社のやうに他人資本を蒐集する便利な制度を採用するやうになつては、自家資本許りに頼る必要も失はれたこともありして、企業者は判然と資本家から分離して取扱はれるに至つたのである。従て理論上では少しの資本をも持たずとも企業者としての才能と人格に對する信用さへ得れば、企業者になれる理である。勿論實際には、斯うした企業者は先づ無いと云つて差支へない。既に言つたやうに、資本を生むものは資本であつて、全く資本のない者には他人の資本を支配することは、言ふべくして實現出來ないことだから

である、以上に企業を説明するのに、企業者の説明を用ひたのは、企業が土地・勞働・資本とは別な生産要素であることを具體的に見たかつたからである。近代に於ける企業者は其の特徵的な姿に於ては地主でも勞働者でも亦資本家でもない所に、企業そのもの獨自の存在を示してゐると思はれる。

六、生産の原理

此處に生産の原理と名付けるものは、生産主體間に廣く行渡る生産精神とも呼び得るもので、生産の目的を示すものであるから、生産制度といふ方が解し易いかとも思はれるが、制度といふときは體制の意味となり、生産に限らず經濟全體に亘る自由主義的並に統制的構成の意味に用ひる方が適當のやうであるから此の言葉を用ひることにした。元來生産活動はその主體の生活保持とか結果の獲得とかいふやうな、自己の利益を主な目的とするものであるから、此の概括的な立場から見れば皆同一精神の指導下に立つやうにも考へられる。經濟活動の主體としての個人を「經濟人」といふ假設の下に總括し、それは悉く自利を追求する者として學問研究の基礎とすることも、此の見方からすれば領けるものとならう。けれども古くから注意され、近時又所謂資本

主義の壓倒的勢力を振ふにつれ、再び深く反省された立場からすると、此の自利として概括された經濟精神には、鋭く區別しなければならぬ二の對立する精神が含まれてゐるのである。其一は生産活動が主體の生活維持を目的とするもので『欲求充足原理』に従ふものと謂はれ、他は利益の爲めの利益追求を目的とし『營利原則』に據るものと呼ばれる。此の二の原理の對立の意味は、前者には欲求に限度があるに反し、後者は無限の欲求をなす點にある。生活支持が生産の目的をなす場合には、その生活が個人のものであつても社會全體のものであつても、生産物なり其の價值なりを無限に欲求する必要はない。反之利益の獲得が生産の唯一の目的となるならば、無限なき追求となるもので、近世資本主義の生産精神は斯くの如きものだと言はれるのである。生産は此の二の原理の何れに據るかに應じて構造を異にするので、吾々は次に之等の構造を描きながら、生産の原理を具體的に捉へてゆきたいと思ふ者であるが、それに先立て此の二の對立原理の基礎をなす生活欲求の構造に少しく觸れて置きたいと思ふ。

生活については既に第一章で相當詳述したやうに諸々の側面を包含して居り、各側面に振當てられる活動の勢力なり時間なりは限りあるものであるから、夫等をどう調和させるかに依て生活には型が出来、夫れ々々の型に相應して經濟的欲求の範圍が規定される。従て此の生活型を決定

するものは各人の抱く人生觀の他なく、生き甲斐を何に求めるかは其の規定する所であり、大別すると次の三になると思ふ。其一は生活上の欲求を全面的に取入れるもの、次はそれと對蹠的に欲求の一面を尊重し他の側面を之れに従屬させるものであつて、此の兩者は何れにあつても夫れ々々統一をもつ。第三のものは諸欲求が不統一のまま作用することを特徴とする。第一の構造から見ると之れは生活の各側面に調和的關係を求め、人間性の全體に生きようとするものだと言ふことが出来る。例へば稼ぐことに相當追はれながらも、趣味にも愛情にも、又智識の涵養にも生きたいと望むので、稼ぐことに専念すればもつと利得ある場合でも、生活の支持が安全に出来れば足るとして、其餘の時間や配慮は趣味・家庭生活と交友並に讀書にあてて生き甲斐を感じる人がある。此のやうなのは經濟的欲求に於ては所謂『知足』の型をなしてゐるものである。然るに第二の型は生活の一面的欲求に生き甲斐を見出し、他の側面を悉く之れに従屬せしめるもので、此の型には種々の生活型が含まれる。精神生活の一面に偏する者もあると共に、經濟方面に生活の全面を集中し、利得の追求に専念して飽くことなき者もある。之等はその内容に霄壤の差があるけれども、生活の一面を尊重擴大して他の面を蔽ふ點に於ては類を同じくする。第三の型は幾つかの側面を不調和不統一のまま生活に取入れる構造で、例へば何某は他の點では話の分る人だ

が事金銭の問題となると丸で別人のやうになるといふやうな場合、之れは金銭に對する欲求が他の生活面の欲求と不調和なことから生ずる現象と解すべきものである。

却説生活構造について此處に再びこのやうな詮索をしたのは、生産精神としての營利原則が如何なるものであるか、其の心理的な構造の緒に少しく觸れておきたかつた爲めである。近世資本主義の把握の爲めには其の了解は無駄なことではないと考へる。營利原則の意味は經濟活動の目的が以上に云つたやうに利得のための利得におかれるのであるから、第一の生活型即ち他の生活面の欲求との調和的關聯が此處では排棄されてゐることを特徴とする。そして此の特徴の内容をなすものは以上の分析によれば第二の生活型に見るやうに、人間の生き甲斐が之れに集中されるか、さもなければ第三の型に於けるやうに、此の欲求が他の欲求から獨立し他の欲求の制限を受けないかにあると言はれなければならぬ。營利原則が無限を追求するものとなるのは生活欲求の構造が以上のやうになつてゐるからである。儲けることが他の欲求から制肘を受けなくて生活に現はれるならば其處には際限がない。一萬圓得れば十萬圓を欲し、十萬圓得られれば百萬圓が望まれる。仍て若し更に詳しく此の問題を考へて行かうとすれば、第二と第三の型の生活構造が近世の宗教や倫理方面から如何に支持されるかの問題にまで深入りしなければならぬ。宗

教や倫理は人間の生活欲求構造に全面的指導者となるべきだからである。

七、營 利 生 産

營利原則に基く近代的生産を代表するものは、資本主義的生産と稱せられるものである。資本主義的生産の意味は之れが又資本家生産とも呼ばれることに依て、その内容を示してゐるやうに、生産要素としては資本が他の要素に對して優位を占め、人格としては資本の支配者が其他の生産要素の提供者に對して、等しく優位にあるものである。既に述べた企業にあつては、其の主體である企業者が資本の支配者であつたから、之れは恰も營利生産を指すものとなる。企業が生産に於て重要な役割を演ずるものと見られて來た時代は、其の語の内容が斯かるものであつたので、自分は企業の語に此のやうな意味を與へて來た。併し其後營利生産の組織許りでなく、國營生産のやうに利益追求に無關係のものにも企業の語を用ひ、特に之れを公企業と呼ぶ場合が少くないので、此の廣義の使用に従ふならば、以上に單に企業と名付けて取扱つたものは私企業として限定されなければならない。けれども實際の用語からいふと、單に企業といふときは資本主義的な生産組織を指すのが普通で、營利を目的としない公營の場合だけに、公企業の語が用ひられ

てゐるやうに思はれる。本書で企業を營利生産の意味に用ひて來た理由は此處にある。

資本が他の生産要素に對し、從て資本の支配者が他の生産要素の提供者に對し優位を占めるといふことの中には、次のやうな事柄が含まれてゐる。即ち資本は大規模生産を可能ならしめ、生産技術上壓倒的に有利な地位を確立すると共に、生産物の供給に於ても小資本小規模生産の到底打克ち難い好條件を確保することが出來るといふこと之れである。資本支配者たることは既に縷述したやうに或る程度までは資本の所有者を意味し、又支配は所有の作用を所有することに他ならず、支配することは此の場合所有することに異ならないのであるから、企業者は資本と土地の所有者に對しては、此の點に於て謂はば同類に屬するが、無所有者である労働の提供者に對しては、際立つた優位に立つのである。無産者である労働者は無産者たるが故に、他人の資本を借入れて生産を營むことが出來ない。彼等が生産に携はる爲めには否應なしに企業者の許に走り、其の労働を賣らなければならぬ地位にある。之れは資本を要する生産の技術が命ずる所なのである。企業家も此のやうな労働者が出現しなければ、其の生産を營むことは出來ないのであるが、斯かる労働者に對しては階級的な優位を占めながら、其の労働を得て生産に充當することが出來るのである。此處に於てか資本主義的生産の内容は、資本支配者たる企業家の生産技術的優

位と階級的優位とを基礎とする營利生産であることが自ら明かになるであらう、本書に於て企業者の地位といふとき、それは以上の二の優位的地位を指すものである。

資本主義的生産の組織は、以上のやうな企業者の立場からする生産の組織であるから、其の目的のために資本を蒐集することを基礎としなければならぬ。大財閥であるならば企業者の自己資本のみを以てしても、大規模な企業を營み得ること勿論であるが、自己資本を擁する者は他人資本を牽引することが出來るものであり、之れによつて企業の利益を益々増大し得るのであるから、自己資本のみに満足することは營利生産の原則に従はないことになる。資本は可能だけ増大されなければならない。そして此の目的のために最もよく適合し得た企業の形態は株式會社であつた。仍て次に出來るだけ簡單に此の組織を素描しておかう。

株式會社は資本の集合を内容とする企業組織である。或る程度の資本金を擁する發起人の醸出する資本が、その中核をなす事は見やすい所であるが、資本金は總て小額の單位に分かれた株式の形をとり、其の額の醸出者である株主は社會に多数分散するのが原則的なものである。親族會社と謂はれるやうな少数の株主だけで組織する場合もあるが、之れは株式會社の特徴を發揮するものではない。小額資本の出資者である小株主を廣く集め、その數の多いことから結局多額の資

本を會社資本として蒐集するのが其の狙ひ所である。株主側からみれば小額を以て大規模な事業に投資し得るのみならず、所謂證券性を備へる所から、株券の賣渡しによつて何時でも投資から手を引くことも出来るし、又有限責任制度になつてゐるから、投資額以上に損失を蒙る虞れがないといふやうな便宜もある。又企業方針其他會社企業の重要事項の決定は、株主總會の決議にまつものであるから、微力ながらも夫れに参加することが出来る。此點を表面的に捉へれば、小株主と雖も大會社の事業に**あづかる**こととなるのであるから、企業の民衆化とみるやうな見方も、出て來たのであつた。併し資本の株主制度から此のやうな見解をひき出して來るのは、全く皮相の考へであつて、實は中核をなす發起人株後に重役の持株となるものを増補擴大するのが、此の制度の役割であることは、今日總ての人の認める所であらう。其の理由は株主總會に於ける決議は事實上重役を中心とする大株主の意思を裏書きするだけのものが多く、異論ある場合の決議方は投票によるのであるから、所有株の数が投票数をなす制度に於て、小株主の投票が結局無力に等しいことは當然である。彼れの決議権の力を決定するものは、其の所持する株数であつて、其の人間としての資格でもなく抱懐する意見の良否でもない。株主の總會は實は株式の總會なのだと云つても蓋し過言ではないであらう。それだから吾々は最初に株式會社を以て資本の組織だ

と云つて、敢て株主の集合體とは云はなかつたのである。又株主は會社の企業に参加するやうに見えるものの、其の贖出に對して收得する利益配當なるものが、實は企業利益であるよりも一層多く貸附資本に對する利子の性質をもつといふ事實は、企業者の群に屬する如き外觀の裏面を此の方面からも知らしめるものである。利益配當の資本利子化は株價が配當率に依て變動し、結局 **同時に利益を標準として規定される爲め**、此の株價で株式を購入する者にとつての配當は、貸附資本の利子に他ならないことにより、容易に窺知することが出来るであらう。尤も會社設立當時から株主となつてゐる者にとつては、株價は拂込金額であるから、取得する所は企業利益の配當であらうとの疑問も生じ得る。けれども此の場合に於ても一般株主の會社に對する關係には根本的な相違はない。詳細に立入ることは出来ないけれども、僅かに荒筋だけを示しておかう。

株式會社の設立には二の方法があつて、一は發起設立と云はれ他は募集設立と呼ばれる。發起設立といふのは發起人が各贖出資本を持寄り、資本金としての不足分は銀行の引受を得、發起と同時に會社が成立するもので、その爲め此の方法には同時設立の名も與へられてゐる。故に株式の一般への賣出しは發起當時には行はれず、之れは發起人が所持しなければならぬ一定期間の

經過後、引受銀行から賣出される。然るに此の一般の賣出しが行はれるまでには、其の保有銀行は十分の操作と見通しをつけるものであるから、一般公衆が株式を購入するときには、株價は既に上述のやうな配當の金利化された價値になつてゐるのである。之れに反し募集設立にあつては發起だけでは會社は成立せず、一般株主の應募を得、創立總會の開催をまつて會社が出来るのであるから、株價の操縦は其間に行はれ得ないやうに見える。併し發起人は會社設立の爲めの勞務に報ゆるため、株式を得るのが常であつて、之れは勞務出資の形をとるから其の得る株式は現實には資本の拂込みなきものである。又發起人としては事業の性質上大體利益が何程となり、配當は、之れに準じて如何なる歩合となるかの見通しのない者はない。此の豫測配當歩合が金利を超過するだけは資本に換算し自己の勞務出資分として得ることは頗る容易の業である。さうすれば事業の擧げる利益を全株式に分配するとき配當が金利と等しくなるのは理の當然と云はなければならぬ。勞務出資分即ち發起人の報酬は斯くて内容なきものから内容の充實したものに變化することが出来るのである。してみれば會社の設立當時から應募して株主になつた者も、利益配當としては金利以上のものは割當てられないこととなるであらう。そして斯く發起人が事實拂込みをせず得る株式を水株と稱し、水株を作ること混水するといふ。その意味は恰度酒に水を割

つて稀薄にするやうに、利益の大きな事業の資本に無拂込の空虚な株を混じて利益を少なからしめるといふにある。

以上のやうな構造と作用とをもつ株式會社は、正さに資本を以て生産利益を追求する資本主義生産の典型的な姿といふことが出来る。けれども企業者たる發起人從て重役の資本は、株主の贖出を得るだけをもつては未だ満足しない。會社として資金借入れの爲めの社債發行を之れに附加する許りでなく、資本は株式會社の構造を利用して、或は他を併呑し或は他と連結して、利益追求の網を更に押擴げて行く。企業集中といふのは其の種々な構成に對する總括的な名稱である。

八、企業集中

企業集中の形態として從來常に數へられて來たものは、トラスト、カルテル、コンツェルンの三である。次に其の構造の概略を記しておかう。

トラストといふのは邦語で合同と譯されるもので、主として同種企業會社の株式を買收し、之れを信託の形として信託證券を發行交附し、買收した會社の事業を自己の掌中に收めるものである。其の目的とする所が、之れに依て其の事業分野を壟斷し、獨占者としての利益を得ようとする。

るにあることは周知の通りである。併し合同形成の方法としては事業會社が以上のやう、同種の事業會社を買収するとは限らず、當初から此のやうな獨占體を作る目的をもつて會社を設立することが行はれる。他會社の株式をもつことが目的であるから、之れは持株會社である。その最も効果的な方法は先づ金融機關を入手することで、其の株式の過半數を入手出来れば、金融會社の支配下にある資本力を自己の欲する方面に投資させることが出来る。そして此の額は金融機關自身の資本額を遙かに超えるものであるから、持株會社の資本は此の途をとることに依て甚しく擴大されることになるのは當然である。殊に持株會社の設立そのものに於て著しい混水が行はれるならば、持株會社の重役の資本はトラストに於て其の額をどれほど増加運用出来るか知れない。近世資本主義生産に於て資本が如何に異増的な作用をもつかは、此の集中組織に依て知ることが出来る。

次にカルテルは同種産業に従事する企業間の契約による結合であるから、聯合と邦譯されてゐる。此處にあつては加盟企業はトラストに於てのやうに他に併合されるものではなく、獨立の存在を保つてゐるのであるから、契約事項についてのみ共同の行動をとることとなる。生産量を協定する生産カルテル、生産物價格、販路に關する價格カルテル及び販賣カルテル等の稱ある所以

である。併し之等企業活動の一部分のみに關する聯合を以てしては、目的とする事業の獨占を實現する上に十分だといふことが出来ない。シンディケート組織は此の缺を補ふもので、之れにあつては聯合企業は外部との交渉を悉くシンディケートを通して行ふと共に、生産の割當ても之れから受けることになつてゐるから、單獨行動により聯合の目的に違反する虞れは失はれることとなり、加盟企業の獨立は企業者の立場からすると有名無實のものとなる。

最後にコンツェルンは名目上獨立してゐる企業の中に、生産・管理・取引・殊に財務につき連繫を保つ組織であつて、其の代表的なものとしての親子會社は此の結合の内容をよく示してゐる。親子會社の本來の關係は、親會社が子會社となるものの株式過半數を出資することに依て會社を設立し、之れとの連繫によつて利を收めるにある。之れは親會社の資本が自己の事業を営むために十分な限度を超え、其の超過分を以て更に同一事業を擴大するよりも、關聯ある他種の事業に投資する方が有利ではあるが此の事業が相當の危険を伴ふ爲め、全面的にそれに着手するには幾分躊躇されるやうな場合には、最も好適な途と謂はれる。株式の過半數をもつてゐれば企業の方針は左右し得るし、且つ事業が成效しない場合にも其の投資分だけの損失を負擔すれば濟むからである。けれども親子會社は此のやうな本來的な關係から許り成立するものではなく、事業

上原料生産や生産物供給先の關係は元より、幾分かの關聯があつて、子會社とすることが有利な場合にはコンツェルンが形成される。加之、子會社の立場からも事業の規模が小さく經濟關係に於て常に弱力者の地位に甘んじなければならぬものは、親會社の傘下に立つことにより一躍して大組織の一環となることが出來、それに伴ふ利益を收めることが出来るから、親子の實子關係ではなく謂はば他人の子でありながら、養子養女の縁組みを求めものが生ずる。之れは親會社の関に入るものであつて、財閥なる語はそのまま此處に適中すると言はなければならぬ。

企業集中についての以上三種の結合形態の特徴につき。吾々は以上に其の本來的なものだけを摘記するに止めておいた。併しトラストにせよカルテルにせよ又最後のコンツェルンにせよ、其後の發達は益々互に歩みより、形式上は兎も角内容上は頗る接近したものになつて來てゐる。吾吾は其處に企業の集中を通して資本の集積を看取すべきものと考へる。企業集中による生産物の市場獨占は、素より社會の經濟構造に於て深く注意されなければならぬものであるが、近世經濟の構成上資本の集中的集積は、一層重要な意味あるものと云はざるを得ない。資本金の尊重か、人間生活の尊重か、此の問題はやがて分配を取扱ふ條で考慮されなければならない近世經濟社會の最も大なる問題の一つであるが、以上のやうな機構から資本の愈々巨大な集積を見る毎に、吾々は

考へさせられるのである。欲求充足のための生産は、此の問題に生活の立場から解答を與へようとする組織である。

九、欲求充足生産

欲求充足を目的とする生産の組織は、個人生産では農漁業等に於けるやうに自家用にあてる部分の生産・國家又は地方自治體が國民若しくは住民の欲求充足の爲めに行ふ生産、最後に協同組合が組合員の消費の爲めに營むものである。第一のものは説明するまでもなく簡單なもので、唯此處には他へ賣却する目的の生産とが混同して同時に行はれ、假令豫定にあつては生産物の半を自家用とする計畫が立つてゐたとしても、實際收穫の結果によつては自家用には、三分の一を以て足りる場合もあらうし、又反對に三分の二を此の目的のために保留することとなることもあらう。兩目的への充當は頗る融通性に富むものである點に特徴があるだけである。國營・公營の所謂公企業には収益を目的とすること我國の煙草專賣のやうなものもあるけれども、多くは國民又は住民の厚生福祉と國民經濟支持の必要上私人の經營に委ね難い場合に、此の組織が行はれて來た。尤も社會主義社會にあつては、少くも重要生産部門は私企業者の營利目的のための經營に委

ぬべきものでないから、之れが國・公營に歸することは當然である。又斯かる社會に於ては營利の具である資本そのものが、國家其他公共團體の有に歸するのが原則であるから、重要な生産部門が私企業として行はれる餘地は残されてゐないのである。併し現實の問題として吾々の社會にあつては、少くも近き將來の見通しとしては、民主化された自由經濟が吾々に開かれた經濟構造であると考へられ、此の構造内に於ける欲求充足原理による生産組織としては、協同組合が最も實行性をもつと共に、重要な存在とならなければならぬと考へられるので、此種の生産組織としては之れにつき概説しておかうと思ふ。

協同組合は前世紀の半、資本主義の隆盛目覺しい英國に於て、極めてささやかな消費組合として發足したものである。消費組合であるから組合員の僅かな醸出を資本として、其の消費する財貨を生産者又は卸賣商等から直接買受けて組合員の需要に應じた。此の餘りにもつつましやかな仕事のうちにも、組合は少くも小賣商の占める中間利得を排除することが出來た。之れは既に消費者としての組合員が、購買に於て資本主義的搾取から遁れようとする努力の第一歩である。尨大な資本力に依て運轉してゐる經濟社會の構造からみれば、之れは眞に顧みられるだけの價値もないものであつたけれども、其の組織精神のうちに吾々は既に今日巨大な勢力となり、資本主義

生産を向ふに廻して戦ふだけの主張を看取することが出来るのである。其の旗幟は『正當價格の樹立』と『利潤の排除』の二であつた。利潤の語に分配を説くまでなるべく用ひない事として來たが、企業利益即ち企業家の儲けに他ならない。従て此の標語は二つになつてゐるけれども、結局歸一するもので、正當價格といふのは儲けの入らない價格即ち原價であるから、夫れが樹立される限り利潤は當然挿入される餘地がないし、又利潤が入らなければ價格は原價だから正當化されることになる。此の標語が資本主義的生産制の否定であることは云ふ迄もない。生産は消費への供給を目的として營まるべきで、企業者なる特權階級の利益のために行はるべきでないといふのである。

此のやうな精神をもつた協同組合は、營業用の資本としては組合員の醸出と預金並に外部からの借入金に頼り、其の醸出は大體小額の株に分れて居り組合員の持株の數には制限がないのが普通であるが、組合員の組合に對する資格は持株の多少には全く無關係である。此の點は株式會社の構造と最もよい對照をなすもので、組合の最高意思決定機關は、株式會社に於けるやうに組合員總會があるが、そこに於ける投票議決權は持株の多少に拘らず一人一票となつてゐる。之れは組合が組合員といふ人格の結合であつて、會社のやうに資本の結合ではないからである。人は人

たるが故に意思發表が出来、夫れは平等に取扱はれるのであつて、金を出してある程度によつて其の効果が異なる必要は此處にはない、協同組合はかく平等と共に自由の思想を根據としてゐるものであるから、入會にも脱退にも特に制限を設けないのが原則である。入會に際しては普通組合規定による組合員一定数の推薦又は紹介を要することになつてゐるが、之れも入會を困難ならしめる目的からではなく、組合員としてふさはしい者を仲間に持ちたいといふ希望の現はれに過ぎない。組合で取扱ふ財貨の價格については正當價格が建前であるから、原價に組合の取扱ひ費用を加算した額で供給するのであるが、各販賣毎に費用を加算することは、必ずしも正確を期し得るものでなく、又一般市場價格より低價に供給するときは財貨が組合員外に流れ、目的とする組合員への供給に支障を生ずるといふ虞れもあらう。仍て組合の販賣價格は市價並とし、決算期に購入財貨の總價格に應じて利益金の割戻し配當を支拂ふことになつてゐる。之れに依て組合員は内容に於ては正當價格の購入をして居ることになる許りでなく、感情的に購入から配當を得るといふ喜びをも味ふことが出来るのである。

以上は協同組合の地域的供給體である消費組合について略説したのであるが、財貨の仕入れが資本主義的な生産者に仰がれるならば、其の活動分野は甚だ狭く高々中間商人の利潤を排除し得るに過ぎないものである。正當價格の徹底のためには、どうしても生産の領域まで手を延ばさなければならぬが、地域的供給體の規模を以てしては之れは到底望み得る所ではない。生産に携はる以上巨大な資本の生産技術上舉げる利益を収めなければ、一方に於て利潤は排除することが出来ても原價自體が大となる結果、組合員への供給は却て市價よりも高價になることもあらうし、さうでないとしても望むやうな配當は不可能となり、所謂主義倒れに終るであらう。協同組合の聯合會なる組織が出来るのは此の必要が主な理由である。尤も組合の聯合會は單に所屬組合への生産組織となる許りでなく、主義の宣傳・組合員への醫療・教育・娛樂等の仕事をも持つものであるが、生産を大規模に營み生産上企業と對立し得るだけの組織となることは、資本主義生産の行はれる社會に於て緊急事である。此の方面に於て組合運動の先驅者である英國の協同組合は、英蘭卸賣聯合會をもち、之れは蘇格蘭卸賣聯合會と提携し、其の規模の大なること正に大企業の壘を摩するものがある。洵に産業民主主義の好典型である。

第五章 分 配

一、分配の意義と組立て

經濟學の上で分配といふのは、生産の結果が生産に携はる人々の間に分かれたることを意味する。生産に携はる仕方につき企業者や組合の理事のやうに、自ら生産の計畫を立てその遂行につき配慮する主體若しくは代表者と、かうした生産主體に雇はれて種々な労働に従ふ労働者の二者は、人格的に直接生産に關聯をもつものであるが、資本と土地との所有者はその用益を提供するといふ所有者と借手との間の關係としてのみ生産に關與するのである。そして此の生産への参加から之等の人々の分配を受ける仕方は、労働者・資本家並に地主の三者は、現實の生産の結果が未だ現はれないうちに、各の分配分は價格の形で決定され、生産主體だけが之等の價格支拂を差引いた殘部を生産の結果として受取る。従て前の三者の分配額は各生産へ提供するものを賣り、生産主體は之れを買ふといふ賣買關係で定まるのであるが、このうち地主と資本家は各自所有物

の使用即ち用益を賣るだけであるけれども、労働者にあつては労働するといふ自己の人格から切離せないものを賣ることに於て生産に關與すること云ふ迄もない。此の人格から切離せないものを以て關與する點に於て、彼れは生産に於て生産主體と異なる所なき關係に身を置くのである。兩者の相違は生産についての差異ではなく、寧ろ主として主體と雇傭者、指導者と被指導者との人間關係に於ける相違である。此點は後に相當展開して考へなければならぬ問題を包蔵してゐる。

生産主體を除く以上三者の分配分は價格として決定されるのであるから、先づ貨幣額に於ける所得の形に於て現はれ、又所得の型としては地代・利子・勞銀及び利潤の四として取扱はれてゐる。そこで此の四の型に、分配論では『所得範疇』とか『分配範疇』とかいふ名稱を與へるのが普通で、一見難解に響く範疇といふ語も此の場合型と考へれば差支へない。此の所得範疇が右の四に分けられる基礎について今一度詮索してみたい。地主の土地用益を賣る價格が地代であり、同じく労働者の労働を賣る價格が勞銀若しくは賃銀であることは、既に述べた所であるが、分配考察の上で地主として取扱はれるものの中には社會並に經濟生活上獨特の共通點をもち、労働者と云はれる者の間にも同様の共通特徴がある所から、其處には近世的な意味での『階級』といふ

重要な社會現象が生れて來、分配決定の上に作用ある底流をなしてゐる。爲めに所得の範疇は階級所得とも云はれて來た。分配論は個人の所得決定上の問題を取扱ふのではなく、階級所得を取扱ふといふことは、經濟學の上で極く無雜作に云はれる所であるが、之れは分配現象の性質を深く考へる者にとつては、此上なく重要なこととも云へるであらう。階級といふのは生活の程度・政治上社會上の地位及び仕事の種類等を等しくする仲間の意味に他ならない。それに暗黙の間に上下の區別が含まれてゐることも亦之等の内容から否み得ない所である。即ち生活の程度に見れば、労働者階級に屬する者の衣食住が如何なる水準にあるものか、少くも從來普通に見られる所では所謂相場の決つたものである。政治上にしても我國の場合に於ては、敗戦による民主制への轉換以前にあつては、議會で國民を代表する者も労働者以外の階級の代表に過ぎず、労働者は議會に於て謂はば口を持たない者であつた。社會上の位置は智識程度につれて低いのが當であつて、此の階級は概して此の方面の涵養の餘裕なき者であるから、其の結果占める地位も高い譯にはゆかない。無論此の階級から出て社會上高い地位を占めるに至る者が絶無だといふのではないけれども、地位の向上を得たものは最早此の階級から脱した者である。加之、此のやうな場合は例外に屬すると云つても過ちではない。仕事の種類はといふと主として筋肉労働に屬し、素質

や教養が優れてゐたとしても夫れを役立たせる機會は殆ど與へられない。かうした生活内容をもつ此の階級所屬の大衆は、それに應じて仲間の意識をもたない譯にはゆかないので、殊に自分達が直接接する企業者の生活内容なり仕事なりが、全く對蹠的に秀でてゐることは、此の階級意識を強めるのみである。社會を二分して有産階級と無産階級とする見方も如上の現實に根ざしてゐるもので、無産階級の立場からする偏頗な見解に基くものではない。

労働者を其の内容とする無産階級に對し有産階級として一括されるものの中に、地主・資本家・企業者の三者が包括されてゐる。之等は勿論各自生活内容に特色ある型をもつてゐるが、既に述べたやうに労働階級に對比すれば優位にある。地主の生活には所得が安定してゐる傾向、所有地が自然には増殖するものでないから自ら保守的になり、又自身は都會に生活して所謂不在地主であつても、地方生活との交渉が絶えないのであるから、事業的傾向が少くないといふやうなことは吾々の常識として考へ得るであらう。此のやうな生活型は地主の間に、資本家や企業者とは異なつた階級意識を生むに相違ない。殊に今次の農地整理による所有地の減少に伴ふ諸般の問題は、地主に共通の利害關係をもつ結果、此の意識を更新せざるを得ないと思ふ。併しさうした相違が有産階級に屬する三の型の間にあるにしても、少くも之等階級を通じて社會・政治・經濟等

につき、或る程度の共通意識がもたれてゐることは争へないであらう。妻より階級を等しくすると云つても、其中にあつて内容に差あることは明かである。所有する土地が五反歩でも一町でも百町でも等しく地主階級に屬し、資本にしてみても一萬圓の出資でも百萬圓の出資でも同じく資本家階級に屬する。斯かる程度の差から各の生活内容が著しく異なることも亦當然であつて、現に今次インフレ以前に於ては十萬圓の資本をもつてゐれば、其の利子で不體裁ではない生活が營み得たが、インフレによる物價昂騰の結果此の程度の資本から生ずる利子では、勞働階級の生活すら營むことは出来ない。それでも資本を事業に投資してゐる者であり、此點に於て資本家には相違ない。けれども吾々が考へる場合のものは其の經濟關係による典型的な生活内容を以て、之れを代表するものである。經濟學はそれ以上の具體的詳細にかかはることは出来ない。

以上のやうに吾々は所得を其の階級的な範疇を通して眺めてゆくのであるが、何れも先づ貨幣額に於て捉へられる。勞銀が日給十圓といひ、利子が資本金額に對する歩合に於て現はされ、地代が反何圓といはれ、利潤が同じく貨幣額を以て數へられるやうなものである。併し此の貨幣額の形で言表はされる所得は、夫れを以て獲得し得る財貨に於て意味をもつに過ぎない。之れは既に貨幣の本質について詳述した所であつて、所得に關して再言するならば夫れを以て購入し得る

社會的生産物の數量が所得の内容をなすのである。それであるから所得内容は一方に於て其の貨幣額、他方に於て貨幣の購買力即ち物價といふ此の兩側面に依て定まる。この事は現時のやうなインフレ時に於ては皆人の知りぬいてゐる所であつて、例へば以前月收三百圓の所得があり夫れに應じて生活してゐた者が月收千圓になると理窟の上では兎に角、月千圓といふのは相當多額の收入になつたやうな感じをもつのは誰れしもあることと思ふ。而も物價が十倍程度だと假定しても、實は月收は三百圓から百圓に顛落したのであり、實際の物價變動は中々十倍位ではないので、日常生活が甚しく窮屈になるのは當然である。之れは物價の比較的安定してゐた時代に、所得を入手する貨幣額でのみ考へてゐた誤謬の結果に他ならない。物價が十五倍になつたとして從來三百圓の所得者は其の生活内容を維持する爲めには四千五百圓の所得にならなければならぬのであることは見やすい所であるが、支拂側でも同様の錯誤に陥つてゐるから、僅かな増給で足りるやうな氣持にもなるのである。所得の貨幣額に於ける『名目』と財貨に於ける『實質』とのこのやうな開きは、經濟學の常識さへあれば到底見落し得る所ではない。從來斯學に於て賃銀についてだけは『名目賃銀』と『實質賃銀』とが區別され注意されて來たが、之れは統計上賃銀が重要項目となつてゐた爲めである。併し理論上全所得範疇に適用して考へなければならぬこと

は云ふまでもない。

以上は四の所得範疇について概観したものであるが、此種所得の取得者は素より社會に於ける所得者の全部ではない。現に戦前の職業統計を見れば、我國に於て公・自由職業に従事してゐるものは、男性に於て有職業者の一割弱を占めてゐる。併し之等の職業から生ずる所得が迂回する道の遠近はあつても、結局生産から引出されることは、所得の直接取得形式である貨幣所得を見たのでは明瞭でないが、その貨幣の結局替へられる財貨が生産から出て來ることを考へれば疑ひなき所である。唯それ等の決定については經濟學が問題としなかつたに過ぎない。

二、地 代

分配現象考察についての準備的説明としては以上で足りると考へるので、斯學取扱ひ上の慣例に倣つて地代以下各所得範疇について考察を進めてゆくことにしよう。地代は一言にしていへば土地の用益價格であること、以上に云つた通りであるが、現實に於ける土地には必ずや多少の資本と労働とが附加されてゐるものであるから、理論上純化して取扱ふ上には之等の附加要素を抽象して考へざるを得ない。此の考察條件の下に地代の説明をしたものでリカードの地代説は、地

代につき最初の理論を確立したものととして周知されてゐる。リカードに依れば地代の發生原因と決定原因とは同一であつて、土壤といはれる土地の成分は素より、其の位置等總ての耕作條件を含めて、土地には肥沃の度に相違があることと、既に述べた收穫遞減法則とが働くことによつて、同じ資本と労働を投じても收穫に差が出来る。此の耕作上の利益の差即ち差益と呼ぶ現象から地代は發生し、又其の差益の度から地代額が決定されると説くのである。爲めに此説を名付けて差益地代説と呼んでゐる。リカード地代説といつて有名なものの内容は概括すれば以上で盡きるものであるが、これでは餘り抽象的で解り悪いから、常に用ひられる例に依ることにしよう。先づ耕作が新開地に行はれるものとすると、肥沃の度、約言して沃度とか豊度とか云つてゐるが、之れの最も優れた土地（甲）から耕作される。一定の投下資本と労働とで一單位の面積から一〇の收穫が得られるとし、此の收穫率で其の土地全面積に亘る耕作から得られる收穫を以て、其の社會の需要を充たし得るうちは、此處には地代なるものの發生する理由はない。然るに此の社會の人口増加其他の原因によつて、穀物に對する需要が増加し、最早甲地からの收穫だけでは之れに應ずることが出来なくなると、沃度の劣つた第二位の土地（乙）が耕作されることとなる。此の地の沃度を八とする。さうすれば何人にとつても甲地の使用は乙地よりも望ましいので

あるから、使用者側の競争は甲地使用に對し差益二だけの地代を發生せしめるに相違ない。此の差益はかくて地代發生の原因であると共に、其の額を決定する原因でもあることになるのである。更に同様の理由から甲地と乙地の收穫を合せても社會の需要を充たすに不足するに至ると、一層沃度の劣つた土地（丙）へ耕作が擴張されることになり、曩に甲地に地代が發生したと同じく今や乙地にも丙地との差益だけ地代が生じ、甲地の地代は夫れだけ増額することとなる。それだから丙地の收穫量を六とすれば、乙地の地代は二、甲地のものは四に上ることとなるのである。但し以上の設例に於ては收穫遞減の法則は少しも考慮に入らなかつたが、今同一土地に更に等額の資本と勞働とを投ずるときは、收穫は第一次投資の場合に比し三割減となると假定すると、甲地の第二次投資の收穫は七、乙地のものは五・六、丙地のは四・二となる。仍て耕作擴張の順序は、甲地第一次耕作一〇、乙地第一次耕作八、甲地第二次耕作七、丙地第一次耕作六、乙地第二次耕作五・六、丙地第二次耕作四・二といふことにならう。勿論第三次の投資も考へられるけれども、唯例を複雑にするだけであるから、設例は之れで足りると思ふが、之等の差益は上述の場合と同様地代の額を順次決定するものである。そして最後に耕作される土地は耕境と呼ばれ、此處にあつては無地代であるといふのが、此の理論の特徴をなしてゐる。差益地代説と呼ば

れる理由は領かれるであらう。差益の現象が土地の沃度のみ限るものでないことは既に指摘した通りであるから、此度に反復する必要はないが、斯説については二の點が注意されなくてはならない。一は何人にも明かなやうに地代が差益ある土地にのみ限られるものでないといふ事實との對照であるが、他は上例に於て甲地も乙地も同一資本と勞働の投資をされるのであるから、乙地に對する甲地の差益は實に甲地の沃度の優越からのみ生ずるやうに見えることである。換言すれば其處には資本も勞働も生産に貢獻しない土地の優越所産のみが浮出してゐるやうに解釋されさうな點である。之れは解釋されさうである許りでなく、或る尊敬に値ひする一經濟學者の歸屬考察に用ひられてゐるのであるから、吾々としては詳細は避けるとしても概略觸れておかなければならない問題だと思ふ。以下此の二點について説いておかう。

第一に現實の現象として他人の土地の使用を得る場合、特別の厚意でもあるとか、又現在罹災都市に家屋の建築出来ない空地を畑地として無償で使用させてゐるやうな特殊な場合を除いては、必ず其の用益に對して地代が要求され、支拂はれ得る。差益の基礎として用ひられてゐるやうな無地代の土地は存在するものでない。之れについて吾々はどう説明をつけたらよいであらうか。土地が總じて所有者に依て獨占されてゐるからだといふ説明は古くから試みられてゐる。

けれども土地許りが獨占されてゐるのではない。總て所有されてゐる財貨は他から夫れを自由に使用出来るものではない。建物にしても電話にしても書籍にしても、あいてゐるからといつて他人のものならば、勝手に使用出来はしない。それなのに土地について許り斯くも古くから獨占といふのは何故であらうか。その理由は全く土地が所有者の勞苦の結果取得されたものでなく、自然の賜物を所有權の法的基础に基いて占有すると考へられるからである。或る思想家によれば土地は神が人類に共同に與へたものだといふことさへ判然と書いてゐる。洵に土地所有の起源的考察からすれば、多くの場合武力に基く政治上の權力が其の支持者となつてゐるから、經濟的見地からすれば之れを私有として他人の使用を排除する理由は求められないとも云ひ得よう。けれども土地所有の現實は其の起源から既に遠く隔り、其間に於て經濟的な獲得が現在の所有の原因をなしてゐる場合の方が多いと考へられる。此處に經濟的といふのは所有者が自ら勞苦を拂つて開墾したとか、價格を支拂つて他から購入したとかいふ取得原因が經濟の分野にある意味である。少くもその使用に適當な條件に於て保存して來たといふことは認められよう。して見れば此の生産要素についてだけ特に獨占といふのは當らないと云はなければならぬ。吾々はそれを生産財貨一般と異なる所なきものと考へる。從て差益以外に支拂はれる地代要求される地代は、土地の

用益が使用者の評価に於てそれだけの價值ありと認められるからだと考へる他途はない。此の場合の評価基礎について吾々は生産への貢獻歸屬のやうな計算があるとは考へない。小作關係に於て地代は素より貸借當事者間に問題となるものであつて、今日では古い時代にあつたやうに小作人は決して一定の土地に釘付けになつてゐるやうなことはないが、地代の變動は肥料其他の生産費用と共に生産物の豊凶と價格に對して考慮されるのが大方の場合である。其の騰貴が作物價格の値上り等により地主側から要求され、下落が反對の場合に小作人から要求されるのは、此のやうな収益考察に基くものである。併し小作人の地代負擔について次のやうな事情のあることは考慮に入れられなければならない。即ち一般勞働者の立場は後に勞銀を説く條に譲り、此處では農業借地者だけについていふのであるが、彼等は從來地代が高過ぎると考へる場合に於ても、仕事の種類と場所とを變更することの極めて困難な所から、之れを忍ぶといふ實情にあつた事である。賣買關係の基礎になつてゐる自由と平等とは、借地關係にあつては必ずしも實現されてゐたとは云ひ得ない。今日しきりに問題とされてゐる封建的關係は土地の貸手と借手の間に少からず殘留してゐたものと考へられ、之れが農地整理の一の理由をなしてゐるものと思ふ。之れを考慮に入れるとき我國に於ては、地代の決定は以上の經濟關係以外の關係によつても影響されて來た

ことを認めなければならない。

次に第二の問題として掲げておいたものは、差益地代に當たる部分の收穫が優れた土地の優れた沃度だけからの生産物であると考へることである。換言すれば之れには投下された資本と労働の貢献が入つてゐない。純粹に土地だけの生産物だとする考へ方である。成程前例によれば、甲地の生産量から乙地の生産量を引いた差益は、甲地の沃度に於ける優秀性だけに歸せられるやうにも思へる。乙地ならば同一投資に對して八しか生産されないのに甲地では一〇生産され、乙地の場合でも投資に變りがない許りでなく土地も同じく生産に加はつてゐるのであるから、乙地の土地の生産を差引けば投下資本と労働だけでは八〇以下の生産物しか得られないに相違ないからである。けれども之れは地主の立場から考へる數學ではないであらうか。甲地が如何に肥沃であつても、資本と労働とが投下されなければ何も生産される筈はない。投下資本や労働は差益部分にも土地と共に作用してゐるのである。甲地たると乙地たるとを問はず他の生産要素の協働を得てのみ土地は穀物を生産する。ただ他の生産要素が結合する土地の良否によつて、生産の結果が變化するだけである。此の關係は次のやうに説明することも出来るであらう。即ち同一資本と労働でも沃度が優れてゐれば土地から大な生産力を引出し得ると共に、沃度が勝つてゐれば資本と

労働から大なる生産力を引出すことが出来るといふ相關關係が、生産の結果を決定するものと考へるのである。さうすれば生産結果の相違は總ての生産要素の組合せに於ける相違から生ずるのであつて、其中一のみのお秀性から生産の増大を夫れに歸することの片手落ちが解る。それにも拘らず土地の差益部分が實際に於て土地のみの優秀性に歸せられ、それだけ地代が高いといふ事實は、収益を求める借地人の競争が然らしめるのであつて、決して理論上完全な歸屬判斷が然らしめるのではない。此の問題について自分が此處に喧しく言ふのは理論説明の問題としてであつて、事實を確かめることではないのである。歸屬は理論であるが、自分の見解を以てすれば分配の現實は後にも詳述するやうに理論的基礎に立つてゐるのではなく、寧ろ階級的な力の關係が多く之れを支配してゐると思ふ。理論を考へる立場からすが、地代については地主の立場に据えられるのではないかを疑はざるを得ない。吾々は讀者が各自の公正なりと思はれる立場から此の問題につき深く考へられることを望むものである。

三、利 子

利子も一通りは資本の用益に對する價格であると言はれるが、此の價格が如何にして決定され

るかの問題になれば、資本は前述したやうに財貨と価値の両面から見られるといふ見方に立戻るのが適當である。此他に曩に述べた節慾説のやうに、利子を以て資本構成のための節慾に對する報酬だといふやうな考へもあるが、之れについては此處では觸れずにおく。先づ財貨としての資本即ち資本財と呼ばれるものが、生産に貢獻する關係から見ると、之れは全く技術上の現象である。例へば伐木について未開人の間に行はれるやうな石斧を用ひるよりも、製鐵から鋸製作を通じて其の鋸を用ひる方が勢力はどれ程節約されるか知れない。道具から機械に進歩するに従て、此の資本財の生産貢獻は愈々顯著となる。その代りに最終生産に到達する迄の道は益々遠くなるもので、『生産迂回』と稱せられるのは、此の最終生産に到達するまでに器具機械の生産、その又材料の生産といふやうに、多數の準備過程を経ることである。合目的でありさへすれば、生産迂回は常に生産の結果を増大するに役立つといふことが言はれる。此の事實は生産に於て資本財が利子支拂といふ犠牲を伴ひながらも使用される理由であり、従て廣く利子發生の理由を與へるものである。けれども資本財の生産への此の貢獻は、土地の場合と等しく利子の高さを決定する歸屬根據とはなることが出來ないと思ふ。早い話が右に擧げた鋸の例に於て其の用益價值は鋸が磨減するまでのものであるから、大約鋸の價格に等しい譯であるが、其の價格が一挺百圓するとき

之れは生産貢獻を示すものとなり得ようか。石斧を以て伐木するのに較べたら其の生産貢獻は中百圓どころのものではあるまい。生産要素の評價一般について歸屬的思想を懐きながら、利子については他の基礎から説明を試みようとするもののあるのも偶然ではない。

利子決定につき『時差説』と呼ばれるものは有名な學説であるから、之れについて其の要旨を述べておかう。斯説は利子の原因を資本財の生産貢獻に求めず、時間に於ける財貨價值の評價の相違から解釋しようとするものであるから、今や利子につき資本は其の價值側から眺められることとなる。即ち財貨が現在に於てと將來に於てとは評價を異にし、一般に同一財貨でも現在使用し得る状態にあるものは、將來に於けるものよりも價值が高いといふ時間内に於ける評價心理から出發する。之れは特殊な例外的場合を除けば當つてゐると云へよう。吾々の社會にも古くから『明日の百より今五十』といふ俗諺がある。明日百貫ふよりも今五十貫ふ方が望ましいといふのである。之れは極めて利那主義的なものであるが、さほど著しくなくとも例へば一年後に入手する百十圓の價值は今日の百圓にしか當たらなないと判斷すると假定しよう。此の判斷によれば、一年間百圓の價值を貸す者は、一年後に百十圓を返済するといふ條件でなければ貸す筈がなく、借手も亦同様の判斷をするとすれば、一年間といふ時間が一割といふ相違を價值に生ぜしめるこ

となる。此の時間に於ける價值の相違が利子を形成するといふのである。斯説は利子を生産の分野から價值の領域に全く移し、且つ時間の中にその發生並に決定原因を捉へたものであつて、特徴あるものと言はなければならぬ。之れを消費貸借に當嵌めてみるときは、他に類例のないほどよく解明してゐることを見出すであらう。或る人が原因は何であらうとも、兎に角利子を負擔しても現在貨幣を要する場合、借入れたものは將來利子を附して返済するのであるから、返済時に於ける元本に利子を加へた額に對する評價が、少くも現在借入れる額に等しいものでなければならぬ。そして現在借入額は元本として返済金の内に含まれるのだから、利子は少くも兩者に對する現在評價の相違でなければならぬ。斯う分析的に考へて來ると、斯説の特徴は存外深みのないものに見えて來さうであるが、消費貸借の利子決定には好適な説明である。併し此處に顧みられなければならぬことは、經濟學の上で利子を問題とするのは、生産要素としての資本の所産としてであり、利子を支拂ふ者は消費者としての借手ではなく、企業者を代表者とする生産者であるといふことである。借手が企業者である以上、彼れが敢て負擔する利子は生産から出て來るものでなければならぬ。生産から出て來る利子と資本取引から生ずる利子とは如何なる交渉をもつものであらうか。

斯う考へて來ると吾々は利子決定の原因を勿論時差説以外に求めなければならぬ。そして現實に企業者が利子を支拂ふ相手方に眼を轉するとき、吾々は比較的容易に其の決定原因が何であるかを、窺知することが出來ると考へるのである。即ち企業者が利子を支拂ひ資本を借入れて來る主要な相手方は金融機關であり、今少し廣く云へば金融市場である。利子の決定されるのは此處であつて、此處に集まる投資額即ち資金供給と此處から資金を吸收する需要とが其の高さを決定する主要原因なのである。このことについては吾々は既に景氣と物價との關係を取扱つた條で説明しておいた。不況期に於ては投資即ち供給が多いのに反し需要は少いので利子は低く、回復期に於て後者は漸増し爲めに利子の上騰始まり、好況期末に至つては後者は前者を超越して利子は禁止的な高さに昇ると説いたもの之れである。それだから生産資本の基本的な決定原因は近世の經濟構造にあつては、一に金融市場の需給状態に求められなければならず、此處に於ては不況期にあつては借手の立場は強く、好況期を越えんとして貸手の立場が強力になつて來るといふ事情はあつても、恰も財貨の取引に於けるやうに取引當事者は平等の立場に立つてゐることが看取されるであらう。そして資本の借手である企業家が借入資本の利子とその生産獻貢から導いて來る仕方は、借入資本の増減從て事業への其の投資の大小が、生産の結果に於て利子費用を補

つて餘りあるか否かを勘考するにある。此處に生産に於ける資本財と資本との結付きが與へられると考へる。即ち金融市場で決定される利子は價值としての資本の生む所であり、此の資本が資本財となつて生産に携はるにつき負擔する價值が生産から生れる利子に他ならないのである。

資本の生産に於ける貢獻に關する諸學說中マルクスの説は、爾餘の思想と全く別個の見解をとり、マルクス學說の俄かに注目されて來た今日、吾々は是非とも一應それを顧みておかなければならないのであるが、有名な『剩餘價值説』が直接それに關聯し、剩餘價值は利子よりも寧ろ利潤に結付いてゐるものであるから、利潤の説明の際に譲る方が適當だと思ふ。

四、賃 銀

賃銀は労働者が企業に對して賣る労働の價格である。それだから最近時に至つて徐々に起つて來た其の意味内容の變化を考慮に入れなければ、此の價格に對して賣られる労働は他の財貨又は財貨利益と少しも異なる所なきものとして扱はれて來たのである。此の労働賣買の制度を賃銀制度又は賃銀労働制度と呼んでゐる。既に企業について述べたやうに、それは労働について古くからあつた制度ではなく、産業革命以後に確立したものであつて所謂自由労働者の誕生に發するも

のである。自由労働者には屢々言はれるやうに二の意味がつけられる。一は住所・職業等について束縛から解放され、他への隸屬から脱したものの意味であるが、他は生産手段からの自由といふのである。生産手段からの自由は英國の歴史にあつては、主として地方農民が耕すべき土地を地主である地方貴族のために併合され耕作手段を喪失したのと、職人階級が生産手段に於ける革命と夫れに伴ふ生産方法の變革の爲め、舊來の職を失つたことから生じたものであり、國を異にするにつれて必ずしも一樣の經過を辿つたものではないが、何れにしても近世産業の大規模な施設は之れを持ち得ない階級を作り出さずにはおかない。即ち生産手段からの自由を強いられる階級は、資本主義と共に起り、又此の生産制を成立することを得せしめたのである。このやうにして形成された労働階級は勿論貧乏人の階級である。必要額の資本が缺乏してゐればこそ、此の階級の所屬者となるのであるから、それは當然のことであるが、之れに屬する者の労働は又決して高くは評價されなかつた。事實階級的に低い生活を續けて行くだけの評價しかされては來なかつたのである。賃銀労働制度と労働に對する評價の實際並に階級として營む生活程度についての之等の常識的事實を想起しておいて、吾々は次に賃銀學說として著名な賃銀鐵則と賃銀基金說と稱するものの紹介と批評に移らうと思ふ。此の兩説は現在から見れば古典的なものに相違ないが、

夫等には現在の思想の根底になつてゐるものも含まれてゐると思ふので、全く不問に附することは出来ない。

『賃銀鐵則』と呼ばれるものの思想内容は、財貨價格と同じやうに賃銀にも自然率があり、之れは労働者階級間に廣く認められる生活水準を維持するやうな生計費に依て決定されると謂ふのであつて、其の論證としては前に述べたマルサスの人口論を援用するものである。この生計費は又労働者數を増減なしに維持するだけの家族員の生活を可能ならしめるものである。そしてこのやうな認識を鐵則即ち切斷し難い法則といつたのは、賃銀労働制度が行はれる限り此の法則は是が非でも作用し、それから脱することが出来ないといつたのは、階級によつては同一階級に屬する者の間に於ても、生計の程度は随分區々たるものがある。例へば企業者にしろ地主にしろ、曩にも云つたやうに同一階級に屬してはゐても、所得の點になると甚しい相違のあることは日常見聞する通りである。勿論夫等の階級中大所得者はその全部を生計にあてることがはないであらうけれども、其間に一の水準を立てることは困難である。ところが労働者階級になると、右にも云つたやうに之れは貧乏人の階級であるから、之れに屬する者の間に甲乙があつたところで大した開きのある筈はなく、彼等の生活こそ字義通り水準化されてゐる。否、水準化を強いられて

ゐるといふ方が當つてゐる。併し現實の労働に對する需要と供給との關係は時によつて相違があり、市場價格としての賃銀は之れによつて影響を蒙らざるを得ない。現實の賃銀はかくて上下する。けれども此說によれば、この變動も結局右の水準生活費の額に落着かざるを得ない。其の理由として説く所によると、賃銀がこの水準額を超過するときは、此の階級として生計は定つてゐるのだから、それ以上の剩餘所得は階級内の結婚を促進し、結婚の増加は子孫の増加に導くから、次代に於て労働の供給過剩を惹起し、賃銀は再び下落せざるを得なくなる。又反對に現實賃銀が水準生活費以下に下落すれば、此の階級の生活は當然困難となり結婚は阻止され、階級人口を維持するに足るだけの子孫を得られなくなり、次代には階級人口は需要に對して不足し、賃銀は再び上騰すべきである。それだから自然の傾向として賃銀は以上の水準生活費と合致せざるを得ないと考へるのである。之れは正に財貨に關する自然價格の思想と人口論とを結付けたものである。斯說に對しては當然豫想し得るやうに種々の立場から批評が行はれて來た。殊に此の理論通りだとすれば、労働階級の生活水準は賃銀制度が始まつて以來向上することは不可能とならなければならぬ。之れを事實に照して見ると此の學說の基礎をなしたに違ひない英國の實際に於ては、前世紀中に此の水準は著しく上昇してゐると謂はれる。斯く現實の傾向に反するといふこ

とは、此説にとつては致命的な攻撃でなければならぬ。吾々としても後に述べる理由もあり、此説をその原型のまま受容れることは出来ない。けれどもそのうちに含まれてゐる眞理も決してなくはない許りでなく、随分鋭い觀察があるのであるから、夫等の點には留意しなければならぬと思ふ。就中労働階級に屬する者が生活費の低いために結婚を延期してゐるといふことや、相當久しきに亘つて彼等の生活水準が向上の機會を與へられることなしに過ぎた事實は、賃銀といふ階級現象を考へる上に看過し難いものである。現に史實の教へる所によれば、前世紀の半頃までは農業國だと謂はれる獨逸に於て、穀作の豊凶は地方に於ける結婚數の上に顯著な影響を與へたといふことである。貧乏ゆえに結婚すら思ふに任せないといふ生活状態が、此の産業革命の最初に訪れた國に、しかも恐らく半世紀に亘つて支配的なものであつたといふことは、注意されなければならぬ。英國の労働階級に於ける生活の向上は、組合運動のお蔭で徐々に實現されたのであつたが、夫れは此の學説の構成された以後の時代になつてのことである。吾々としては此説の難點を探すよりも、以上の内容が假令其後程度は變化して來たとしても、今日労働問題を考へる上に尙役立つものあることを想起したいと思ふ。

次は『賃銀基金説』であるが、之れは學説としての深みからすると前説よりも遙かに劣るもの

である。その論旨は前世紀初葉から英國に擡頭して來た労働組合の賃銀値上げ運動に對し、賃銀は確固たる法則に従て決定されるものであるから、斯種運動の無効なことを示しようとしたものである。其の法則といふものの要點は次のやうに要約することが出来る。即ち一時代一社會に於ける生産資本は一定額であり、そのうち幾許が賃銀にあて得るかは、生産技術上の關係によつて割合の定まつたものである。此の部分は賃銀支拂にあてられるので賃銀基金といはれ、之れがその時代とその社會に於ける全労働者に賃銀として分與されるのであるから、賃銀の高さは此の分配にあづかる労働者の數に依て定まる。労働者數が少ければ賃銀は上り、反對ならば如何に努力するも下落せざるを得ないといふのである。故に此説の特徴といひ得るのは、一に生産資本が一時代一社會に於て一定なりといふ認識にあり、其後の推論は全然需給説そのままである。從て之れに對する批評は生産資本が斯く固定してゐるのでないと主張することになり、當時既に此線に沿つた駁論が現はれてゐる。併し吾々としては生産資本が金融市場と結付いて如何に伸縮性に富むものであるか、既に見終つたのであるから、此處には單に之等の點を指摘しておきさへすれば足りると思ふ。

以上の兩學説から學ぶ所は、(一)賃銀が階級所得として常に低いといふこと、(二)労働者自身

の生活自覺をまたなければ、之れは改善するに途がないといふことである。それと共に少し詳しく考へれば、(三) 勞銀と勞働の生産貢獻との間について、之等の説には歸屬的な結付きが含まれてゐない點が注意されなければならぬ。以下勞銀決定の問題を考へてゆくに當り、此の三點を捉へて推論してゆきたいと思ふ。先づ第一に勞銀は低く勞働者は階級として貧乏だといふことの理由は何處にあるか。生産手段を自由に支配し得なかつた者は古來貧乏ならざるを得なかつた。之れは中世の隸農に於ても變りはない。彼等は生産手段である土地を使用する地位にはおかれてゐた。けれどもその使用には重税といふ生産物を必然的に乏しからしめる制度が結付いてゐた。近代我國農民中小農の生活の貧困化を根本的に決定したと思はれる幕府時代の農政に對し、原則を與へた『本佐録』の『百姓は財の餘らぬ様に、不足なき様に治る事道なり』といふ有名な言葉は、此間の消息を物語つてゐると見るべきである。『不足なきやうに』といふは甘く聞こえるけれども『財の餘らぬやうに』されるととき、不足は必ず附隨する。殊に私利を營むに急な地方吏の管轄下にあるやうな場合、この政治原則が小農を如何に窮地に追込んだかは、想像に餘りある所である。小農は決して勞働者ではない。そのうち小作地を耕す者でも、生産主體の地位に居るものである。而も地代の考察の箇處で觸れておいたやうに、地主は小作人が支拂ひ得る限度を地代

として徴收しようとし、地代決定の深い基礎は斯うした小農に對する見方の歴史的傳統のうちにあつたと思ふ。近世勞働者階級はこのやうな生活内容を身につけながら、何等かの原因で土地を離れた小農が少からず其の構成員をなしてゐる。この階級は斯うした人々を包含し且つ常に生産の大施設を入手するには縁のない状態におかれてゐた。之れに屬する人々が生活のために賣るものとしては、自分達の勞苦即ち勞働以外にはないのである。然るに此の勞働といふ商品が又、商品としては頗る割の悪いもので、其日々の勞働は其日々に賣らなければ消えて終ふといふ品物である。今日の勞働を明日賣ることは出来ない。而も日々の生活が日々の勞働を頼りとしてゐるとなれば、勞働を賣り得なければ其日は生活の道がなくならざるを得ない。このやうに餘裕のない者が行ふ賣買に、有利な取引の行はれる筈はない。貧乏なるが故に勞働を賣り、勞働を賣つてゐるが故に貧乏が其處から又生れて來るのである。それは貧乏の果てしない連鎖をなしてゐる。このやうなのが此の階級の貧乏の内容である。

次は勞働者自身が生活上の自覺を缺いてゐるから、賃銀が上騰し得ぬといふ判断である。之れは勞働人口の増加が賃銀下落を惹起するのであるから、此の階級がそれを自覺し階級人口を制限することによつて、賃銀の上昇を計れと教へるのである。確かに人口増加率は此の階級に於て最

も大だと謂はれ、幼児の死亡率と共に出生率も大であることは、統計上も指摘される所である。故に賃銀低下の原因が労働人口の増加と必然的に結付く労働の過剰供給に基くといふことに誤ちがなければ、此の教へは承服されなければならない。併し基金説の構造は以上に述べたやうに受容れ難いものであり、鐵則にあつても需給の市場關係だけが此の教へを支持するのであり、其の根據は更に労働取引に於ても無制限な自由競争が行はれることを前提としてゐる。然るに完全な自由競争といふことは、資本主義興隆期に一時それに近い市場構成があつたものの、其後の實際には適合せず、唯理論構造上推理を簡單ならしめる假設に他ならない。現に財貨の供給にあつてさへ企業の集中は供給独占若しくは夫れに近い市場を形成してゐること既に述べたやうなものであるし、自由競争の行はれる範圍に於ても夫れは不完全競争といはれる方が適當な場合が多い。取引上個々として企業者に對立するときは、全く弱者たらざるを得ない労働者が、資本主義擁護の法令下を別とし、少しでも可能な餘地があれば集團行動に出ることは、階級的自覺に基くと共に彼等自身の苦い經驗の教へた所である。世界で最初に資本主義的生産の繁榮した國英吉利に、又世界で最初の労働組合運動が起り發展したのは眞に偶然ではない。組合は個々として最弱者である労働者を集團化することに依て、労働市場に於ける階級的供給の地位を改善せんと努

力して來た。組合の認める賃銀に於て労働供給をする團體契約の方法に之れである。企業家がその要求する賃銀に應じない場合には、組合は労働の供給を拒絶することに依て對應することが出来る。併し組合がこのやうな實力を備へるに至るまでには、十分な發達を遂げなければならぬ。労働供給を拒絶し得るためには、失業期間組合員の生活を支へ得るだけの經濟力が養はれてゐなければならず、其の經濟力の蓄積は乏しい所得者たる組合員の廣汎且つ繼續的努力による他資源をもたないからである。組合の力が此處まで發達することは容易な業ではない。勿論労働組合の任務は此の集團取引による賃銀の引上げ許りではなく、労働時間にしても保健設備にしても、労働階級の全生活分野に亘る向上をめざして其の政策を樹立する。してみると假令組合運動の未發達な社會に於ても、苟も組合が組織され此の方面に進みつつある限り、労働市場は完全な自由競争の演舞場ではない。組合の政策は人工を以て労働階級の人口問題を或る程度までは操作することが出来るからである。さうなつて來ると労働人口の過剰が賃銀上昇を不可能ならしめるといふ命題は、組合運動の有力化に伴ひ最早受取り難いものとならざるを得ない。發達した組合は團體契約に於て供給條件に作用し得、個々としての労働者の盲目的破壊的競争は、此の制度の下には最早行はれる必要がないからである。前世紀初葉に労働者に向けられた教訓は今やそのま

までは必要を失つたのである。併し斯う考へ又行動することに對しては、歸屬思想からの疑問は當然起つて來なければならぬ。労働組合のかうした要求は事實労働の作出した價值以上を賃銀として要求するものではないか。若しさうだつたら、それは結局生産を減ぼすことになり、企業家に向けた刃を自分自身にあてることとならうと。

以上の疑問を以て吾々は第三の論點に移る。賃銀鐵則の創設者は地代論に於て擧げたリカードである。リカードの見方は、地代を沃度の差益として片付けた後の生産物の分配については、歸屬の問題を全然起さなかつた。即ちその殘餘については、賃銀が多くの分前を得るならば利潤として残る所は少く、反對ならば、利潤は多くなるどいふ。皮相な見解を以てするならば之れは殆ど自明の理のやうに見える。併し吾々にとつては夫れは自明どころではなく、分配現象について頗る鋭い見地を擲んでゐたのだと思はれる。此の見方からすれば、賃銀の決定は労働市場に於ける自由競争さへ指定しなかつたら、労働階級と企業者間の分配に於ける力の問題だと考へることになるからである。吾々は歸屬思想については常に深い疑ひを懷いて來た。分配に於ては勿論、價值の問題についてすら其の適用される範圍は、企業者の立場といふやうな一定の見地をとらなければ不可能なのではないかと考へる。而も價值について歸屬方法を採用するものは、分配の領

域にまで夫れを延長する傾向をもつ。吾々から見れば之れは承認することは出來ない。分配の現象は、從來強力な地位を占めて來たからといつて、企業者の立場からの合理性を追求して解決し得られる問題ではない。此の問題を取扱ふ立場は、廣く社會一般を包含する觀點でなければならぬ。そして此のやうな觀點の轉換を行ふとき、分配の問題は生産の結果によつて社會全般が生活を支持する問題となつて現はれる。吾々は本節の第一行に於て、賃銀は從來商品視された労働の價格の問題であつたが、最近に至て意味内容が變化して來たといつておいた。資本主義生産制の下に於ては、企業者の私的生産會計の眼を以て賃銀が價格形態をとるがままに、労働を商品と眺めた。之れは企業家お雇ひの會計士の眼から見た所である。各時代に於て力への憧憬は夫れ々々の權力者の物の見方につき模倣者を作り出す。封建時代に貴族の物の見方が、資本主義の時代になつては資本家と企業者の見方が廣く行はれるのは、此の模倣心理によるものだと言つても大過ない。

分配問題の取扱ひ態度を決定する此の重大な分岐點に立て、吾々は又しても初めに縷述した一般生活や經濟生活の社會的構造を振返つて見たい。吾々が個人で營んでゐると思ふ一般生活も、經濟の領域で營む生活も、總ては自己の生活經營であると共に他の生活經營への寄與であり、又

他からの寄與にあづかるものと云つた。之れは別の言葉を用ひれば、生活の社會的連帶責任體系である。生活の組立てが社會的連帶責任の構造になつてゐるといふのである。之れを狭く經濟活動の領域だけに限つて見ても、生産の全要素が協働せずしては其の結果は得られない。而も各生産要素の生産に於ける貢獻が、全要素の提供者の立場即ち社會全般の立場から見て分析し得られる爲めには、生産物の量のうちに其の割合が發見されなければならない。何人が生産物たる絹糸について、綿布について、勞働の所産を他の生産要素の所産から遊離し抽出し得よう。それが可能だと考へたのは企業家の價値計算の上でしかない。企業者に利益を計る爲めにとられる計算以外には、此の檢出は不可能である。生産が社會化されてゐると言はれたのは、此の事實を指したものに他ならない。人間活動の、人間生活の、社會的構造への反省は此の事實を教へる。そして勞銀なる階級所得を顧みるとき、それは歴史上傳統的に蔑視され抑壓されて來た階級が、最も割の悪い商品勞働を賣る價格であつたことは、上に縷述した通りである。勞銀の決定が互に平等な立場にたつ賣手と買手の間の財貨取引に於ける價値決定と異なる線の上にあつたことは、斯くて否み得ない所であらう。勞銀は生産に参加する勞働者階級の歴史的社會的地位と之れに伴ふ力の關係に依て決定されて來たのである。それだから組合の集團活動の結果上昇した。これは社會

生活の歴史的展開の中に於て徐々に自らを高めて來た階級の力の表現であつて、洵に勞働階級は勞銀の上昇を得つつ自ら文化的地位をも高め來つたのである。弱者の力は集結しなければ強力にはなれない。併し弱者自らを高めることに努力せず劣等者であるならば、その集結は唯一時的暴動を起すに止まることとならう。社會的力の獲得の爲めの集團は階級構成員の人格向上に基く生産力の増大をまつて、初めて恒久的な力となる。分配の増加を求めるには社會的生産の總量も出來得る限り増大しなければならぬ。之れは又生活の社會的構造を顧みるとき餘りにも明かかとである。

五、利 潤 (マルクス剩餘價値説の解説)

利潤が企業者の生産から得る所得であることは既に屢々云つた所である。利潤以外の三の所得については、問題は常にその決定原因を説明することであつた。そして夫等の所得は總て生産の結果が得られるに先立ち、各利益に對する價格形態をとる所から、夫等價格の決定原因を問ふことが問題となつて來たのである。然るに利潤は生産主體の營む生産が直接生む所であるから、その額の決定は生産の結果である生産物價格が、生産費用を超過する部分に依て決定されるといふ

頗る單純な解答で一應答へられるものと見られて來た。爲めに從來經濟學上で利潤に關する問題としては其の發生原因が問はれてゐるのである。今その原因と見られて來たものを擧げてみると、企業者の仕事に對する報酬と企業が冒す危険に對する補償との二は其の主なものといへよう。此處に企業者の仕事と概括したものの中には、その經營や管理の才能と經驗、事實其の任を遂行するための勤勞、從來仕事の上で獲得して來た外部に對する生産經營上の地位等が含まれる。企業經營と管理の才能は、常に總ての人に具つてゐないといふ許りでなく、生産の結果を擧げる上に貢獻するに違ひない。之れに於ける經驗に至つては、更に長期間に於ける累積であるから、單なる才能を超えて尊重されるべきものである。又事業の經營や管理を行ふに當つては、企業者は時として懸命の努力もしなければならぬし、それほどの緊張を要しない場合に於ても、多くは相當の心勞と勞務に携つてゐると見て大過ないであらう。大會社の重役について屢々想像されるやうに、朝は遅く自家用車を事務所へ乗りつけ、事務室にあつては快適な安樂椅子に座して紫烟を吐き、新聞に目を通し、それからおもむろに短時間の事務を執り、その後は俱樂部で日を送るといつた型のものも絶無ではあるまい。けれども反對に時間通勤の社員が仕事を終つても、事業の中樞に居る企業者は尙山積する仕事の處理に追はれるといふやうなものもある。又才

能の點は姑くおき資本の融通を始め原料仕入から販路の交渉に當たるといふやうな外部關係に於て、信用ある特定人なればこそ圓滑に事を運ぶことが出来るといふやうな外部關係に於ける重要な貢獻も、企業者については十分考へられる。利潤所得の原因として從て其の是認基礎として斯うした企業者の立場と効勞は、從來殆ど常に考へられ又想像されて來た。夫等は總て一言にして云へば企業者の生産への貢獻である。併し吾々は前節勞銀の取扱ひに於て既に見方を闡明したやうに、企業者の之等の貢獻認識から出發して、生産物の中にそれに對應した部分を篩分けることは出来ないと考へる。確かに企業者は生産に少なからぬ貢獻をしてゐる。さればこそ何人がそれに當たるかの具體的人格に變化はあつても、企業者なるものは久しきに亘つて生産經營の首腦をなして來たのである。その有用な事實に對して吾々は疑を挿む者ではない。それにも拘らず利潤所得を之れに依て決定しようとすることは不可能と考へる。これは吾々が所得決定に於て歸屬考察を排するからであつて、此の考察をとる限り、論者は以上の數量的に把握し難い企業者の生産貢獻を、利潤なる貨幣額で表はすといふ不可能な試みを敢行しなければならぬこととなるのである。

次に利潤は企業の蒙ることあるべき危険に對する報償要素を含むといふことが指摘される。企

業は確かに常に豫想通りの成績を擧げ得るものではなく、積極的な損失すら招くことがあり、而もその擧げる利益から斯かる場合への保険料を控除するといふことはない。利益は生産費用を差引いたものである限り利潤と見られる。故に利潤の中に時として僥倖的な要素が含まれることは否定すべきではない。此の部分は利潤を構成してゐても頗る不安定なもので、何時失はれるか豫想がつかない。景氣變動に際して破格に利潤の増加を來たすやうな場合もあり、競争者の失脚によつて一時同様の現象を生ずることもあらう。けれども此の事實だけを以て利潤發生の全部の原因とすることも出来ないし、之れから利潤の高さを説明することも出来ない。

利潤の發生並に決定原因の解釋として、以上經濟學者が屢々論據として來た諸原因とは全くかけ離れた見地と方法の展開をしたものに、マルクスの剩餘價值説がある。現時思想界の要求からしても、それが如何なる構想をもつものであるかは知つておく必要があると考へられるので、概略ではあるが次にそれを紹介し、併せて自分の立場との相違も明かにしておきたいと思ふ。マルクス自身の説明順序から離れ、吾々は先づ利潤の本體をなす剩餘價值の説明から着手することにする。マルクスの見る經濟の世界、彼れが獨特の構造をもつ價值法則に照して分析し特質を剔抉しようとした世界は、周知の如く資本主義的生産の支配するものである。従て其の中軸をなす資

本が生産に於て演ずる役割から見なければならぬ。資本が生産に於て現はれる姿は、既に述べたやうに、一面に於ては財貨態であり他面にあつては價值態である。今紡績業に例をかりてみると、棉花・紡績機械・補助材料・紡績工の労働のやうな形をとるものは無論前者で、後者は總て貨幣額で、表はされる。従て生産物も前の側面では紡績糸の數量であり、後の面ではその價值となる。剩餘價值の問題は無論價值關係であるから、其の考察は差當り後の側面だけを考へればよい。即ち此の面について見ると原料・機械・補助材料等の物的資本の價值は、増減なくそのまま生産物價值の中に移轉されるが、労働購入の資本部分である労働の形をとつたものの生産物への價值移轉は、他の資本部分とは全く異なつて行はれると解される。之れを知るためには労働と之れを以て買はれる労働についての先行的解釋が必要となる。マルクスの説く所によれば労働者が労働に對して賣る所のものは、普通無差別に言はれてゐるやうな労働ではなく、未だ労働にはならぬ能力即ち労働力である。労働といふのは、此の労働力が生産中に生産物の中へ解體して行く所謂對象化であつて、労働になると労働力はそれだけ労働者の體内から減じて生産物の中に入るのである。此のやうな労働力の價值は其の保有者である労働者の生活資料若しくは其の價值の他にない。其の理由とする所は労働は例へば一日の生活に依て一日の労働力を取戻し得るから

であつて、此の取引に於てはマルクス價值説全般に行きわたつてゐる等價值交換が實現される。今日自分が一日の勞働力を賣つて勞銀若干を受取る場合、その勞銀は勞働の後から受取るならば明日一日の勞働力を維持するのに當て得るであらうし、又勞働に先立つて支拂はれるなら恰度其日の勞働力を支へるといふやうに、一日の生活が支へられれば一日の勞働力は維持されるからである。ところがこのやうな等價で賣られた勞働力は、生産過程に入つて勞働に轉化すると其の價值以上となり、此の價值全部を生産物の中に移轉することになる。今、勞働力の價值を十圓とすれば、その勞働力が勞働となると二十圓の價值を實現するといふやうな關係である。説明を簡單にする爲めであらう。マルクスは例として常に勞働力の價值が勞働となる時二倍の價值を作ると假定してゐる。それであるから勞働者は勞働力の等價值として十圓を受取る以上、それは一日間の勞働力を賣つたのであるから、終日働いて勞働力を勞働として生産物の中へ注ぎ込まなくてはならず、之れを買つた資本家（企業者）も一日の勞働力を十圓で買つたのは、何も夫れ以上の價值ある勞働力を安く買つたのではなく、等價值交換を行つたのであるから、勞働者を終日働かせるのに不思議も不正もない理である。而も勞働力は終日ではなく半日間勞働に轉化すると十圓の價值を作出して終ひ、残り半日間に作出す十圓の價值は受取ることが出来ないで工場に残して來

なければならぬ。此の支拂を受けない勞働を不拂勞働と呼んでゐるが、之れが作る價值こそ資本家の生産に於て利得をなすものであつて、此の利得は『剩餘價值』と名付けられ著名なものである。勞働力の價值はこのやうに勞働者の生活資料であるから、之れを簡單に彼れの食ふ所のものと考へれば、剩餘價值は勞働者が食ふよりも多くの價值を生産するからのみ成立するのである。斯く自分が食ふよりも多くを生産するといふ現象は、假令一見不思議に感じられるとしても、他にも類例はある。そのうち最も適當してゐると思はれるのは蠶と繭であらう。蠶は自分の食ふ桑葉の價值よりも大なる價值を繭となつて作り出すこと云ふ迄もない。勞働者は賃銀勞働制の下に於ては、此點に於て蠶と全く同じ役割を演じてゐる。そこで資本家の生産に投ずる資本中價值増殖をするのは勞働力の買入れに宛てられる部分だけであつて、他の資本部分は自己の價值をそのまま生産物價值の上に移轉するだけであるから、マルクスは前者を『可變資本』、後者を『不變資本』と命名した。此の名稱を使つて生産が剩餘價值を作出する過程を方程式の形で表はせば、
$$\text{不變資本}(90) + \text{可變資本}(10) + \text{剩餘價值}(10) = \text{生産物價值}(110)$$
といふやうになる。無論此の式に於て不變資本を90とし、可變資本を10の割合としたのは單なる假設に過ぎないが、上例のやうに勞働力の價值が十圓で剩餘價值がその一〇〇%であるならば、可變資本と剩餘價值とが

本(90)+剰餘價值(90)＝生産物價值(180)に於て剰餘價值率は又一〇〇%であるに拘らず、利潤率は九〇%の高きになることとなる。ここに於てか剰餘價值に對しては次のやうな疑問が出て来る。(一)資本構成に於て斯く可變資本部分が増大すれば、剰餘價值額も利潤も増加されるのに、何故に生産の傾向は不變資本を増大させるか。(二)投資は常に有利な事業に走り、その結果利潤率は均等化する傾向があるのに、此のやうな不均衡は如何にして可能であるか。(三)現實の生産物價格は剰餘價值と利潤との如上の相違からマルクスの謂ふ價值と明瞭に異なるものとなるが、此の相違からマルクスの價值説は現實現象の前に破産することとなりはしないか。といふもの之れである。之等三の疑問に答へれば其の解答は又前に掲げた幾つかの問題全部に答へることとなる。之等總ての疑問は皆互に關聯してゐるからである。尤も最後の問題は以上の説明では未だ十分問題の所在が明かにされてゐない。吾々は剰餘價值の説明から始めてマルクスの價值法則なるものに觸れて來なかつたからである。仍て之れを後廻しとして、初の一と二から見やう。

不變資本は價值關係にあつては、元來勞働を搾取するための生産技術的條件に過ぎないが、不變資本の増大が有利だといふのは、利潤を見るだけで剰餘價值には考へ及ばない資本家の見地か

らする判斷である。それは直接剰餘價值には關係し得ない現象である。利潤は資本家の計算に於ては總資本から生ずるものであるから、不變資本を大ならしめることが生産の技術的條件として社會的に必要であれば、資本家として之れを増加することに何の矛盾も含まれてゐない。但し此の場合利潤と剰餘價值が直接一致するものでないことは、右にも云つたやうに當然である。資本家は利潤のみを眺めて剰餘價值には關係してゐない。不變資本の増大が有利とされることの矛盾は、利潤を直ちに剰餘價值そのものと考へることから生ずるのである。仍て此の第一の疑問はマルクスの云ふやうに、資本家の背後で即ち彼れには見えない所で、利潤が剰餘價值から生ずる説明さへ與へられれば、自ら解決されることになる。利潤を追つて不變資本を増大するのは資本家の世界のことであり、利潤が剰餘價值から出て來るのはマルクス哲學の世界なのである。そこで吾々は第二の問題に移る。之れは同時に一部第一の疑問にも答へることになるし、又マルクス價值説についての最も困難な問題と考へられて來たものである。

第二の問題は剰餘價值と利潤との關係、利潤は總資本に對して均等化してゐるのに、剰餘價值は可變資本のみに對して其の率の均等が考へ得る兩者の不一致點、即ち短言すれば平均利潤率の問題と言はれるものである。少しくどいやうであるが、均等な剰餘價值率が資本構成の相違によ

つて異なる利潤率を生む關係をマルクスに據て示せば次のやうなものが出る。總資本は何れも一〇〇、剰餘價值率は一〇〇%であるが、利潤率は四〇%から五〇%に至る相違を生ずる。而も現實の事實としては利潤率も均等化の傾向を示してゐる。之れが若し同一企業に屬する五の異なる經營、例へば五工場といふやうな場合ならば、各工場へ投資してある資本並に各工場から上る剰餘價值は集計され、後者の前者に對する比率によつて、平均された利潤率が算出されることが出来る。然るに問題となつてゐる場合は、之等の資本構成が各異なる企業に於けるものなのである。剰餘價值と利潤、各の率の不一致は斯くて極めて明瞭である。併し此の一見解き難いやうに見える關係に對するマルクスの解答は案外に簡單である。即ち各企業が擧げる異なつた剰餘價值を利潤として均等化するものは、資本家の利潤追求の爲めに行ふ競争であると、右の例でIからVに至る企業の平均剰餘價值は二二、

資 本	剰餘價值	剰餘價值	利潤率
I. 不變資本(80) + 可變資本(20)	100%	20	20%
II. " (70) + " (30)	"	30	30%
III. " (60) + " (40)	"	40	40%
IV. " (85) + " (15)	"	15	15%
V. " (95) + " (5)	"	5	5%
合計 " (390) + " (110)		110	110%
平均 " (78) + " (22)		22	22%

は、之等の資本構成が各異なる企業に於けるものなのである。剰餘價值と利潤、各の率の不一致は斯くて極めて明瞭である。併し此の一見解き難いやうに見える關係に對するマルクスの解答は案外に簡單である。即ち各企業が擧げる異なつた剰餘價值を利潤として均等化するものは、資本家の利潤追求の爲めに行ふ競争であると、右の例でIからVに至る企業の平均剰餘價值は二二、

利潤率は二二%となるから、各企業が此の利潤を儲ける場合、各の生み出した剰餘價值に比しての剰餘と不足とは I, (-)2, II, (+)8, III, (+)18, IV, (-)7, V, (-)17 となるが、此の凹凸は資本家の競争によつて平坦となり、一樣に同率の利潤率を得るといふのである。剰餘價值と利潤との間の直接關係について其の間不一致の到底解くべからざることを推論し、それに對するマルクスの解答を待つてゐた經濟學者達にとつて、之れは餘りにもあつけない答辯であつた。資本家が利潤を追つて企業を經營する以上、利潤率が均等化傾向をもつことは、經濟學者自身も承知のことである。問題は之れと剰餘價值とを如何に結付けるかにある。而もマルクスの解答は之れに對する豫期の態度如何によつては掴み所のないものでしかない。經濟學の立場からは眞によい攻撃點である。併し吾々の解釋からすれば、此の剰餘價值と利潤との間の全體としての一致と各個々の場合としての不一致こそ却てマルクス説の考へぬいた深い構造であると思ふ。若し個個の場合についてまで橋渡しが出来たとしたら、剰餘價值説もその根據となつてゐる價值法則も、實に支離滅裂なものとなつて終はなければならないと考へるのである。剰餘價值や後に述べた價值法則の世界は、吾々の解釋を以てすれば現實の世界ではない。資本主義的生産の專ら行はれてゐる世界ではないのである。後の世界は資本家達の眼前の世界であり、マルクス自身のいふ

やうな資本家の背後の世界では決してない。両者は世界が違ふ、此の異なる世界を突き合せてこそ資本主義的生産の構造上の特徴は明瞭にされ得るのである。それだから剰餘價值が利潤に直接橋渡しがされないのは、マルクスが抑々價值法則を示した時から定まつてゐた道筋であつたので、此の世界の相違に氣付かず、價值法則を以て現實の價值關係即ち價格關係なりと解して來たために、利潤の問題まで來て初めて驚くのであらうと考へられるのである。

斯くて吾々は最後に價值と價格との關係を見ることとなるが、此處に於ては價值法則の世界と資本主義的生産の世界とが對蹠的なものであることが愈々明かに出てゐる。マルクスの價值法則にいふ價值とは、財貨生産に必要な労働の量であるのに引替え、價格は生産費用に利潤を加へたものであるから、以上の例に於けるIの生産物價值は一一〇であるのに對し、價格は一二二、IIにあつては價值は一三〇であるのに價格は前と同じく一二二、IIIにあつては又同一の價格に對し價值は一四〇といふやうに、兩者の間の差異は顯著なものがある。價值を以て價格と同一視し難いことは歴然たるものである。それにも拘らず價值は價格を説明し、剰餘價值は利潤を説明すると考へられてゐる。故に其の説明といふのは、各兩者が等しいことに依てではなく、異なることに依て相手方の特徴を指摘する方法だといふことが氣付かれなければならない。此點を明かなら

しめるために、吾々はマルクス經濟學說の出發點に立戻つて、その謂ふ價值法則に一瞥を投じておかう。マルクスによれば、財貨價值はその生産に必要な労働量である。も少し詳しくいへば、此の労働量は生産に社會的に必要なものでなければならぬ。之れは既に現實現象に於ける價值ではない。次に交換は等價物の間に行はれる。二〇ヤールの麻布と一着の上衣とが交換されれば、此の兩財貨の生産には等量の労働が含まれてゐる。之れも亦現實ではない。而も此の價值實體が労働量だといふことと、交換關係は等價物間に於けるものだといふ二の認識こそ價值法則であり、爾餘の價值關係を規定する根據である。さればこそ上に述べたやうに、労働力の價值は労働力を維持更新するための労働者の生活資料であり、不變資本は假令生産の領域に入つても、價值を増加し得ないものである。之等は資本主義的生産制に養はれた眼には見えない認識でなければならぬ。そこで吾々の問題は一層深入りして、それではマルクスは此のやうな價值法則を何處から構成して來たかが問はれるであらう。

マルクスの價值論の根據にまで入り込むためには、吾々は彼れの唯物論哲學に觸れなければならない。吾々の了解する所では其の唯物論といはれるものは、實在が吾々の外部にあつて吾々の認識はそれを受容れることから構成されるといふ意味での一般哲學上の所謂唯物論ではなく、意

識の世界を以て吾々の働きが外部との結付きによつて形成されるといふ観點をとるものである。かう見るならば、實在の世界は吾々の働きを一の根據とし、外界の存在を他の根據とするものとなる。そして此のやうな實在の世界は、經濟の世界に、その典型的な一の縮圖を見出すであらう。何となれば經濟の世界は、人間にとつて外部の存在である財貨と人間の労働との構造する所だからである。之れは經濟の絶對的構造の世界であると共に、意識の超越的世界でもある。個人の偏見にも、時代や階級の偏見にも歪曲されない存在である。資本主義的生産の世界からも超越してゐることは言ふ迄もない。眞實を見るために極端に偏見を恐れたマルクスの絶對認識の世界は、斯くて彼れの價值理念を作り出した。併しそれは飽くまで超經驗の構造をもつことを忘れることは出来ない。同様にして等價值交換の理念も經驗世界に於けるものではない。經驗の示す所によれば、封建社會に於ては、領主は政治上の権力を用ひて貢獻を要求し、資本主義社會にあつては資本家は不拂労働によつて労働を搾取する。社會の歴史的構造は種々異なつた交換關係を作り出してゐる。それに對して絶對的な人間の關係はどうであるか。交換當事者としては人は人と等しい立場に立つのが、自然權思想を少くも遠い淵源とする社會哲學である。それは時と處とを超越した關係である。かう解釋することに誤りがなければ、マルクスの價值法則は歴史の相對的

世界を超越した普遍認識となる。さればこそ吾々の見る所では價值は價格と異なり、剩餘價值は利潤と異なると共に、夫等の差異を通して資本主義社會の特質を別決することが出来たと解するのである。

以上マルクスの剩餘價值説に對する紹介と解釋とを試みて來たのであるが、それに關する解釋は人によつて素より多々異見があると思ふ。従て以上は吾々の理解に過ぎないことは云ふまでもない。又以上の説明は他の學説に比較して意想外に長くなつた感がある。けれども生産管理の問題は利潤の發生を生産領域に探し求めることに於て、現にマルクスの剩餘價值觀に近づいて行く見方を示す今日、最も簡潔に扱つても以上に試みた位の了解は斯説についてもつてゐなければならぬと思ふ。加之その示唆する所は思索の立場や方法に於て、その理論展開の結果に於て、爾後の分配問題の研究家をどれほど鍊磨して來たか知れない。近時資本主義に關する數多き研究の大半は、此説によつて動機づけられて來たと考へられる。けれども利潤の本體を剩餘價值のうちに展開し來つたマルクスの偉大な努力にも拘らず、吾々はそれを全面的にとり入れることは出来ない者である。その主な理由は二ある。一は剩餘價值を不拂労働に求めるのは一種の歸屬方法であること、他は吾々が分配の現象をも含めて經濟現象の解釋を、總て社會生活の歴史的構造に求め

てゐるに對し、マルクスの方法は超歴史的實在の世界から説明を下してゆく方法たることである。不拂労働からのみ剩餘價値が出て來ると考へる以上、之れを基礎として社會權を構成するならば、それは疑ひもなく『労働全收權』とならなければならぬ。それに引きかへ吾々のやうに、生産構造を以て社會的協力とし、生産の目的を生活支持とするならば、吾々の要求する所のものは『生存權』でなければならぬ。労働全收權が生存權か、それは結局同一線上に立つ思想ではあり得ないのである。

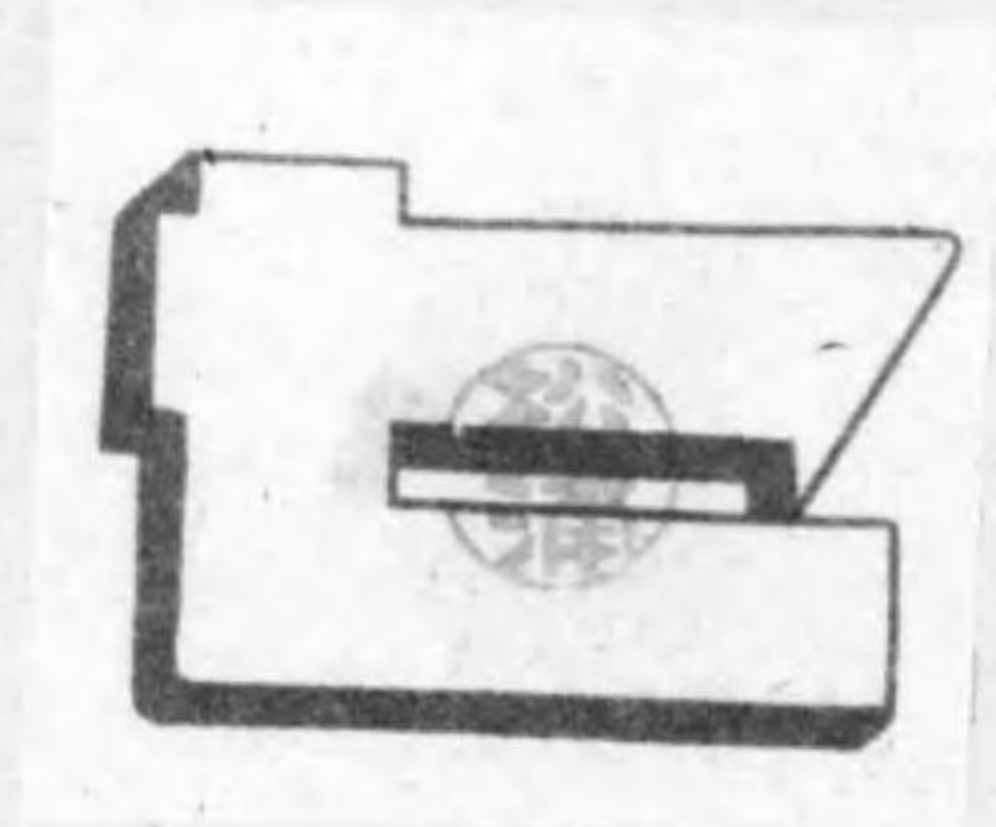
利潤發生原因についての吾々自身の見解については、以上の所述中では僅かに暗示が與へられてゐる程度に止まるが、既に勞銀の節で述べたやうに企業者は生産の結果から地代と勞銀とを引去るに當り、普通の状態にあつては利潤が殘留するやうに配慮し仕組んで來たのである。即ち地代と利子とを別とすれば、利潤が殘るやうに勞銀の高さに關する取引をして來たので、利潤を殘すに當つても之れを出來るだけ大ならしめるやうに、自己と労働者の地位とを利用して來たのである。それは俄かに計算されたのではなく、勞銀の歴史的構成に沿つて成し遂げられて來たと考へる。本節に此點を詳述しないのは、前節の説明と重複することを避けたいからであるから、讀者は前節の所述を以て補つて頂きたい。

× × × × ×

以上を以て吾々は此の入門書で述べたいと思つてゐた問題全部を漸く取扱ふことが出來た。漂泊の人西行の孤獨生活まで引合ひに出して、一般生活構造の問題から出發し來つた吾々は、其處で足固めをした道を唯一筋に辿つて、經濟現象の問題を總て生活の社會的歴史的關聯のうちに眺め、その立場から解釋しようとする努力が來たのである。最後に取扱つたマルクスの學説は、人間を以て働きかけるものと考へることに依て絶對の世界を打立てたが、吾々は人間を以て働きかけると共に働きかけられるものと見なければならぬと考へることに依て、歴史と社會的連帶の相對的構造の中に、最後の分配現象をも解釋せんとして來たのである。

5755

昭和二十二年七月五日印刷
昭和二十二年七月十日發行



經濟學序論
定價 四十圓

著者 松浦 要

發行者 鐵村 眞一

印刷者 荒井 政吉

印刷所 東京都江戸川區平井二ノ四一〇
東光印刷株式會社

發行所 東京都江戸川區平井二ノ四一〇
株式會社 生 活 社

配給元 東京都千代田區神田駿河臺二ノ五
電話 神田二二八三
會員番號 A 一一九〇五四
日本出版配給株式會社
東京都千代田區神田駿河臺二ノ五

終